

---

# 腹黒ディセンダーのドタバタな日々

ルナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

腹黒ディセンダーのドタバタな日々

### 【Nコード】

N9728N

### 【作者名】

ルナ

### 【あらすじ】

ディセンダーの少女、ルナ・チエイサーは、腹黒い少女である。この物語は、ディセンダーとその姉弟が、仲間を巻き込んだり巻き込まれたりして大変な日々を送る物語である。

## 第一回キャラ紹介（前書き）

この小説には、多少のネタバレを含みます。  
キャラが壊れている人もいます。

悲惨な人もいます。

それでもいい方はお入りください。

## 第一回キャラ紹介

ルナ・チェイサー

ディセンダーの少女。

腹黒いが、心優しい。

好きなものは、本と家事と料理。

本はオールラウンドになんでも読む。

カノンノ・イアハート

かわいいけれどちょっと腹黒い少女。

ルナのことは姉みたいに思っている。

もっぱらスケベ衆が武器の被害にあう。

プレセア・コンバティール

物静かだけどちょっと腹黒い。

かわいいのに結構きついことを言う少女。

クラトスは生理的に気に食わないらしい。

ジーニアスのことを愛している。

コレット・ブルーネル

天然百パーセント神子。

何にでも「わんたるー」とつけたがる少女。

基本心優しい。ロイドの恋人。

ティア・グランツ

本名がすごく長い少女。

クールな美人だが、

ルークのことになると取り乱す。

ルークに片思い中。

エステリーゼ・シゼス・ヒュラツセイン  
あだ名はエステル。天然なお姫様。

ユーリのことを愛しているが、  
彼には子供扱いされていると思っている。

ロイド・アーヴィング

勉強をしないタイプの馬鹿の少年。

基本的には頭は悪くないと思う。

クラトスは嫌いではないが、コレットの悪口  
を言うので、わずらわしく思っている。  
コレットの恋人。

ジーニアス・セイジ

ギルドメンバーでも結構大人な少年。

だが、プレセアのこととなると  
急に子供っぽくなる。天才児。  
プレセアに片思い中。

ルーク・フォン・ファブレ

世間知らずな少年。基本つつこみタイプ。  
やさしいので、結構周りに人が集まる。  
ティアに片思い中。

ユーリ・ローウェル

子供が多いギルドメンバーでも  
数少ない大人メンバー。

かなりの甘党。エステルのが  
好きだが、からかってしまうので、  
告白ができずにいる。

ミント・アドネード

心優しい少女。クレスとは恋人同士で、結構初々しい二人として有名。

誰にでも分け隔てなく回復術を施す。

クレス・アルベイン

クール熱血タイプ。

お人よしなくらい優しい。

ミントとは恋人同士。

アーチェ・クライン

××料理人の少女。チェスターの彼女。

ちよつと腹黒いところがある。

怒ると術で他人を威す。

チェスター・バークライト

妹思いというより、もうシスコンな少年。

アーチェの彼氏。とりあえずはスケベ衆には入っていない。というか、断った。

藤林すず

幼いながら優秀なくの一。

基本大人しい。かなりの甘党。

ファラ・エルステッド

かなり強い格闘家の少女。

メンバーでも強い方。

リッドが好き。

リッド・ハーシエル  
かなりの大食いな少年。  
ファラが好き。

チャット

船長なのに、ジェイドに役割を取られる  
かわいそうな少女。かなりの甘党。

キール・ツアイベル  
かなり頭がいい少年。あまり目立たない。  
メルディシックに陥ることが多い。

ルーティ・カトレット  
お金好きな少女。だが、あまり金のない  
スタンのことはちゃんと好きらしい。  
玉の輿は狙っていない。

スタン・エルロン  
お人よしと言われやすい少年。  
ルーティのことが好き。ねぼすけの一人。  
未来ではカイルの父親。

フィリア・フィリス  
科学者として日夜ボムを作る少女。  
つきまとうコングマンが嫌いで、  
たまに毒を盛つたりしているが、効かないらしい。  
スタンに片思いしているが、想いを告げる気はない。

リオン・マグナス  
かなりの甘党の少年。基本ツンデレ。

プリン坊っちゃんとかまに呼ばれる。  
カップリングは決まっていない。

リリス・エルロン

寝ぼすけ三人組、スタン・カイル・セネル  
がいるので、大変な毎日を送る少女。

ルーティやクロエと仲がいい。

ウツドロウ・ケルヴィン

空気王でロリコン気味な青年。

大人メンバーの一人。

アニスの玉の輿のターゲットに  
されている。たまにチエルシーシックにかかる。

マイティ・コングマン

フィリア限定のストーカー。

嫌われてるのに気づいていない。  
結構うぬぼれ屋。

リアラ

恋人を操作する賢い聖女。

決して腹黒くはない。

ちゃんとカイルのことは愛してるらしい。

カイル・デュナミス

恋人に操作されていることに気付かない少年。  
ねぼすけの一人。

未来の英雄を目指している。リアラが大好き。

ナナリー・フレッチ



姐御肌の少女。お母さんタイプ。  
たまにロニシクに陥る。

ハロルド・ベルセリオス  
仲間を勝手に実験体にする  
マッドサイエンティスト。

リオンが少し気になるらしい。

リフィル・セイジ  
××料理人。味見はしないし作った料理も食べない。  
普段はクールだが、遺跡モードに入ると乱暴的になる。

ゼロス・ワイルダー  
スケベ衆の一人。女を見かければオールラウンドにくどく。  
ちなみに、女性メンバーはすでにくどかれてるらしい。

クラトス・アウリオン  
ロイドの父親。かなりのムスコ。  
プレセアに嫌われ、ロイドにはうっとおしがられる  
可哀そうな人。

クレア・ベネット  
料理好きで優しい少女。  
ヴェイグの幼馴染。

ヴェイグ・リュングベル  
「クレアクレアうるさい」少年。クレアがいるのに  
叫びまくっている。空気王に似ているらしい。

アニー・バース

恋愛小説が好きな少女。ルナと本を貸し借りする関係に。  
パニールやカノンノとも仲がいい。マオに片思い中。

マオ

言葉の最後が何故かカタカナになる少年。  
ヴェイグたちと仲がいい。アニーに片思い中。

ユージーン・ガラルド

大人メンバーの一人。あまり目立たない。  
ティアやプレセアに狙われているらしい。

アニス・タトリン

お金が大好きな未恐ろしい少女。  
ウツドロウから金を巻き上げている、  
という噂も……。いろいろ苦労しているらしい。

ガイ・セシル

ルークと仲がいい、音機関マニア。  
優しいのだが、おせっかいな部分もあつて  
ひどい目にあう。女嫌いと言われる時もあるが、  
彼曰く女性は大好き、らしい。

ジェイド・カーティス

仲間を実験体にしたたり嫌がらせを  
したりするネクラマンサー。  
以外と人望はある。影の船長。

アッシュ

つれない性格の少年。だが、仲間のことは大事に  
想っているらしい。これから苦労するであろう人。

イリア・アミーニ

好きな相手をいじめまくるタイプの少女。  
ちよつと悪役みたいな笑い方をする。

ルカが好きだが、想いには気づいてもらっていない。

ルカ・ミルダ

すぐに泣くので、イリアやスパイダにいじめられている少年。  
実はかなり強い。イリアが好き。

スパイダ・ベルフォルマ

スケベ衆の一人。だが、ゼロスよりはマシなほう。  
結構律儀。イリアと組んでルカをよくいじめている。

ルビア・ナトウィック

カイウスとは、「ケンカするほど仲がいい」関係。  
ちよつと気が強い少女。

カイウス・クオールズ

ルビアとは、以下省略な関係。くわしくはルビアの欄を  
見よう。特殊な変身能力を持つ少年。

変身するたびに、プレセアやティアに狙われているので、  
大変困っている。

クロエ・ヴァレンス

男勝りな少女。素直になれなくて、なかなかセネルに  
告白できない。ある意味ツンデレ。

セネル・クーリッジ

激鈍な少年。ねぼすけの一人。

クロエの気持ちにはこれっぽっちも気づいていない。  
たまにシャーリイシックにかかる。

パニール

カノンノの育ての親。

ほやほやしているが、

たまにすごいことを言う。

ルナとは本を貸し借りする仲。

ゲーデ

ツンデレな少年。ルナに腹ペコなところを  
助けられてから、彼女に恋心を抱く。

バルバトス

いかつい体つきの戦神。ゲーデとおなじく  
ルナに助けられた。彼女のことが好きに  
なるが、まったく相手にされない。

## 第一回キャラ紹介（後書き）

今回は今現在のキャラ紹介です。

多分原作にいるキャラは全員

書いたつもりですが、

もし「あれ、この人がいない？」

と思った方はご一報ください。

すぐに追加します。

お話は次回からです。

## 腹黒ディセンダー登場（前書き）

この作品はネタバレを含みます。

キャラが壊れています。

それでもいいかたはお入りください。

## 腹黒ディセンダー登場

ピンクの髪を変わった形に結った少女、

カノン・イアハートは、洗濯ものの入った

籠を持って甲板を歩いていた。後ろから、

ふわふわと育ての親のパニールが、せんとくばさみ

を持って歩いてくる。緑の髪を肩のあたりでそろえた

少女、ファラ・エルステッドと、ピンクのツインテール

ヘアの、プレセア・コンバティールもいた。

今日の洗濯当番は、彼女たちなのである。

バンエルティア号では、基本当番制がなりたっていた。

「今日もいい天気だね!!」

「本当にそうね」

「今日もイけるイける!!」

「洗濯日和です……」

四人は口ぐちに言い合いながら、洗濯ものをかごから

取り出していた。なんとなく、甲板には全員がそろっている。

カノンが服を干そうとした、その時だった。

「ひ、人が……!?!」

彼女は思わず服を取り落とす。なんと、空から少女が

落ちてきたのだ。全員がギョッとしたように少女を見ていた。

めったに驚かない、くのーの藤林すずや、プレセア、

神子のコレット・ブルーネルさえも、目を大きく見開いている。

と、少女がぱっちり目を開けた。その目は、宝石のように

きらきらときらめく紅だ。金髪を、二つに結び分け、

紅い月の髪飾りで留めている。青い満月型のペンダントが、

豊かな胸元で光る。小柄なかわいらしい少女だった。

ふっ、と少女の口元に笑みが浮かぶ。次の瞬間だった。

少女は空中で一回転すると、見事な着地を決めた。

おおー、と歓声が上がる。少女の紅い目と、カノンノのきれいな緑色の目がぶつかった。

「私はルナ・チェイサー。ディセンドーだ」  
じろりと周囲を見渡し、少女はそうのたまったー。

その場は騒然となった。ディセンドーは、世界を救うといわれた英雄である。

それが、いきなり現れたのだ。驚きもひとしおだろう。

「でい、ディセンドーって記憶がないんじゃないの？」

愛用のディセンドーについての本をどこからか出した

カノンノは、とりあえず聞いたが、その声は上ずっていた。

いつも輝いている瞳は、ひととき美しく輝いている。

「記憶はないよ。だが、私は世界樹に情報をもらっているだけだ。情報では、ディセンドーは後二人いるらしいぞ」

「その情報、くわしく教えてー！」

カノンノがルナの両手を握って言った。

ルナはにつこりと笑う。かわいらしい笑みに、

男性陣が思わず見とれた。

「いいよ。一人は、私の弟・ルミナ。もう一人は、

私も知らない。世界樹のやつが教えてくれなかったからな。

面白くないから、って何だよ。いっそ燃やすか」

いきなり物騒なことをのたまう英雄だった。

つつこみ役としての役割を持っている、

赤毛短髪のルーク・フォン・ファブレがつつこむ。

「いやいやいやいやいや！！ 燃やしちゃまずいだろー！！」

「燃やした方が、私のため、世界のため」

「あんた本当にディセンドーか！？」

「親善大使よ、マナの時代は終わったのだ」

「終わってねえだろー！！ 勝手に終わらせんなあああああつー！！」  
思い切りつつこむルーク。思い切りすぎて、ちよつとせき込んで



いた。

「代替エネルギーが見つかったってんだから、もうマナなんていらないさ。」

賽は投げられたのだ、ルーク・フォン・ファブレ!」

どこかで聞いたことのあるセリフを引用するルナ。

それに、ルークは載せられてこれまたどこかで聞いたセリフで返した。

「くっ! 冗談ではない!! って、何やらせんた、この野郎!!」  
ルークはつつこみすぎて疲れていた、それに、ルナは黒笑いをしてみせる。さっきのかわいい笑顔とは大違いだ。

「冗談だよ、親善大使殿。本気にしたのかね?」

「冗談に聞こえねえええええ!!」

ついに泣きだしたルークが、従者のガイ・セシルになぐさめられていた。

それを無視してルナは歩き出し、とある人物のもとへ歩み寄る。

その人物とは、船長であるチャットだった。

「君が船長だね。これから、私はここで暮らすので、よろしく頼む」

なぜわかったのかと言うと、海賊帽!! 船長とルナが勝手に考えた結果である。だが、当たっていた。

「うっうっうっ!! 嬉しいですうっうっ!!」

いつもジェイド・カーティスが船長だと勘違いされてしまうので、あまりの嬉しさに彼女は泣きだした。

「泣くな。かわいい顔が台無しだぞ。ほら、笑って」

涙をぬぐってやり、につこりと笑うルナ。

あまりに男前なセリフに、彼女はまっかっかになっていた。涙など瞬時にふっとんでしまっている。

一斉に、女性陣がルナに周りに集結した。

その笑顔は太陽のようにきらめいている。

だが、それに反比例するように、彼氏もしくは

片思いの男性陣が暗い顔になっていた。

中には、絶叫しているものもいる。

「クレアアアアアア！」

「プレセアアアアア！」

「ミントオオオオオ！」

「ティアアアアアア！」

「コレットオオオオ！」

「リアラアアアア！」

「ファラアアアア！」

「メルディイイイ！」

「ナタリアアアア！」

役二名、関係ないやつが叫んでいた。

ちなみに、上から、ヴェイグ・ジーニアス・クレス

・ルーク・ロイド・カイル・リッドである。

残りはキールとアッシュである。

関係ないのに叫ぶな、と袋叩きにされていた。キールだけ。

アッシュはそれを察したのか、一足先に逃げている。

初登場からまだそんなに経っていないというのに、

ルナは早くもかなりの人数に恨まれていた。

涙目で睨んできている。

「あなたこそ、真の英雄よ！！　お願い、私の英雄になって！！」

栗色の髪にレンズの髪飾りをつけた少女、リアラはうつとりとした目で彼女を見つめていた。恋人のカイル・デュナミスが、

涙目で彼女にすがりつくが、振り払われてしまう。

「リアラああ。戻って来てよー、捨てないでええええっ！！」

ルナは困ったような顔をしていた。女性である彼女は、

もちろん女性とつきあったりはできない。

だが、フェミニストでもあるので、むげにできないようだった。

「ルナってかっこよくて、すてき……。私、ロイドと分かれる

から、ルナつきあってー！！」

コレットがいきなり抱きついてくる。空のような青い瞳が、

ルナだけを見つめていた。尻尾を振る犬のように、羽根がゆらめく。

「コレットおおお、目を覚ましてくれ！！ あいつは女だぞ！！」

「ロイド、放っておけばいい、あんな腹黒神子なぞ」

ちゃっかりと息子をなぐさめようとする、ムスコンなクラトス・

アウリオン。が、ロイドに腹へのクリティカルパンチをくらった。

「コレットの悪口を言うなああああつ！！」

「ぐはあつ！！ ロイド……強くなったな……」

気絶したクラトスは、何故か彼を嫌っているプレセアから

頭を踏まれていた。邪魔です、と蹴っ飛ばさえる。

「私のお姉さまになってください、ルナさん」

「ルナは私のお姉ちゃんになるんだよ！！」

「私です、カノンノさんはひっこんでてください」

「なんですってえええつ！！」

睨みあうカノンノとプレセア。ルナが困ろつがそっちのけだった。

「君たち、いい加減に……」

さすがに文句を言おうと口を開きかけたが、ドンツと別の少女がぶつかってきたので、気がそがれて黙った。

茶色い髪で右目を隠した、ティア・グランツである。

他の女性陣と同じように、目がルナに集中していた。

「私と友達からいいから関係を始めましょう！！」

ルークが泣いていた。けれど、ティアには目に入っていないらしい。

右にコレット、左にティアに抱いたまま、ルナはため息をついていた。

男なら「両手に花」なのだが、ルナにとっては邪魔なだけだった。いいなあ、とか言ってくる、ゼロス・ウィルダーやスパード・ベルフォルマをぎろつと睨みつけている。

「ルナとルカと性別入れ替えたいわよね」

笑いながら彼氏を貶めるイリア・アミーニ。

泣きながらルカ・ミルダが呻いていた。

「ひどいよ、イリアああ。うううっ!!」

困り果てるルナに、追い打ちをかける人物がいた。  
ジエイドである。からかわれたルナは弓を構えた。

「もてますね、ルナ。うらやましい限りです」

「ぶっころしていいか？ あんた」

「遠慮しておきます」

「逃がすか!! ワイルドギース!!」

ルナの秘奥義がジエイドを戦闘不能に陥らせた。

「ゆ、油断、しましたか……」

さらに女性陣の熱が上がって行っただ。

「ルナ、このハロルドDX（性別変化系）飲んで」

「いやだ!!」

「ルナさんが男になったらもてる確率、百パーセント」

「飲んでください、船長命令です」

「みなさん、私がおさえてますので、早く薬を!!」

「逃がしません」

「私も協力します」

ハロルド・ベルセリオス、チャット、プレセア、さすが・エステ  
ルが

ずいっと詰め寄ってくる。助けを求めてカノンノを見るが、

「完璧な男のディセンダーいいかも」

と言いながら目をきらきらさせていた。

「え、ちよっ!! 誰か助けるおおおっ!!」

たまたま近くにいたガイとゼロスを女性陣の前に蹴っ飛ばし、ルナはなんとか助かった。

悲鳴が上がっていたが、おかまいなしに駆け抜けた。

ちなみに、この騒動の原因は、ハロルドが女性陣だけに、  
女性を好きになる惚れ薬を飲ませたからだと知るのは、  
まだまだ先のことだった。

ルナは甲板から逃げ出していた。と、目の前を血のように紅い髪の少年が歩いて行くのを発見する。胸がいきなり高鳴った。顔が赤らんでいくのが、自分でもわかる。素敵な人だと思った。

恋は盲目とはよくいったものだ。

けれど、ルナの恋愛経験値はほぼ0に近かった。なので、いきなり悪口を彼に叩きつけ、

彼の眉を吊り上げさせた。

ルナは愛した人と大嫌いな相手は、とことんいじめ抜くタイプの人間である。

「おいデコハゲ、お前、名前はなんだ」

「誰がデコハゲだ、貴様あああああつ！！」

俺にはアツシュっていう名前があるんだよつ！！」

剣を抜いた彼にさらに悪口を投げながら、

ルナは逃げ出した。殺気を覚えたアツシュは、剣を振りまわしながら追いかけてくる。

彼を想って笑いながら、ルナは明日からこいつをどうやっていじめてやろうかな、と黒いことを考えるのだっ！。

## 腹黒ディセンダー登場（後書き）

ついに本編投稿です。

腹黒い主人公ですが、どうか見てやってください。

## 苦勞人な赤毛長髪少年の長い一日

ディセNDER・ルナがやってきた、翌日のことだった。ちなみに、女性陣は薬の効果が切れて元にもどっている。

ハロルドはあの後、女性陣からこわいお仕置きされたいらしい。内容は……ここでは言えないほど恐ろしいということだ。

赤毛短髪つつこみ少年、ルーク・フォン・ファブレは、黒髪ツインテールのアニス・タトリンや、茶色い髪で右目を隠した少女、ティア・グランツと甲板にやってきた。

そして、目をこれ以上ないほど大きく見開いた。

なんと、アッシュが洗濯ものを干していたのである。

あの、ゲームとかも参加しない彼が。

つきあいのすごく悪い彼が。

当番は必ずサボる彼が。

「ほら、ちゃんとやれ。洗濯ものはこう干すんだ、

物知らずめ」

「誰が物知らずだ!!」

「もえかすと言った方がいいかね?」

「悪化してんじゃねえかあああつ!!」

隣には、ディセNDERのルナ・チェイサーがいた。

同じように洗濯ものを干し、しかも悪口をアッシュに投げている。

同じ当番とおぼしき黒髪長髪のユーリ・ローウェルと、黒髪短髪のリオン・

マグナスはプリンを食べながらさぼっていた。

「何やってんだよ、ルナ」

ルークが彼女に近づく。きれいな紅い目がじいつ、とルークを見た。

瞬時に視線はアッシュに移り、首をかしげる。

「君たちは、似ているようで似ていないな」

「どういう意味だよっ！！　ってか質問に答える！！」

「見て分らないのかね、よっほどの馬鹿だな」

「憐れむような目になったのを見て取ってルークは叫んだ。

「そういうことじゃねえよっ！！　なんでアッシュが

洗濯もの干してんのかって言っただよっ。

あいつ当番さぼってただろ！！」

「仕事やらんと頭がはげる……頭がはげる……　って

言い続けてたら、快くやってくれたぞ」

「脅しじゃねえか！！」

あきらかなる脅迫だった。どことなく、アッシュの顔が

怒りで青ざめているように見える。洗濯ものを持つ手に、かなりの力がこもっていた。

「アニス、手伝ったら百万ガルドやるぞ」

「マジで！？　アニスちゃんがんばっちゃう！！」

腹黒ディセンドーはメンバーの好きなもの&弱みを

しっかりと把握していた。アニスの目がガルドに変化している。

パンパンとルナは手を叩き、最後の洗濯ものを干していた。

「もう終わってんじゃん」

「そっちじゃないよ。手伝うのは奴らへの制裁だ」

視線の先には、もちろんサボリ連中の姿があった。

早速アニスが不思議なぬいぐるみ、トクナガを

巨大化させていた。ルークとティアはルナに何事か

ささやかれ、臨戦態勢を取っている。

（ミュウ人形！！　ミュウ人形！！　ミュウ人形……………！！）

（ティアのためだ、悪く思ふなよ、ユーリとリオン！！）

そして、ルナは暇そうに海を見ていたガイ・セシルに詰め寄った。

「協力してくれるよな、ガイ？」

女性恐怖症のガイは、悲鳴を上げて逃げる。だが、ルナはどこまで



も詰め寄った。

ついには壁際まで追いつめて、彼を逃げられないようにする。

「観念しろ、ガイ。やらないと抱きつくぞ。ぎゅうつとね」

「何で俺だけ強制なんだよ!？」

「スケベ大魔王だから」

「あれは濡れ衣だつて言ってるだろうがあああああつ!!」

怯えるガイに、ルナはこれ以上ないほどの笑みを向けていた。ものすごく楽しそうだ。

「早く決める。さーん、にーい、いーち」

「ちよつ!! 早い早い!!」

ルナがいきなり抱きついた。豊かな胸が腕に押しあてられる。ふわり、と花の様な香りがただよった。

ガイは紅くなつたが、次いで青くなつた。かなりの力が込められている。

ぎゅうつどころじゃなかった。抱きつぶすくらいの力だった。みしみしと骨がきしむような音がした。

「ぐあああああつ!! 死ぬ死ぬってえええええつ!!」

「骨が折れる前に投降しろ」

スケベ衆の、長い長髪の赤毛の青年、ゼロス・ワイルダーと、緑色の髪の少年、スパイダ・ベルフォルマがいいなあと言っていた。

(見てないで助ける!! byガイ)

結局ぎゃあぎゃあとやっているうちに、ユーリとリオンは

逃げてしまっていた。ルナは感情のない目で彼を見る。

「あーあ、お前のせいで逃げられた」

「なんでだあああああつ!!」

ティアとアニスが怖い顔でガイを睨んでいた。

「百万ガルドがパーじゃん!! やろーてめーぶっころす!!」

「ミュウ人形の敵!!」

ぎゃああああつ、と悲鳴が上がった。ルークは二人が怖かったので、

逃げたらしい。ボコボコにされたガイは、金髪を長く伸ばして法服を来た少女、ミント・アドネードに回復してもらったのだった。

「この腹黒神子が！！ ロイドに近づくな！！」

その頃、食堂では、親バカで有名なクラトス・アウリオンが、ロイド・アーヴィングの彼女、コレット・ブルーネルに悪口を投げていた。コレットは悲しそうな顔をするだけで、何も言い返さない。ロイドは今いなかった。

いたらクラトスを殴っていただろう。

プレセア・コンバティールが今にも殺人を犯しそうなほどの黒いオーラをだしており、ジーニアス・セイジに必死に止められていた。

「いい加減にしろ、この親バカが！！」

キレたルナが、クラトスに蹴りをたたき込み、船から放りだした。海でしぶきがあがる。

コレットはオロオロしていた。

「る、ルナ、駄目だよ。クラトスさんにひどいことしないで」

「大丈夫。死んではいないさ」

「で、でも……」

あんなにひどいことを言われたというのに、コレットは海に蹴り込まれた

クラトスに同情的だった。そのことが、なおさらルナやプレセアの、クラトスへの怒りに火をつける。

と、カノン・イアハートの秘奥義詠唱の声が聞こえてきた。

ルナには気づいていなかったが、ゼロスとスパイダが彼女に抱きつこうとしていたのだ。

「今を超える力になるの！！ 刻め、ラブビード！！」

「ぎよはぐあぎよええええっ！！」

奇妙な声をあげる二人。気絶した彼らは、ミントの慈悲によってレイズデッドで復活をはたした。

そして、いろいろあったが、朝食の時間がやってきた。

ルナが腕を余すことなく奮った、さまざまな料理が並んでいる。

「今日はルナさんが作ったんですよ」

「おいしそうですね」

スタン・エルロンの妹、リリスが笑顔でそう言った。

カノンノの育ての親、パニールも同じように言う。

ほとんどのメンバーが、歓声を上げて料理に挑みかかる。

だが、動かない者が三人、いた。

「これは何の嫌がらせだ？」

「てゅーか何なんだ、これは!？」

「僕に飢え死にしろと言うのか!？」

クラトス・アッシュ・リオンである。

クラトスの皿には山盛りのトマト（しかも生）が、

アッシュのスープ皿にはタコとにんじんが山盛り、

リオンの料理は野菜オンリーだった。

ルナは何事もない顔で、一人一人に説明する。

「コレットの痛み、おもしろい」

「カレーだ。見て分らないかね」

「一食抜いたくらいで死ぬか、てゅーか食べる」

アッシュの分かる訳ねえだろ、というセリフを、

ルナは無視して、自分の分のミートパイを食べていた。

ちなみに、ユーリに嫌がらせをしていないのは、

彼のが好きなエステルと、ルナが仲がいいからである。

「うわあ、この焼きリンゴ、すごくおいしい!!」

「このグラタンもなかなかだよ!! ルナってすごいね!!」

「え!?! このケーキ、野菜のケーキなの!？」

ピーマンが入ってるの? 分からなかったよ!!」

「ルナの料理は最高だな!! このみそおでんうまいぜ!!」

カノンノ・ジーニアス・コレット・ロイドが口々に

ほめた。他のメンバーも、彼女の料理の腕をほめたたえる。

ルナは嬉しそうにニコニコしていた。

余談だが、食べれない三人は悔しそうな顔をしていた。

「喜んでもらえて私も嬉しいぞ」

「……料理を教えてルナ!!」

ルナは女性陣に取り囲まれた。ルナの料理は、店を出せば行列ができそうなくらいなのである。

今までに食べたことがない、至福の味だった。

「ルナ、アニスちゃんと一緒にお店やらない？」

アニスにそう言われ、ルナは少し迷ったという。

こうして料理教室が開催された。

ルナだけでは教えきれないので、何人か男性メンバーの力も借りることになり、料理上手なキャラが集まっている。

だが、ルナにトマトを大量に詰め込まれたクラトスだけが、その場にはいなかった。彼は今戦闘不能中である。

頼みの綱のミントはここにいないから、誰も回復するものはいなかった。

呼ばれたのは、ロイド・ジーニマス・ゼロス・アッシュ・ガイ。

青がかかった銀髪 of チェスター・バークライト、白っぽい銀髪 of セネル・クーリッジだった。

ルナはまず先に、女性陣に料理をさせた。

ほとんどのものが普通にできたが、失敗をやらかしたものが

何名かいた。ピンクの髪をポニーテールにしたアーチェ・クライン、

ジーニマスの姉・リフィル、ハロルド、緑の髪を三つ編みにした

フィリア・フィリス、プレセア、赤毛のイリア・アミーニである。

その中でも、一番まともののがイリアで、彼女がルカ・ミルダのために作ったチーズスープは、少し焦げてはいたが食べられた。

駄目なのは、他の者である。アーチェが作ったと言う、

本人曰くマーボカレーは、やけにどすぐろい色だった。

ごぼごぼと泡が立っている。フィリアの野菜サラダは

すべてが真っ黒、ハロルドがプリンだと言い張るものは、

何故か紫と茶色のマール模様、プレセアの木彫り型

チョコは、見た目はきれいだが、匂いがひどかった。

リフィルの炊き込みご飯は、明らかにレモンの香りがしている。

「……誰が食べるんだ、これ」

セネルが明らかに嫌そうな顔で言った。

講師の全員が目をそらしている。

誰だって、こんなものは食べたくないだろう。

「アッシュが食べ」

「何で俺なんだよっ!!」

ルナはアッシュに睨みつけられ、顔を赤く染めた。

彼は怒りのせいで気づいていないらしい。

それに気づいたのは、ガイだけのようだった。

「おい、ルナ。ちょっとこっちに」

「何だスケベ大魔王」

苛立った声でルナが返す。首をかしげたものの、

彼女は黙ってガイについていった。

誰もいないところに着くと、ガイはいきなり

口火を切った。

「ルナってアッシュのこと好きだろ？」

「!？」

ルナがまっかっかになった。

頬に手を当てて恥じらっている様子は、

とてもかわいらしい。ガイは思わず見とれたが、

すぐにその考えは撤回<sup>てっかい</sup>された。

ガスツ、と顔のすぐ横にとげのついたヨーヨーが

つきささったのだ。はらり、と髪がひと房切れる。

「バラしたら、命はないものと思え」

「……はい」

こうしてガイはルナの秘密を知ったのだった。

「プレセアの分はボクが食べるよっ!!」

木彫り型チョコの試食に名乗りを上げたのは、  
やっぱりジーニアスだった。熱っぽく見つめられ、  
顔を赤く染めている。

「ジーニアスのために作りました、食べてください」

ジーニアスは天にも昇る心地でチョコを口にした。

最初に紅くなり、次いで青くなり、最後には白くなって  
崩れ落ちた。それでも、チョコは吐き出さなかった。

「プレセアのチョコが食べられたなら、本望だよ……」

「ジーニアス……!! 誰かレイズデッドを!!」

親友のロイドが揺さぶるが、完全に白目を向いていて  
返事がない。女性陣は誰も気づいていなかった。

「アーチェ、そのマーボカレーよこせ。俺が処分してやる」

「食べてくれるの? チェスター!!」

チェスターは鍋に入ったマーボカレー(?)を全部食した。

アーチェに向かって笑顔を向けたが、その顔は青ざめている。

「ぐばあっ!! ああ……父さんと母さんがお花畑で手を振ってる」

「まだ逝っちゃ駄目だ、チェスター!!」

彼の親友のクレス・アルベインが飛び込んできた。

そこで二人の状態に気付き、ミントが回復させてなんとか助かった。

「フィリアさんの料理なら死んだって食うぜー」

明らかに危険だと思われるサラダを食べたマイティ・コングマン  
は、

なんと五体満足無事だった。チツとフィリアの舌打ちが響く。

天然と腹黒キャラ以外のメンバーは思わずぎよっとなった。

「毒を盛ったのに……もつと強力なやつじゃないと効かないんです  
ね」

（（（フィリア、恐るべし……）））

かわいい顔をしてむごいことをする女性である。

他の女性陣は、勝手に試食会をしていた。

「クレスさん、このシチューどうですか？」

「すごくおいしいよ、ミントー!!」

「どう、リッドおいしい？」

「やっぱりファラのオムレツは最高だなー!!」

「カイル、このマーボカレーどう？」

「リアラはいいお嫁さんになれるよー!!」

「やだ!! カイルったらー!!」

「ロイド、おいしい、かな？」

「ああ!! コレットのフルーツケーキはすごくうまいぜー!!」

「ルーク、これ食べてー!!」

「このショートケーキ店が出せるくらいうまいー!!」

「リーオン!! これ食べてー!。あんたの好きなプリンよ」

「これがプリンだと!? 誰が食べるか!! こんなのは

プリンへの冒涇だ!! ことわ……ぎゃあああああつー!!」

彼女または片思いの女性陣が男性陣に料理を提供する。

ほとんどがまともなものだったが、ハロルドが無理やり

リオンにプリンとは名ばかりの物体を食わせて泡を吹かせていた。

ルナは眉をしかめながらも、一口ずつ味見をしている。

「……アーチェ、これ、何を入れた？」

「えーとね、普通の材料と、隠し味にカキゴオリシロップ（いちご味）

と、バジリスクの鱗（もうその時点でカレーじゃない）と、

あとはルーンボトルー!!」

「貴重品とシロップとアイテムは以後使用禁止だ。

料理に手を加えるなー!!」

アーチェは頬を膨らませていたが、仲間の平穏のためにも  
ぜひそうするべきだった。

リフィルの料理にもルナは評価をくだす。

「リフィル先生、レモンが好きなのはいいが、炊き込みご飯

に入れるのはどうかと……」

「でも、ルナ、まだいい方だぜ。ちゃんと食える」

「姉さんの料理にしてはマシな方だね」

正直なロイドとジーニアス。キツとリフィルが睨みつけた。

「どういう意味かしら？ あなたたち？」

ヤバイー！ 二人は青ざめたが、ルナが助け舟を出したので助かった。だが、他の二人が被害にあう。

「って、ガイとアッシュが言ってたぞ」

「俺らかよてゆーか言ってないし！！」

「そう、あなたたちだったの？」

リフィルの怒りの矛先が、見事二人に移った。

彼女はにっこりと笑っているが、目は笑っていない。

「え、ちよっ、誰か助け……ぎゃああああっ！！」

こうしてアッシュの長い一日は終わったのだったー！。



## 苦勞人な赤毛長髪少年の長い一日（後書き）

次話投稿が少し遅れてしまいました。  
見てくださっている方、すみません。  
次回は新メンバーが加入します。

天然デイスンダー参入・腹黒おとぎ娘の初恋

青い青い空の下、ぎゃんぎゃんと言いつ争う声が

響いていた。一人の少年と、一人の青年が口ゲンカを

している。それを止める少女の声は、かなり小さかった。

喚いている少年は、紅い服を着たロイド・アーヴィンで、

それに言い返している青年は、親バカのクラトス・アウリオン

止めている少女は、長く伸ばした金髪のコレット・

ブルーネルである。今日はこの三人が洗濯当番だった。

「ロイド!! こんなドジな腹黒神子のどこがいいのだ!？」

「クラトスでめえええっ！！ コレットの悪口言ってるんじゃないよー！！」

「駄目だよ、ロイド！！ クラトスさんは、ロイドの大事なお父様なんだよ。」

三人はしゃべるほうにいそがしく、洗濯ものを干していなかった。金髪をツインテールにした少女、ルナ・チェイサーが代わりに干している。

何故か、クラトスだけは器用にしゃべりながら干していたが。

「あんなやつ、大切ななかじゃねえよ!!」

「ろ、ロイド……」

クラトスの顔が悲しみに染まる。コレットは珍しく顔を真っ赤にして

怒っていた。夕焼けに似た色の美しい羽根がひらめく。

「ロイドのバカ!!  
もう知らない!!」

コレットは大空へとはばたいて飛んで行ってしまった。

傷ついたようなロイドの顔が、しだいに怒りに染まっていく。

[...- - -] ~~~~~

ロイドは双剣を抜き放った。ぎよつとなり、クラトスが一步下が

「今のは私のせいなのか！？ デイセNDER！ 見てないで助ける！！」

紅き目がクラトスを見つめる。と、にっこりとかわいらしく笑った。

ものすごい笑顔でルナは言い切った。

「絶対に嫌」

「デイセNDERアアアアッ！！」

ぎらぎらと怒りを秘めた目をしたロイドが、双剣を振りかぶる。悲鳴と鈍い音が響く中、ルナは普通に洗濯ものを干し終えてその場から移動した。

「ルナちゃん、おはよー」

ルナが歩いていると、別の方向からゼロス・ワイルダーがやってきた。鮮やかな赤毛は、とてもよく目立つ。

今日はスケベ衆の一人、スパード・ベルフォルマは休暇中につき、いなかった。

「おはよう……」

「ところでさ、ルナちゃんって今フリー？」

「彼氏がいらないのか、ということならないが？」

「じゃあさー……俺様と付き合わない？」

後半はやけに真剣な顔でゼロスは言った。にこつ、とルナが笑う。  
「いいぞ」

「マジで！？」

強い力でルナはゼロスに抱きついた。小柄な体のわりに豊かな胸が、彼の手に当たって彼が赤くなる。

花の香りがふわり、と漂った。

「私に勝てたらの話」

ルナの抱きついた手に力が込められた。ゼロスは振り払おうとしたが、全く力が通じず、できなかった。

「だが、な！」

「る、ルナちゃ……うわああああつー!!」

ゼロスはそのまま海に投げ込まれた。

ルナが抱きついた恰好のまま、背負い投げをかけたのである。

「私に付き合おうなど、一億年早い……」

侮蔑の言葉は、いまだ海の中のゼロスには届かなかった。

クエストを受けに船長のチャットのもとへ行こうとした

ルナは、ピンクの髪を二つ縛りにしたプレセア・コンバテイル、  
ピンクの髪にリボンをつんだカノン・イアハート、

そしてチャット本人が飛び出してきたので、思わず横にそれた。

「どうした、君たち？」

「ルナ!! 新メンバーだよ!!」

「ここで働きたいという人が来ています」

「一人は、あなたの弟だと名乗っていますよ」

「ルミナか……わかったすぐ行く」

ルナは三人と共に新メンバーがいるという場所に向かった。

そこにいたのは、槍を持った黒髪の美女、テンションの高い

変わった格好のおっさん、隻眼のキセルをくわえた犬、

かわいいけれど生意気そうな女の子、ブーメランに似た武器

を背負った女の子、小さいけど大きな武器の少年、生真面目そうな

青年、

紫色の衣装の女性、長い金髪の男の子、プレセアに良く似た少女、

海賊風な恰好をした女の子、青い髪の青年、

そして、ルナに似た顔立ちをした、肩までの金髪の男の子だった。

「ルナちゃん、ひさしぶり!!」

ルナに似た少年が彼女に抱きついた。紅い目がきらきら輝く。

顔はどちらかというと女顔で、見た目が小柄なので、

服装を替えたら女の子にも見えそうだった。

「僕、ルミナっていうの!! よろしくね、皆!!」

「私、カノン・イアハートだよ。仲良くしようね」

「プレセア・コンバティールです」

「僕は船長のチャットです。新たな子分の参入を待っていましたよ」

ちなみに、他のメンバーは、ジユデイス、レイヴン、ラピード、リタ・モルディオ、ナン、カロール・カペル、フレン・シーフォ、藤林しいな、ミトス・ユグドラシル、アリシア・コンバティール、パティ・フルール、リーガル・ブライアンである。

それぞれに自己紹介した後、仲間のもとに案内された。

「しいな！！ それに、ミトスか！！ ひさしぶりだな！！」

「しいなたちと一緒に働けるんだね！！ エヘヘ……嬉しいな」

「ミトスもしいなも来てくれてよかったよ！！」

ロイド・コレット・ジーニアスは笑顔で言った。ちなみに、ロイドとコレットは仲直りをしたらしい。

「よっ！！ でかメロンじゃなねえか」

「殴るよっ！！」

ゼロスはいいなに殴られて吹っ飛んだ。久しぶりのアホ神子を殴る感触だ、と彼女は喜んでいた。ゼロスも、「殴ったよ、の間違いでしょーよ」とかいり返しながら、どこことなく嬉しそうだ。その様子を見たナナリー・フレッチは、ロニシックが発病していた。

ただ嘆くだけならいいが、弓の連射をしまくるので始末に負えない。

ガイ・セシルやクラトスに命中し、悲鳴を上げさせていた。

「ロニロニロニロニロニロニ」

「落ち着いてナナリー！！ いつかロニだつてくるさー！！」

「そうよ、ナナリー！！ スケベ衆が増えたんだから、

ロニだつて入ることは決定のはずよ？」

リアラとカイル・デユナミスがなくさめてことなきを得た。

「エステル！！ 会いたかったわー！！」

いきなりエステルに抱きつくリタ。どうだ、と言わんばかりにユーリ・ローウェルを見やるが、その顔には変化はなく、舌打ちして彼女から離れた。続いてレイヴンを見る。

だが――。

「ルナちゃん、カノンちゃん、おっさんときあわない？」

ナンパにいそしんでいた。二人の顔が迷惑そうである。

「絶対にいやだ」

「お断りします」

「なにやってんのよ、おっさん!!」

「ぐあああつ!!」

リタのフライングキック（飛び蹴り）がレイヴンに直撃した。

「エステルさん、ユーリさんお久しぶりです……」

「エステル!! ユーリ!! 僕も今日からこのギルドの一員だよ

!!」

「ユーリ、会いたかったのじゃ!!」

ナン・カロール・パティがあいさつをした。フレンはチャットにあいさつしている。

パティがユーリに抱きついたため、エステルは頬をふくらませていた。

ジュデイスは若いつていいわねえ、とか言いながら笑っていた。

「アリシアツ!!」

「お姉ちゃん!!」

抱きあう二人の姉妹。ジーニアスとリーガル、ひよつとしたら将来は義理の兄弟になるかもしれない二人は、それをほほえましそうに

見つめるのだった。

そのまま、ミトスたちは他の仲間のあいさつに行くことになった。リーガルたちは四人で盛り上がっているので、あいさつはあとにするのだらう。残ったのは、ルミナだけだった。

「お前はどつする？」

「僕、カノンちゃんと話したいな。いい？ カノンちゃん？」  
「も、もちろんだよ。一緒に行こう！！」

二人は手に手を取り合って去って行ってしまった。  
つまらなくなっただので、ルナはアツシュをいじめるために  
彼を探すことにした。復活したレイヴンがまたナンパを  
してきたので、死なない程度にいためつけてから、  
ルナは歩き出した。

数分後、かなり慌てた様子のルナが食堂にいた。  
リリスやクレアの料理を、かなりの数のメンバーが  
食べている。リタたちの姿もあった。

ルナは朝方パニールと共に、好物のミルフィーユを  
焼いていたことを思い出したのである。

「パニールお菓子は！？」

「ルナさん、大変なんです！！ 冷蔵庫で冷ましてたんですが、  
目を少し離れたすきに、一つもなくなっていたんです！！」

「……ふーん」

紅い目がぎらりと光ったのを見て取って、ユーリ、リッド・ハー  
シエル、

リオン・マグナスがこそそこそと逃げようとしていた。

やはり、犯人はこの三人のようである。

「月の光よ、我の前に集え！！ 月閃龍連打！！」

「……ぎゃあああああつ！！」「……」

いくつもの矢が三人に降り注ぐ。その矢は、龍と月の形を作っ  
ていた。

ルナは月の名前がつく技を使うのである。

しかもこの技、満月が近づくほどに強くなるのである。

今は三日月なので、そんなには強くなかったので、三人はなんとか  
助かったのだったー！。

三人をたたきのめしてスカツとしたルナは、アッシュを探していた。

……いた！！ ルナはほのかに頬を染めた。

ガイと話しているのが見えた。ルナはそつと近づく。

「おはようデコハゲ」

「誰がデコハゲだあああつ！！ あいさつくらいちゃんと名前で呼びやがれ！！」

アッシュは抜刀すると、ルナめがけて走り寄ってきた・と、それにガイが足を引つ掛ける。

「「あ」」

仲良く話していたルーク・フォン・ファブレと、ティア・グランツが

思わず声をハモらせた。どさつ、とアッシュがルナの体に倒れ込んだのだ。ルナはとっさのことで反応できず、支えきれずに一緒に倒れ込んだ。

顔がトマトのようにまっかっかに染まっていく。

好きな人の顔が、こんなに近くにいるのだ！！

と、ルナは親指を立てているガイの姿を発見し、後で殺す、と殺気をみなぎらせた。

「早くどけつ！！ アッシュー！！」

「す、すまん、今どく……」

アッシュは立ち上がるため、何かを支えにしようと手を動かした。そして、掴む。

ルナの、豊かな胸を。

「にやつ！？ な、なにすんだこの野郎！！どこさわってやがる！！」

「わ、わざとじゃねえぞ！！」

「そう思っなら、とつとその手放せ！！」

ルナは力ツとなつてアッシュの鳩尾を蹴りあげた。アッシュはルナの横あたりに倒れ込み、あまりな



痛みにとうちまわる。だが、彼の不幸はまだ終わっていないかった。

「アッシュさん、最低です……」

「見損なつたわ。あなたがそんなことをするなんて」

「スケベ大魔王第二号!!」

「死んでね。てゆーかあたしの実験体になつて」

「女の子の胸を触るなんて!!」

「慰謝料ものよねえ」

「教育が必要かしら？」

その場にいた女性陣、プレセア、ティア、アニス・タトリン、

ハロルド・ベルセリオス、リリス、ルーティ・カトレットが

アッシュに詰め寄っていた。確実に怒っている。

「い、今のを俺のせいじゃねえぞ!! 俺は悪くねえ!!」

俺は悪くねえ!!」

『確実に悪いだろうが!!』

全員の秘奥義が一斉にアッシュに襲い掛かる。

ぎゃああああっ、と悲鳴が上がる中、ルークはただ合掌していた。

「がーいー。こんなことわざ知ってるか？」

あくまでかわいらしい声と笑顔でルナがガイを見ていた。

背後には大量の負。そして、目が笑っていない。

「人の恋路を邪魔するやつは、馬に蹴られて死んじまえてな!!」

ルナの蹴り技がガイに直撃し、海に叩きこんだ。

その後、ゼロスとレイヴンが面白いものを見せると言うので、ルナは甲板にやってきた。そこにいたのは、カノンとルミナである。

「あ、あの、僕、カノンちゃんが……好き、です……」

「わ、私もルミナが好きだよ……」

顔を紅く染めた二人は、お互いに告白しあっていた。

どちらからともなく手を握る。カップル成立の瞬間だった。

「手が早いな、あいつ」

「ルナちゃんは二人が付き合ってもいいの？」

「私はブラコンじゃないぞ。ルミナが誰と付き合おうが構わない」

ルナはそういった後、さあつ、と青ざめた。

二人の距離が近づいていたのである。

「そろそろ帰るぞ」

「なんで？ まだいいじゃない」

「いや、帰る！！ まずいぞこの状況は……」

そう言っている間に、ルミナは優しくカノンノを抱き寄せていた。

カノンノは嫌がらず、頬を髪と同じ色に染めて身を任せる。

唇と唇が近づいた、その時だった。

「「ディセンダーアアアアアアッ」」

ブルーウエーブのバルバトスと、紫色の髪のゲーデが

いきなり船に乗り込んできた。ビクツとなり、二人が離れる。

「なんでお前らがここに？」

ルナの額からだらだらと汗が流れていた。冷汗のようである。

「ディセンダー俺の女になれえええ！！」

「お断りします」

「ディセンダー、こ、これ、やる！！ 借りを作りたくないからな

！！」

二人はルナに金色の花を差し出してきた。ルナはゲーデのだけ

受け取り、バルバトスのは海に放り投げた。

「ゲーデ、レイヴン、ゼロス！！ いますぐ私の後ろに隠れろ！！」

「「「はい！！」」」

「いいから早くしろ！！」

三人は言われたとおりにした。尋常ではない負がルミナから噴き出している。

ルナやゲーデをも凌駕するほどの負だった。

「いい度胸だね。僕とカノンノちゃんの邪魔をするなんて」

「る、ルミナ？」

「地獄に落ちても知らないよ！！ 冥王殺連撃！！」

ルミナは飛び上がってバルバトスを空中に蹴りあげ、空中でナイフを振りまわした。バルバトスはどんどん切られ、しまいには灰になり、海に埋葬された。

だが、彼はきつと復活するだろう。世界樹によって。

「ルミナ、かつこいい〜」

カノンノの歓声を聞きながら、こつそりとのぞいていたメンバーは、ルミナの恐ろしさを痛感するのだったー。

## 天然ディセクター参入・腹黒おとぎ娘の初恋（後書き）

ルミナは天然で優しくて基本大人しいですが、キレると腹黒くなります。ルナとは似てないようでそっくりです。

次回はキャラ紹介になりますが、見てください。

## 第二回キャラ紹介

ルミナ・チエイサー

ルナの弟。彼女には似ても似つかない、天然でやさしい少年。だが、キレると腹黒くなる。カノンノが好き。

藤林しいな

少しドジなところもあるくの一。ずずとは仲が良くなる。

ゼロスの事が好きだが、素直になれなくてつい殴ってしまう。

ミトス・ユグドラシル

基本大人しくてやさしい少年。

クラトス情報では、重度のシスコンとのこと。それが嘘か真実かはまだ定かではない。

リーガル・ブライアン

まともな大人キャラの一人。

アリシア一筋のお方。

プレセアたちと仲がいい。

アリシア・コンバティール

プレセアの妹。だが、姉よりは少し背が高い。リーガルの恋人。なお、この少女は腹黒くない。

カロル・カペル

子供っぽいところもあるが、結構まともなキャラ。

ナンのことが気になっている。

リタ・モルディオ

エステルが好きでユーリに対抗意識を燃やすが、おっさんもまた好き。素直になれずに術をぶついたり、ヤキモチを焼いたりしているが、決して気づかれない。

ジユデイス

クリティア族の女性。実は好きな人がいるが、気づかれていない。

大人キャラの中でもまともな人。

ユーリとルナから「ジユデイ」と呼ばれる。

フレン・シーフォ

上にあまり上品でない言葉がつく程真面目な青年。ユーリの幼馴染。クレスとキャラがかぶっているとの情報も。ユーリいわく「味オンチ」らしい。

レイヴン

ユーリの悪友。スケベで女好き。来たそうそうに、スケベ衆に加入した。リタに好かれているが、気づいていない。

パティ・フルール

ちょっと古臭い言葉を使う少女。

ユーリの事が好き。だが、ライバルである  
エステルとの仲は悪くない。

ナン ツンデレな少女。カロールいつも  
一緒にいて、彼が好き。だが、素直になれない  
ため、彼はまだ気持ちに気付いていない。

ラピード ユーリの相棒な犬。チャットには怖がられ、  
ティアやエステルたちにかわいがられている。  
本人（本犬？）はルナとユーリ曰く嫌がっているらしい。

## 第二回キャラ紹介（後書き）

今回はキャラ紹介だけです。

また更新データや新データ

が入ったら、ぞくぞくとやっていきます。

次回はちゃんとお話になりますので、

ぜひみてください。



## 腹黒ディセンダーの初デート

今日の洗濯当番は、ゼロス・ワイルダー、スパード・ベルフォルマ、レイヴンの三人である。

もちろんディセンダーである、ルナ・チェイサーも手伝っていた。彼女は家事をするのが好きなのである。

そのスケベ衆を、見張っている三人の女性が、いた。藤林しいな、リタ・モルディオ、ナナリー・フレッチの三名である。しいなとリタは、それぞれゼロスとレイヴンに想いを寄せており、ナナリーはスパードが好きということではなかったが、誰も見張るものがないので見張っていた。ルナちゃん」

呑気な口調でゼロスがいきなりルナにナンパする。

途端にキツとしいなはまなじりを吊り上げ、

ゼロスにげんこつをお見舞いする。

「このアホ神子!!」

「名前読んだだけでしょーよっ!!」

「ルナが迷惑してるだろ!!」

うるさいなと思いつながらルナは洗濯ものを干していた。

ゼロスの視線がルナに向く。

「そんなことないよね、ルナちゃん？」

「はつきり言つて迷惑だ」

ルナはきつぱりと本音を言いきった。がーんと口に出し、わざとらしく落ち込むゼロス。だが、それがふりだといふことがルナには分かっていたので、無視していた。

「ルナちゃん、おっさんはー？」

「ファイアーボール!!」

レイヴンもまたルナをナンパしてきた。

瞬時にリタが術を発動させ、彼の髪がちょっと焦げる。

レイヴンは熱気で悲鳴を上げた。

彼にそんなことをした本人は、私は何もしていません  
といわんばかりにキーキを頬ぼつていた。

「とつととやんなさいよ、レイヴン」

「もつと迷惑だな。おっさんは好みではない」

「リタっちひどっ！！ ルナちゃんもひどすぎるでしょー！！」  
もつとおっさんに優しくしてよ、と訴えるレイヴン。

リタはうざっ、と呟き、さらに落ち込ませていた。

「じゃあ、ルナは誰が好みなんだ？」

唯一律儀にも洗濯ものを干していたスパイダが聞いた。  
じいっ、と紅い目が彼を見つめる。

「この中ではスパイダ」

「よっしやあああつ！！ ってこの中では？」

「よし、終わった」

ルナは質問を華麗にスルー。パンパンと手を叩いている。  
紅い月の髪飾りと金色のツインテールが揺れた。

「おい、ルナの好きな人って誰なんだよ？」

「私に構わないでください……」

「いきなりプレセアの物マネ！？ すごく似てるし！！

……じゃねえよ、無視するなああああつ！！」

ルナが物マネするのはごまかす時だけです。

ここまでではいつもの日々だった。

それが変わったのは、女性陣とのお茶会の最中だった。

「ルナさんは、アッシュさんが好きなんですよね？」

プレセアが言った言葉が、全ての始まりだった。

ルナは飲んでいたグリーンティーを吹き出しそうになり、  
むせかえってせき込んだ。顔はまるでトマトのような色だ。

「ふえっ！？ な、ななな何をいきなり！？」

「ええっ、そうだったのルナ！？」

「全然分からなかったわ……」

「私もだよ。プレセアはすごいね」

「ルナにも好きな人っていたのね」

「そうなんです？」

カノン・ティア・コレット・リアラ・エステルが

驚いたように言った。女性陣の視線がルナに突き刺さる。

ううう、とルナは小さく唸った。

「私は知ってたわよ」

「私も知っていました」

「私も知ってていてよ」

後知っていたのは、ハロルド・すず・リフィルだった。

他の人達は知らなかったらしい。

「ねえ、ルナ、告白しないの？」

アーチェが唐突に言った。ルナは顔を真っ赤にして慌てる。

「で、でででで出来る訳ないだろ、ここここ告白なんて……！」

全員は思わずかわいい、と思った。いつものクールな顔

とは考えもつかないくらいかわいらしい。

「そういえば、まだ買い出し当番を決めていませんでしたね

ルナさん、アッシュさんで行ってきてください」

「はうあ!？」

「ちよつと、ルナ!! セリフ盗らないでよ!!」

いきなりのチャットのセリフに、ルナは動揺のあまり

アニスの驚きの言葉を無意識にパクっていた。

言葉の大本であるアニス・タトリンが、

頬をふぐのように膨らませて文句を言う。

それでも、スイーツを食べる手は休めていなかった。

すずも手を休めず食べている。

「ルナ、服ってどういの持つてるんです？」

「レディアントじゃ駄目だよ」

「私の服貸してあげるよ、ルナ」

「私もかわいい服を持っています」

「え、ちよつ、皆……！？」

キラキラした目のエステル、コレット、カノンノ、プレセアと他の女性陣が詰め寄る。

珍しくデイセNDERの少女の

かわいらしい悲鳴が響き渡った――。

場所は変わって、カノンノとルナの部屋。

色とりどりの服が並べられていた。

すべて女性陣が持ってきたものである。

うつつ、と小さく唸りながら、ルナは等身大の着せ替え人形と化していた。次々と服を着せかえられている。

「ルナさん、次はこの服をお願いします」

「次はこれだよ、ルナ、イけるイける！！」

ミントとファラまで参加していた。

ミントは白いローブを、ファラは上等そうな

フリルのついたワンピースのようなものを

持っている。ルナは今、コレットが持っていた

グリーンメイド服姿だった。

「どうしてこんなことに……」

「ルナ、次はこっちのメイド服よ」

「こ、これも着てくれないかしら／＼」

リアラ・ティアもそれぞれの所蔵のメイド服

を抱えている。リリスやクレアも彼女たちの

味方らしく、服を選びながら上機嫌だった。

しいなも自分が持っているキモノを選んでいる。

メイド服やキモノに着せ替えられ、ルナは

顔を真っ赤にして涙目だった。

しかも、誰もルナの意見を聞いてくれない。

すずやプレセアは参加はしていなかったが、

ルナが逃げないように戸口の前に立っていた。

ここにいないのは、リフィルとハロルドくらいだろうか。いつもファッションには興味がなさそうな、ナンやパティやチャットやアリシアやクロエも積極的に参加していた。

と、パシャパシャと写真を撮る音が聞こえる。

じろりと見ると、アニスとルーティが写真を撮っていた。

「何やってるんだ、お前ら？」

「いや、ゼロスたちに売ろうと……」

「スパイダなら高値で買ってくれそうだもんね」

「月華<sup>げっか</sup>あああああつ！！」

「あああつ！！ 高かったのにー！！」

キレたルナがカメラを破壊した。

しくしくと泣き出す二人は放置し、着せ替え人形を続行する。動くと思鳴られるので、とりあえず

ルナは突っ立っているだけだった。

ルビアとアニーも自分の着ていたのと

似たような服を着せかけてきた。

そして、結局服はプレセア所蔵のフリフリな服（称号

：おしゃま）に決定された。

ぬいぐるみまで強制装備で、武器の弓とヨーヨー

は没収である。ルナはもう逆らう気力も起きなくて、ただされるがままだった。

一時間後、ルナの姿はアッシュがいる甲板にあった。

レースやフリルをふんだんに飾ったドレスと、

髪につけたヘッドドレスがとてもかわいらしい。

「あ、アッシュ……」

「！？」

声をかけられて振り向いたアッシュは、明らかにぎよつとした顔をしていた。まあ、無理もない。

「ちゃっ、チャットに買い物を頼まれた。

一緒に行かないか？」

「どうしたんだ、お前、その恰好は！？」

「聞くな！！ 聞いてくれるな！！」

私だつて好きで着ている訳じゃない！！  
それより返事はどうなんだ？」

ルナはルビーのような目に涙をいっぱい  
ためていた。ぬいぐるみを握る手にかなり  
の力が込められている。

こっそりとのぞいていた女性陣が、  
ハラハラとそれを見ていた。

「ああ、構わないぞ。女一人じゃ、荷物が  
重いかもしれないからな」

以外にも彼はフェミニストらしかった。

あっさりOKされたので、ルナはホッとしている。

「すごい恰好だな、しかし」

「遊ばれたんだ、カノンノたちに。」

……似合わないだろう？」

「いや、かわいいぞ。いつもとはイメージが違うがな」

ルナは顔を赤く染めると、小さくありがとう、と  
言う。アッシュはその反応を意外そうに見ていた。

と言う訳で、ルナの初デートは幕を切られた。

歩き出す二人を、かなりの人数が尾行している。

ルミナ&カノンノ、ルーク&ティア、ジーニアス  
&プレセア、ロイド&コレット、カイル&リアラ、  
チェスター&アーチェ、レイヴン&リタ、カロール&ナン、  
ゲーデ&すず、マオ&アニーだった。

「ルナちゃん、アッシュのどこが好きなのさー！！」

「何で俺まで……」

「嫌なら帰りなよ、ゲーデー！！」

「このちびが俺の腕掴んでて放さないから  
帰れねえんだよ!!」

ゲーデはすずを睨みつけながら言った。  
当のすずは、無言で彼の腕を拘束している。  
かなり強い力だった。

「ロイド、これ、似合うかな？」

「コレットなら何でも似合うぜ」

「カイル、このお店入りましょうよ」

「うん、行こう、リアラ!!」

「ティア、あの、この、ぬいぐるみ  
買ってやるよ／＼」

「あ、ありがとうルーク／＼」

普通にデートを楽しんでいる奴らがいた。

ロイドとコレットは露天のアクセサリー

を物色中、カイルとリアラは喫茶店に  
入ろうとし、ルークとティアはお互い

顔を赤く染めながらウインドウショッピングの  
真っ最中である。

カノンノは頬を膨らませて文句を言った。

「もうつ、何のために来たのよ!!」

ルナたちを見守るためでしょっ!!」

「ジーニアス、あーんしてください」

「ええええええっ!? プレプレプレセア!？」

「ちよっと!! プレセアまで何やってるのよ」

言ってるそばからデートを楽しんでいる

新たなカップルの姿が。うらやましいやら  
憎らしいやらでカノンノは怒鳴りつけた。

ルミナはルナたちを睨みつけるのに

夢中でこちらを見ようもしない。

「大丈夫です、カノンノさん。ここからでも

ルナさんたちは見えますから」

ジーニアスに食べさせ、お返しに食べさせてもらうプレセア。顔は無表情だったが、頬は桃色に染まっていた。

ちなみに、アーチェたちは二人きりでホーキング中（ドラ もん語録より抜粋）、カロールとナンもお店に入ったりして楽しんでいた。

まともに見張っているのはカノンノたちだけである。

こんなに大勢に見られているとはつゆ知らず、ルナとアツシュは目的の買い物をしていた。

大量の野菜や肉、その他いろいろである。

野菜を調べている最中にアツシュと手が触れ合い、びつくりしてルナは身を引いた。

顔が熱を持って紅くなる。それを、風邪で

熱があると勘違いしたアツシュが

額に手を当てたものだから、

ルナはさらに驚いて後退するばかりだった。

「おい、すごく熱だぞ、大丈夫か!？」

「あか、紅くない!! イケるイケる!!」

「本当に大丈夫か!？」

ともかくも買い物を終わった。

その様子を、殺気を込めた目で睨む二人の姿が。

「アツシュ殺してやる!!」

もちろんルミナとゲーデである。

武器を構えて今にも襲い掛かりそうな気迫だった。

「ちよっ!! 落ち着いてヨ、二人とも!!」

「こんなところで暴れないでください!!」

必死でマオとアニーが止めるが、



二人は静まりそうにない。

と、その時である。

「伊賀栗流忍術、雷電！！」

ストツ、と小刀が地面に落ち、雷撃を  
ルミナたちが襲う。

そのまま彼らは見事に気絶した。

「さあ、行きますよ」

すずは二人を引きずりながら歩いている。

カノンノたちはすっかり感心していた。

（すずちゃんつよっ！！）

「買い物が終わったみたいだけど、

ここで返しちゃうのも何かなあ」

「おっさんに任せてよ、カノンノちゃん！！」

ずつと黙っていたレイヴンが名乗りを上げた。

カノンノは顔を輝かせて続きを促す。

レイヴンは誇らしげに言った。

「リタっちがファイアーボールか何か

使って、それをアッシュ青年がかばうってのどう？

もちろんルナちゃんを狙うのよ！！」

「まあ、やったっていいけど……」

リタはちよつと紅くなりながら術を放った。

大量の火球がルナたちに襲い掛かった。

「ひっ！！」

いきなり降ってきた火球に、

ルナはびくつ、と身をすくませた。

彼女は火が怖いのだ。

よけようとしてもしないルナにぎよつとなり、

アッシュは慌ててルナを引き寄せた。

火球は彼女にかすりもせず地面に落ちる。

「危ねえだろ！！　なにやって……ん？」

怒鳴りつけようとした彼は、ルナの様子がいつもと違うことに気付いた。まるで小動物のように小刻みに震え、強く強くしがみついているルナは、やけにはかなげに見えた。

「……………」

「おい、どうした、ルナ！？」

「こ、怖い……！！！」

涙目になる彼女をどうすることもできず、とりあえず彼は場所をいどうするのだった。

「やったね、レイヴン！！」

「見なおしたよ、レイヴン！！」

その頃、レイヴンはカノンノたちに

褒められていた。見事作戦は成功したのである。

「おっさんだつてたまにはやるのよ！！」

「……………がはあっ！！！」

『レイヴン……！！！！』

レイヴンはいきなり吐血するとその場に倒れた。

背後には、すさまじい負をまとったルミナとゲーデの姿が。

レイヴンをやったのが二人かどうかはさだかではないが、絶対にやつらだ、と全員は思ったという。

レイヴンを運ぶためにカロルたちは船に戻って

しまい、不穏な空気を察したチェスターとアーチェモ

バンエルティア号に帰還。マオたちもアニーが負に

おびえて気絶したために帰った。

後に残ったのはカイルたちだけだった。

本当は帰りたいかったのだが、彼女たちが説得したのでなんとか思いとどまったのだった。

場所は変わってここはケーキ屋店内。

ルナはアッシュに好物のミルフィーユを

おごってもらって少し落ち着きを取り戻していた。

「すまないな、アッシュ。迷惑をかけて」

「お前に礼なんか言われると調子が狂うな。

礼なんていい」

「そ、そうか……？」

「荷物を取ってくる。そこで待つてろよ」

ルナはケーキ屋で一人になった。

ちよつと顔を緩ませてミルフィーユを

食べていると、唐突にやってきた

ガラの悪い客AとBがルナに声をかけ始めた。

「気安く私に話しかけるな」

「おつ。威勢のいい姉ちゃんじゃねえか」

「それに上玉ですぜ、アニキ!!」

「私に声をかけたこと、後悔させてやる」

ルナは服の内部をさぐり、棘つきヨーヨーを

取りだそうとしたが、そこで青ざめた。

……武器がない。

ルナはカノンたちに武器を没収された

ことを失念していたのだ。

「どう後悔させてくれるんだ、ああ？」

「きゃっ!!」

ルナは手を掴まれ、椅子から立たされて

しまった。頭がぐるぐると回って

まともなことを考えられず、引きずられる

ように歩き出す。

その様子を、見張っていたメンバーが

不安そうに見ていた。

カノンノにいたっては、淡い緑の

瞳をぎらぎらと怒りで染めている。

「あの吊り目はげ！！ 何してるのよ、  
こんなときにいいいいいっ！！」

（（アッシュえらい言われようだな））

と、ルナの方に動きがあった。

「その手を離せ！！ 私に触れるな！！」

「威勢がいいのはいいが、あまりに  
うるさいな。ちょっと黙っていてもらおうか？」

リーダー各らしいAがルナを殴りつけようとした。

ルナは青ざめながらも、手を掴まれているので  
逃げることができない。

目を閉じようとした、その時だった。

「おい、俺の連れに何をしている！！」

アッシュがようやく帰ってきた。

荷物を置き、剣を構えてルナの方に駆け付ける。

剣を無言で薙ぎ払うと、AとBの髪がひと房切れ、  
彼らはルナを放りだすとそのまま逃げだした。

「おい、大丈夫か！？」

「こ、怖かった……」

アッシュが手を差し出した。ルナはその手を  
取ったが、立ち上がることができない。

「こ、腰が…… 抜けた……」

「しかたねえな」

軽々とルナは抱きあげられた。お姫様抱っこの態勢である。  
ルナはあたまがいつぱいいいつぱいになり、顔を紅くしながら  
その場で意識を手放した。

こうしてルナの初デートは幕を閉じたのだったー。

## 腹黒ディセントの初デート（後書き）

今回のルナはいつものルナとは違います。  
アッシュとのデートにどきどきしたり、  
いきなり飛んできた火にぎよっとなったり。  
これからも腹黒い彼女をよろしくお願いします。

## 腹黒ディセンダーたちのモンブラン争奪戦

今日も洗濯当番は甲板で洗濯物を干していた。だが、いつもいるはずのルナはここにはいない。

ちなみに、今日の当番はアッシュ、

チエスター・バークライト、ガイ・セシルの通称後退予備軍だった（苦勞が多いから）。

当番ではないため、暇そうにしていたゼロス・ワイルダーは、腹黒で有名なカノンノ・イアハートとプレセア・コンバティールに脅され、ルナを起こす役目を仰せつかった。

彼はすぐさまルナ&カノンノの部屋に向かった。

ノックもせずに入ったのは、彼女の寝顔を見ておきたいと思う欲求が働いたからだだった。

ゼロスはルナの姿を見るなりその場で固まった。

ルナはまるで天使のようにかわいらしい。

いつもはツインテールに結ばれた金の髪は、

くしゃくしゃになってベッドから落ちている。

すうすうとかわいらしく寝息を立てているルナに、

彼の顔がしだいに赤らんでいった。

ゼロスはルナの顔に自身の顔を近づけた。

彼の唇が彼女の唇に近づいていく。

あと、数センチという距離まで近づいた、その時だった。

ぱちり、とルナが目を開けた。

「……？」

まだとろん、としている紅い目が彼を見る。

ゼロスの目とルナの目が見事にかち合った。

彼の顔が青ざめる。覚醒したルナが、にこおつ、と

ものすごい笑顔になった。慌てて身を引こうとする

ゼロスの腕を、がっしりとルナが掴む。

「ぎゃあああああつ!!」

そのままゼロスはルナの部屋から投げ飛ばされた。あまりの勢いに扉が吹っ飛び、ガツンツ、と

彼はそれに顔を打ち付けた。

「まったく油断も隙もないやつだな、この色魔!!」

レディの部屋にノックもせずに入るなんて、

失礼ではないかね？ それにいきなりキスしようとするなんて」

「ルナちゃん、俺様が悪かったから顔はやメテ……」

「反省してないようだね」

ルナが取りだしたヨーヨーの棘が、きらりと陽光を浴びてきらめいた。ゼロスは手を合わせながら後退する。

ルナは瞳をきらきらさせながら近づいた。

「覚えておけ、次、このような狼藉を働いたら、ディセンダーの名においてお前を浄化してやる」

「俺様負と同じ扱いなの!？」

「負よりたちが悪いわっ!!」

と、ゼロスの視線がルナの胸元に落ちた。

さつき彼を投げ飛ばした際に少し寝間着がずれ、ちらりと胸が少しのぞいていたのである。

それに気づいたルナは真っ赤になると、

ゼロスに向けて矢を構えた。

「ワイルドギース!!」

「あぎゃああああああつ!!」

いきなり秘奥義いいいいっ!!」

ルナは多少すつきりしたような

顔で弓を振りまわしながら歩いて行った。

甲板までやってきた時である。

「ルナ!!」

「ルナちゃん!!」

「ルナさん!!」

いきなりカノンノ、ルミナ、チャットが

目の前に飛び出してきた。

ルナは髪を結えつつも器用にそれをよけた。

たまたま近くにいたアツシユに直撃しているが、  
構わずに彼女は質問する。

「どうした、君たち？」

「どうしたじゃないよお、約束したじゃない!!」

「早く食べさせてよ!!」

「忘れたんですか、僕、楽しみにしてたのに」

合点がいったルナは紅い月の髪留めで

ツインテールを止めながら笑顔になった。

この前、自前の栗で作ったモンブランを  
食べさせる約束をしたのである。

「ずずも食べたいです……」

「お、俺もいいか？」

「私にも食べさせてください、ルナさん」

「僕も食べたい!!」

ずず、ゲーデ、プレセア、ジーニアスもやってきた。

ルナは了承して彼らを部屋に招く。

巨大な冷蔵庫の前で、ルナはロックを解除しようと

呪文のようなものを唱え始めた。

「ファイアーボール、烈火扇、サンダー……あ、

間違えた、伏せる、皆!!」

その場に伏せる彼らの頭上を、巨大な火球、

大量の水流、かまいたち、浄化の光が通り過ぎて行った。

「うわあああ、すごいね!!」

「すごいねじゃねえよ、伏せなかったら確実に死んでいただろ!!」

さもおかしそうに言うルミナに、ゲーデのツッコミが入った。

ずず、ジーニアスの顔が心なしに青ざめている。

彼女の部屋の冷蔵庫は、キーワードを口頭で入力しないと



罨が発動するのである。失敗しても同じことだ。

「すまないな、人のものを勝手に強奪してくる者がいるのでは」

「ここまでやる意味があるのか!？」

「ここまでやらないと馬鹿が反省しないのだよ」

ルナと甘党ユリとリオンレッド&食欲魔神

の戦いは水面下で行われていた。

何度かルナが負け、お菓子を強奪されたこともある。

そのたびに冷蔵庫はハロルドとフィリアとジェイドとガイの協力もあつて改良され、今に至るのだった。

最近は被害もほとんどなくなった。

「ファイアーボール、烈火扇、ライトニング、月閃龍連打、十六夜天舞、冥王殺連撃……よし、開いた」

ようやくロックが解除された。

取りだそうとしたところで、ルナは視線を感じて振り返る。

と、びくつ、となつて立ちすくんだ。

甘党&食欲魔神、その他かなりの人数がこちらを見ていたのである。

ルナのケーキはただでさえおいしい。

それに、自家製の無農薬で作られた栗が載せられているのだ。

かなりぜいたくな一品である。

ほとんどの者が食べたいだろう。

「君たち、モンブランが食べたければ勝負で勝ちとりたまえよ」

こうして第一回モンブラン争奪戦が開始された。

ルールは以下を参照しよう。

・参加できるのは二十歳以下の子供キャラのみ。

・ペア参加OK

・途中棄権OK

・選手以外の妨害は失格

「ちよつと待てえええええっ!？」

珍しく甘党が一人、ユーリ・ローウェルが吠えた。  
彼は主人公でも珍しい二十歳超えである。

当然参加はできない。

「ルールを変えろおおおっ！！」

俺が参加できねえじゃねえかあああっ！！」

「大丈夫じゃ、うちが勝つたらユーリにも分けてやるからのう」

「わ、私もがんばりますからね、ユーリ！！」

パティ・フルールとエステルがそう言ったので、仕方なく彼は引き下がった。

ハロルドとリフィルとジェイドは

カイル、ジーニアス、アニスからもらえるという約束を取り入れ、ユージーンにはマオが勝利した暁には分けるらしい。

そして、コレットたちはー。

「クラトスさん、私が勝つたら半分分けます」

「いいのか、神子！？」

「もちろんです」

「お前になら、ロイドを任せても構わない」

「お義父様！！」

「クラトス、やっと認めてくれたのか！？」

モンブラン一つで親子間問題が解決していた。

ルナのおやつがかなりおいしい証拠であった。

第一戦 ロイド＆コレットVSゼロス&しいな

「がんばろーね、ロイド！」

「ああ、がんばろう、モンブランとクラトスのために！！」

いつでも仲のいい二人だった。

それとは対照的に、しいなたちはケンカをしている。

「しいな」。俺様たちも仲良くしよーぜ！！」

「調子に乗るんじゃないよ、このアホ神子!!」

「ぎゃああつ!!」

抱きつこうとしたゼロスに、しいなの肘鉄が炸裂した。  
うめき声をあげ、彼はのたうちまわっている。

(仲悪いな、相変わらず……)

あきれ顔のロイド。ルナはくつくつくと黒笑いをしていた。

「しいなも難儀なものだな。では、第一戦初め!!」

ルナの掛け声で、最初に動いたのはゼロスだった。

ロイドを狙い、一目散に彼に襲い掛かる。

ロイドも負けじと剣を突き出し、つばぜり合いが始まった。

「ロイド、がんばって!! ホーリー……きゃあつ!!」

「させないよつ!!」

ホーリーソングでロイドを援護しようとしたコレットに、

しいなのお札が命中した。彼女は後退するが、

しいながぴつたりと追跡してきて術を使うことができない。

「コレット!!」

「隙あり!!」

ロイドの注意がコレットに向けられた。

その隙を狙い、ゼロスが詠唱を始める。

「しまー!!」

気づいて妨害しようとしたときには遅く、

彼はすでに下級術の詠唱を終えていた。

「ウインドカッター!!」

「うわああああああつ!!」

風の刃がロイドを切り裂く。

痛みに顔をゆがめた彼は一旦

ゼロスから距離を取ろうとした。

だが、ゼロスはさらに距離を詰めて

今度は技での攻撃に切り替えてきた。

「閃空裂破!!」

「くっ！！ ふせぎきれない！！」

しいなたちは勝利を確信していた。

術を使えるコレットはしいなが引き受け、ロイドはゼロスが術と技でもって倒す。

戦略的には完璧だった。

だがー。

「本気でいくよー！！」

「うわあああっ！！」

しいなはコレットのオーバーリミッツゲージが高まっていたのに気づいていなかった。

コレットが力を解放し、しいなが吹き飛ぶ。

キツと顔を上げたコレットが反撃を開始した。

「ブランデイス！！ レイシレーゼ！！」

レンジウィグル！！」

「くうっ！！ 油断した！！」

チャクラムの攻撃がしいなを襲う。

しいなは慌てて全ての攻撃をかわしたが、

彼女の攻撃はこれで終わりではない。

「響け、そうでん…… あ、間違っちゃった、

あれ……？」

ホーリージャツジメントが発動。

たまたま近くにいたしいなは直撃をくらい、戦闘不能に陥った。

「しいな！！」

今度はゼロスの注意がそれる。

それが命取りだった。

力を解放したロイドの天翔蒼破斬が彼を撃破した。

勝利はロイドとコレットが掴んだようだ。

第二回戦 アッシュ&ルナVSジェイド&ハロルド

「足を引つ張るんじゃないぞ、お前」

「それはこちらのセリフだな、鶏頭」

「誰が鶏頭だ！！俺の名前はアッシュだって言ってるだろうが！  
！」

「私の名前をちゃんと呼ぶなら名前で呼んでやってもいいが？」

「ちつ。行くぞ、ルナ！！」

「了解だ」

「さあ、行きましょうか？」

対峙する四人。臨戦態勢を取る中、ちよつと待った、とルミナからツツコミが入った。

「何でルナちゃんが戦ってるの！？」

「久しぶりに戦うのもいいかと思つてな。

特に、相手がネクラマンサーなら不足はない」

ぎらりと紅き瞳が好戦的な光を灯す。

ため息をつきながらもルミナが引き下がり、戦いが開始された。

「くらえっ！！」

一番最初に動いたのはルナ。

弓を構えてジェイドに紅蓮を放った。

彼はあっさりとそれをよけ、

槍を構えて向かつてくる。

ルナは舞うように攻撃をかわし、

空中に飛び上がった再び攻撃を開始した。

「月華<sup>げっか</sup>！！ 龍炎閃<sup>りゅうえんせん</sup>！！」

「あたりませんよ」

ジェイドがすべてかわす。だが、ルナの狙いは彼ではなかった。聞こえたのはハロルドの叫び声。

ルナの攻撃に気を取られた隙に、アッシュはすかさず紅蓮襲撃を叩きこんだ。再び彼女の悲鳴が上がる。

「仲間をかばつて戦うのは苦手か？ ネクラマンサー・ジェイド」

「ネクロマンサーです。この腹黒ディセンダー」

かちんとなったのか、少し彼の口調が険しくなった。

ルナはさもおかしそうに笑い、槍の攻撃をかわしていく。

「ジェイド、こつちを助けてよ！！ 詠唱なんてできたものじゃないわ！！」

ハオルドが悲痛な声で訴えた。アッシュの攻撃だけではなく、ルナの攻撃にもたえなければならぬ彼女はもはや涙目だった。

だが、ジェイドもここを動くわけにはいかない。

ルナは通常なら後衛タイプなのだが、狩人のわりに腕っ節が強い。まともに攻撃をくらったら無事ですまないだろう。

「岩砕烈迅——「陽炎！！」ぐあっ！！」

技を出そうとした瞬間、彼はルナの頭上からの蹴りを受けた。龍の形をした炎が彼を貫くように放たれる。

だが、ジェイドの口元にはまだ笑みがあつた。

ルナの最大の秘奥義、月閃龍連打は満月なら高威力だが、今日はいにくとその日ではない。

「まだ終わらない！！ イノセント・ルナッ！！」

「何！？」

新たな技の出現にジェイドは焦った。

ルナを取り巻くように月のフィールドが現れる。

彼女の力がどんどん高まっていくのが彼にも分かった。

青ざめている暇もなく、アッシュがハオルドをすでに倒していた。

がれんぼつしゅうがく  
「牙連崩襲顎！！」

「何で私があ……」

ルナの弓がぴったりとジェイドに向けられている。

しかも、背後からはアッシュもこちらに向かってきていて逃げられない。

「残念だったなあ、私にはこれがあるんだよ。

くらえっ、月閃……龍連打っ！！」

「ぐああああああっ！！」

ルナの月と龍を形作った矢がジェイドを次々と襲う。  
全ての矢に貫かれた彼は、そのままその場に倒れ伏した。  
ルナとアッシュの勝利である。

### 第三戦 ルミナ&カノンVSリオン&リリス

「第三試合、開始!!」

ルナの合図の後、一番最初に動いたのはリリスだった。  
死者の目覚めがカノンノを襲う。

悲鳴を上げ、カノンノは直撃をくらった。  
続いてまんぼう戦吼ではじきとばされる。

リリスは続いてルミナにリリスラッシュを  
使おうとしたが、刃物のような目に射ぬかれ、  
怯えて後退した。

「調子に乗ってるんじゃないやねえぞ、お嬢ちゃん。  
こいつに手を出すな」

「で、でもこれは試合……」

「うつせえっ!!」

「ひっ!! ご、ごめんなさい……!!」

リリスの目に涙が浮かぶ。驚いたような顔をする  
カノンノに、ルナが説明した。

「こいつは戦闘中に性格が変わるのだよ」

「か、変わりすぎだよおおっ!!」

いつもの大人しそうな顔が別人のように、  
ルミナは荒っぽくなっていた。

リオンもためらったような顔をしている。  
だが、今回の戦闘の相棒を責められた怒りも  
あり、剣を構えて向かって行った。

「降参しな、お坊ちゃん。お前じゃ俺には勝てねえぜ?」  
「うるさい!! 僕に命令するなっ!!」

剣と剣のぶつかり合う音が響く。

リリスとカノンノは動くことができないようだった。

ついに勝敗が決まる。剣を取り落としたリオンのど元に、ルミナの剣が突き付けられていた。

「だから降参しろつつつたんだよ、死にな、お坊ちゃん」

「っ！！」

「そこまで！！」

ルナの飛び蹴りがルミナに直撃した。

剣を取り上げ、リングから弾き飛ばす。

すると、急にルミナはいつもの彼に戻った。

リリスがリタイアしたため、勝利はルミナたちが掴んだ。

その後も戦いは続けられ、ミトスとパーティがルークとティアを撃破したりしていたが、唐突にルナが争奪戦の終わりを告げた。

「実は全員分焼いてあるのだよ」

『私たちの苦労って一体……』

勝ち残ったメンバーが茫然としている。

だが、負けたメンバーも食べられるということだ。

全員はルナの部屋に急いだ。

だが――。

冷蔵庫は開けられ、中のケーキはあとかたもなく消えていた。犯人はバルバトスである。

冷蔵庫のロックを解除したままにしたルナも悪かったが、それ以上に悪かったのは彼だった。

すべてのケーキを食べつくしたのだから。

『バルバトスウウウッ！！』

全員の心が初めて一つになり、秘奥義をくらったバルバトスは夜空の星になった。



## 腹黒ディセンダーたちのモンブラン争奪戦（後書き）

ルミナの性格チェンジの秘密は徐々に明かしていくつもりです。  
今回は戦闘を書いてみました。

好きなキャラが活躍してなかった、という方すみません。  
次回もよろしく願います。

## 真剣勝負 腹黒ディセンドーVS弟 前編

ルナ・チエイサーは今日も寝坊していた。

今日の洗濯当番、藤林しいな、ミトス・ユグドラシル、

藤林すずは、今日も彼女がいないことに首をかしげていた。

と、紅い目をこすりつつルナが甲板に姿を現した。

今日は金の髪はきっちりと結んで髪飾りをつけている。

「ねむ……」

「今日も寝過したのかい？」

「大丈夫、ルナ？」

「最近多いですね」

三人が声をかけてきた。ルナは眠そうな声で呟く。

「昨日、カノンノが書いていた話と私が懂れている

作家が出した新作を遅くまで読んでいたからな」

ちなみに、タイトルは『キュンキュンパラダイス

(カノンノ作の大長編。動物ばかりでてくる)』

と、『タイガーフェスティバル(アスベル・ラント作。

某虎祭兄貴をモデルに仕立て上げた小説)』の二作である。

「なんなんだい、その本は!？」

あまりにもすごいタイトルにしいなの目は丸くなっていた。

なかなかおもしろいぞ、と本を二冊出しつつルナが宣伝する。

しいなの目は呆れたような顔になっていた。

カノンノ作のお話は動物好きの女性陣にかなりの反響を寄せていた。

まだ出版社には持つていつていないが、絵本作家としてだけではなく、もう少し実力が上がれば小説家としてもいけるのではないかとルナは思っていた。すずがちゃっかりとカノンノ作の小説を見ている。

話が終わり、ルナがあくびをかみ殺しつつ洗濯ものを持ち上げた、その時だった――。

「ルナ、俺と勝負しろ!!」

突然声をかけられ、ルナは眉をしかめて洗濯ものを下ろした。ルナはマイティ・コングマンに、たびたび勝負しろと迫られていて困っていた。

だが、この声は明らかに彼のものではない。声がかなり高いのだ。まるで女の子のようなー。

「ルミナ!？」

そこでルナは初めてはつきりと覚醒した。

振り向くと、殺気をみなぎらせたルミナがそこに立っていた。ぴたりとその切っ先がルナを向いていた。

明らかに怒っている様子に、彼女は首をかしげている。

ルミナは戦闘時の状態だった。彼は基本大人しいのだが、キレると腹黒くなり、戦闘時に入ると何故か荒っぽくなる。

その理由はルナにも分からなかった。本人も分からないという。まるで射殺すかのような視線がルナに向けられた。

ぎらり、と狂気を秘めた目だった。

「ルミナアアアアッ!! ルナを巻き込まないでよ!!」

眉を吊り上げたカノン・イアハートが、

ズス力とこちらにやってきた。

頭から湯気が出そうなくらい顔を真っ赤にほてらせて怒っている。ルミナがキツと彼女を睨みつけた。

「うるせえ、黙れ、カノンノ!!」

「ルナは関係ないじゃない!! これはわたしたちの間の問題でしょっ!!」

いつもは何をするのにも一緒に、かなり仲がいい二人がケンカをしている。

その事実、三人は目を丸くしていた。

「お前がルナの方がいいって言ったんじゃねえかよ!!」  
なら、ルナに勝って、

オレの方が上だっけしらしめてやるよ!!」

「ルミナのばっ!!」

ついにカノンノが目から涙をこぼし始めてしまった。  
ルナがやさしく抱き寄せてなぐさめる。

その行動がさらにルミナを激怒させた。

「ルナ、勝負しろよ!!」

「勝負より、大事なものがあるだろう」

ルナがルミナを鋭く睨み返した。

冷静な態度がルミナの頭に血を上らせる。

「いいから勝負しろおおおおっ!!」

「きゃっ!!」

「うわあっ!!」

彼の放った衝撃波がその場の全員を巻き込んだ。

カノンノはルナがかばって軌道をそらし、

ミトスはさすがにかばって空中にジャンプ。

そして、取り残されたしいなは、どこからか

やってきたゼロス・ワイルダーに助けられた。

「大丈夫か、しいな!!」

「ゼロス……」

抱き寄せられたしいなは、ちよっぴり顔を染めながら頷いた。

安堵したような顔になったゼロスは、

笑みを消してルミナを睨みつけた。

珍しく本気で怒っている。

押し殺した声でいつもの軽口をたたいた。

「ちよっとルミナくん、しいなに何してるんだよ」

「うるせえ!!」

ルミナが剣を振りまわす。剣気が直撃し、

ゼロスは吹っ飛んで頭を打ち付ける。

気絶して目を回している様子を見たルナはキレた。  
パンツとかわいた音がルミナの頬で鳴る。

紅い目が怒りを秘めてきらめいた。

「よかるう、勝負してやる。今のお前に、カノンノは渡せない。カノンノをかけて勝負しろ!!」

「ちよつ、ちよつとルナ!! 何言い出すのよ!!」

「そうだよ、あんたが勝つたらどうするんだい!？」

「もうちよつと考えなよ、ルナ!!」

カノンノ、しいな、ミトスが口々に文句を言ってきた。ルナは真顔で「私は本気だ」と返す。

「もし私が勝つたら、ハロルドの薬の力借りてでもカノンノを幸せにする。それでいいな？」

くるりと振り向いたルナは、男性顔負けのりりしさを秘めていた。ぎらりと光る目はまるで紅いナイフ。

カノンノは紅くなり、思わずこくりと頷いていたー。

カノンノとルミナがケンカした原因は、少し前にさかのぼる。

その日、ルミナとカノンノは、クラトス・アウリオンやリフィル・セイジと共に、オタオタ退治の依頼を受けていた。

途中までは二人とも仲が良かったし、他の二人も口をはさむ事なく歩いていた。敵が出てくるまでは。

「カノンノ、下がってろ」

敵が出た途端、ルミナは性格チェンジしてカノンノを突き放した。

「私も戦うよ!!」

いくら好きな相手だと言っても、そんなことを言われてカノンノが引き下がるわけではない。

彼女はキツと顔をあげてセブンスサマーを構えて前線に出ようとした。

「足手まといだつつつてんだよ!!」

「何するのよ、ルミナのバカッ!!」

いきなり突き飛ばされ、カノンノはブチギレた。

大声で叫び始め、クラトスたちがぎよつとなる。

「だいたいルミナは性格が変わりすぎなのよ!!」

普段は頼りないし、戦闘の時は乱暴になるし!!」

「なんだとカノンノ!!」

「そっちが先に言つて来たんでしょつ!!」

クエストなどそっちのけで口ゲンカを始めるルミナたち。  
しだいにヒートアップしていく口調に、ついに保護者二人  
が口をはさんだ。

「二人とも、ケンカは後になさい!!」

「いい加減にしろ!! 敵は目の前だぞ」

「うるさい!!」

返事はユニゾンで帰ってきた。夫婦ゲンカは犬も食わぬ。  
溜息をつき、二人は戦闘の準備を始めた。

だが――。

「私の実力見せてあげるんだから!! 旋桜花!! 爆碎斬!!  
獅子戦吼!!」

「下がってろつってんだろ!! 魔神剣!! 散沙雨!! 虎牙破  
斬!!」

ケンカをしながらも二人だけでオタオタを倒していた。  
容赦ない攻撃に、リフィルたちはモンスターに同情したという……。

二人のケンカは、敵を倒し終わっても終わらなかった。

「前のルミナの方がいいよ!! 前のルミナを出してよ!!  
前のルミナを返して!!」

「あんなにくじなしの何がいい!? お前だつてさつき頼りないつて  
言つてたじゃねえかよ!!」

「乱暴よりはそっちの方がいいよつ!! 今のルミナは嫌い!!  
ルナの方がカッコイイもん!!」

「じゃあ、俺がルナを倒す!! それなら俺を認めるだろ!!」  
「あ、ちよつと、待ちなさいよ!!」

眉を吊り上げて走っていくルミナ。カノンノが慌てて追いかけた。

……で今にいたる。

ルナは月の文様の刻まれた弓を構えながら  
紅き目でルミナを見つめていた。

「どっからでもかかってきな、ルミナ」

「それはこっちのセリフだ、ルナ！！」

「来ないのならば、こちらから……」

ルナはきつく弓を引き絞った。

ぴたり、と寸分の狂いもなくルミナをマークする。

「月華！！」

矢の雨がルミナに降り注ぐ。彼はバックステップでよけたが、  
よけきれずに少しだけかすった。ルナの攻撃は終わらない。

あの攻撃はフェイクで、すぐそばまで近づいていた。

ルミナは気づいて慌てたがもう遅い。

「斜陽！！」

ルナの蹴りがルミナのみぞおちに直撃する。

あまりの痛みにルミナは絶叫した。

「ぐあああああつ！！」

「ルミナッ」

カノンノが悲鳴を上げた。小柄な体が小さく震えている。  
目には涙がたまっていたが、彼女は逃げなかった。

見届けなくては、と気丈にも耐えていた。

ルナはルミナを挑発しながら攻撃をよけていた。

頭に血が上ったルミナは簡単に挑発に乗っている。

「ほらほらどうした、ルミナ！！ 少しは反撃してみろ」

「調子乗ってんじゃねえええつ！！ 剛・魔神剣！！」

「きかないね」

かっとなったルミナが放った攻撃は、高くジャンプした  
ルナによってかわされた。続いて放った閃空裂破も、

あざけりの言葉とともにかわされる。

「次はこちらの番だ！！ 鷲羽！！ 轟天！！」

「うっうっうっあああああっ！！」

ルナはまるで舞うようによけては攻撃をしないと  
いった態勢で、ルミナの攻撃は一度たりとも

あたつていなかった。ルナの顔には笑みが広がっている。

「ルナさん、勝ってください！！」

「ルナあ！！ ルミナなんて叩き潰せ！！」

プレセアとゼロスの応援が耳に届き、

さらにルナはスピートが上がっていく。

カノンノはどっちを応援するのか悩み、

ついには口を閉ざしていた。

不届きにも賭けをしている、アニス、ルーティ、ハロルド、

ジェイドは、カノンノとルナに代わってプレセアが

緋焰滅焼陣をくらわせて殲滅した。

親元であるジェイドには、獅吼滅龍閃もぶつけていた。

ジーニアスが休暇でいないので、抑制する人がいない分、

容赦がなかった。

ルミナは舌打ちしつつ、再び攻撃を繰り出した。

体がよろけ、倒れかかる。カノンノは悲鳴を噛み殺した。

ルナもギョツとなり、しばし攻撃の手を休めた。

「大丈夫か、ルミナ！！」

「甘えんだよ」

「っ！！」

駆け寄った瞬間、空破衝が飛んできた。

よけることができず、ルナが吹き飛ばされる。

チリッ、と髪がひと房切れた。

白い頬にも少し傷がつく。

叩きつけられる直前、とっさに受け身を取り、

彼女はルミナを睨みつけた。



さつきよろめいたのは、ルナを油断させる罠だったのだ。  
姉の優しささえも利用するルミナに、

カノンノは驚きを隠せなかった。

「なかなかやるようだな。一撃くらってしまったよ」

余裕がないのを隠すために笑ってみたが、

ルミナの視線はそれさえも見透かすかのようだった。

「まだそんな口が聞けるのか、ええ？ お姉さま？」

（こいつ……！！ 私の甘さをとことん利用する気だな！？）

ルナは焦りを感じた。それまでの冷静さをかいて、

素早く攻撃を開始する。底知れぬ不安が、彼女を支配していた。

「凍牙！！……うああああああっ！！」

攻撃はよけられ、ルミナのみねうちでルナは宙を舞った。

にいつ、とルミナが妖しい笑みを浮かべた。

「ルナさん、すっかりしてください！！」

「ルナッ！！」

悲痛な声でカノンノたちが叫ぶ。

賭けをしていた者たちも、かたずを飲んで勝敗を見守っていた。

彼女が受け身を取るより早く、ルミナは攻撃を放った。

無防備なルナの体を、魔神剣が通り抜けた。

そのまま背中から落ち、一瞬息ができなくなってせき込む。

それを見て、ルミナは心配するでもなく笑っていた。

楽しげなどこか狂気をはらんだ笑みである。

（これは本当にルミナか！？ 私の弟なのか！？）

あまりの変貌に、ルナは戸惑いを感じた。

それは、ここにいるすべての者がそうだろう。

「ルナ、危ないっ！！」

「ルナさんっ、よけてください！！」

プレセアとカノンノの悲鳴とともに、ルナの体に攻撃がぶつかった――。

**真剣勝負 腹黒ディセンドーVS弟 前編（後書き）**

ルナとルミナ、血のつながった姉弟が戦うことになります。

三部作のうちの一部がやつと完成しました。

あざけるような笑みを浮かべるルミナ。

勝利はどちらが掴むのか！？

次回もよろしく願います。

真剣勝負 腹黒ディセンドーVS弟 中編

ルナ・チエイサーは膝をついて呻いていた。骨がいくつかが折れているらしく、彼女の顔にそれまでの明るさは見られない。

「くっ……ちくしょう……」

「さっさと降参したらどうだ？ お姉さま？ カノンノと俺のこと認めてくれよ」

「いやだ……！！」

ルナは齒を食いしばって立ち上がった。今のルミナにカノンノを任せる訳にはいかない。

このままでは彼女が不幸になるのは目に見えていた。

「そうかよ……」

くっ、とルミナが肉薄した。

危険を察知し、空中に飛び上がるルナ。

だが、ルミナはそれを読んでいて、

剣気がルナの足を直撃して吹き飛ばした。

ルナは空中を舞いながら仲間たちの方へと飛んでいく。

なんとか受け身を取って威力を殺したが、体がきしむような音を立てていた。

「ルナちゃん、大丈夫かい！？」

「む、無理しないでよお、ルナあ！！」

「ルナさん……」

「ルナ、もうやめろ！！」

クレスとチエスターが心配そうに声をかけてきたが、ルナは黙って首を振った。

ミントやアーチェにいたっては、もう涙目になっている。

「たとえ、この命つきようと、カノンノは私が守る!!」

ルナは痛めつけられた体に鞭打つように、高速の早さでルミナに向かって行つた。

すべては妹分の少女のために。

カノンノ・イハートを、すべてをかけてでも守り抜く。

「うああああああああああつ!!」

全体重をかけた蹴りが、ルミナに襲い掛かった。

一撃は与えたが、逆に腹を強く殴られる。

すっかりルナをなめてしまっているルミナは、

もはや武器さえも手にとつてはいなかった。

拳の連打が彼女の腹に叩きこまれる。

「がつ!! ぐはつ!! げほつ!! ぐああつ!!」

殴られるたびにルナの口から真っ赤な液体があふれた。

紅い花のような鮮血が船の床を汚していく。

「ルナさんっ!!」

プレセア、チャット、すずの声が見事に重なった。

すずにいたっては、いつもの冷静な顔が嘘のように

ひどく青ざめている。

チャットとプレセアも泣きたいのをこらえている様子だった。

だが、ルナは殴られるのは想定内だった。

血がついたままの口元をにつ、とゆがませる。

「何がおかしいんだよ、お姉さま？」

殴られすぎて頭がおかしくなったのかよ」

「君はすでに私の罠にはまったのだよ。

蝶が蜘蛛の巣にひっかかるかのように、ね」

「なんだと!？」

ぐるり、とルミナの白すぎない肌に

ヨーヨーの糸が巻きついていていた。

先についた棘が腕に食い込む。

「最初に作られたディセンダーの力、

なめるんじゃないよ。

これで終わりだ、ルミナツ!!」

ルナの力がその場にはじけた。

最初から、彼女はこれが狙いだっただ。

膝をついていた時も、休まずヨーヨーにマナを練り込み続けていたのだ。

そして、殴られるのを前提で彼の前に飛び込んだ。

ルミナは慌てて武器を手にならしたかったが、ルナにぐいつと糸を引っ張られたため、断念した。

糸は強く強く彼を拘束している。ただの糸とあなどるなかれ。

この糸は、世界一硬い石、ダイヤモンドを少しずつつむいで糸にした大変強いものだだったのだ。

「月の光よ、導き手となりて我に力を!!」……げっかせんらん 月花戦嵐!!」

ルナはこの攻撃に力のすべてを注いだ。

美しき月の花が開き、かなりの人数を魅了する。

ルミナさえもほづけたような顔で見とれていた。

これはアヤタスナリと呼ばれる幻花だった。

「これがアヤタスナリなのね……」

「興味深いわね。データ採取つ、と」

この花はかなり貴重である。月の光を浴び続けないと枯れてしまうので、

実際に目にしたものはあまりいない。

これに見とれていないものは、一人だけだった。

アニー・バースである。彼女だけは知っていたのだ。

この花の本当の怖さを。

この花は散る間際が危険なのである。

と、花がちらちらと散り始めた。

毒々しい赤に変わった花弁が、ざくつ、とルミナの腕をかすめた。

ざくざくざくざくつ！！

花は散るたびにルミナを切り裂いていく。

女性陣の悲鳴がその場を揺るがせた。

この花は薬種だが、取るときに工夫をしないと切り刻まれるのだ。伝承では古代の魔術師がそんな魔術をかけたと言われている。

「本気ですね、ルナさん……！！」

「敵に回すと本当に恐ろしいです、ルナさんは」  
「ずすとアニーはルナの恐ろしさを再確認した。  
だが、この技には弱点がないわけではない。」

この技を使った後、しばらく動けなくなるのだ。  
ルミナが反撃をすれば、ガードさえもできない。

「まだ……俺は倒れてないぜ！！」

「……やはりか……！！」

切り傷だらけになってもまだ立ち上がるルミナに、  
ルナは口元をゆがめた

変化していたヨーヨーが元の姿に戻り、

ルナの手におさまる。

「だが、その傷では戦えないだろう、降参しろ」

「誰がするかよ。するのはお前の方だろう」

ルミナは体のいたるところから血を流しながら歩いている。しかし、その顔には不敵な笑みが浮かんでいた。俺の勝ち揺るがない。

そう言わんばかりに。

「世界樹から餞別としてもらった力、  
忘れた訳じゃねえよなあ？ お姉さま？」

「……っ！！」

ルナは金の髪を強く掴まれ、動くことができずに唇をかみしめた。悲鳴など、決して上がるものか。

「紅き月の光よ、我に力を！！ 解放！！」  
リリース

紅い月の髪飾りがまばゆい光を放つ。

それが晴れた時、ルミナは完全に無傷のままで立っていた。  
レディアントではなく、青い忍びの服になっている。

「完全に力を解放すれば、俺はお前にだって勝てるんだ。  
さあ、降参しな、お姉さま!!」

「いやだ」

ルナはルミナに甲板に投げ出された。

無防備に伸ばされた白い手に、ルミナの革靴の足が乗る。

「降参しろ!!」

「い・や・だ!!」

足に力が込められた。骨のきしむ音が響く。

ルナはたまらず悲鳴を上げていた。

「うあああああつ!!」

「あんたも力を解放しろよ。でないと、俺には  
勝てねえぜ?」

「死んだって、いやだね。……」

あああああああつ!!」

さらに力が込められる。ルナは苦痛に呻き続けるばかりだった。

「もうやめてっ!!」

カノンノが淡い緑の瞳からぼろぼろと涙を流しながら  
叫んだ。握りしめた拳にかなりの力が籠っている。

「私のことはもういいからやめてっ!!」

私のためにルナが傷つかないで!!」

そのままカノンノはルナの方に飛び出しそうになり、  
プレセアとリフィルに羽交い絞めにされていた。

「離して!! ルナのところに行かせて!!」

「駄目です、カノンノさん。」

ルナさんを、信じてください」

「何が合っても、あなたは最後まで見届けなくては  
ならなくてよ? 今回の戦いの原因はあなたなのだから」

カノンノは大人しくなり、唇をかねてルナを見ていた。抵抗もできず攻撃されるルナを。

ルナはもう戦う気力を無くしているようだった。もう動けるようになっていたけれど、反撃もガードも何もなかった。

（カノンノ、ごめん……！！　かつこいいこと言っても、勝てなかった……！！）

その時だった。

「負けんじゃねえぞ、ルナアアアアアッ！！」  
アッシュの怒鳴るような声が響いた。

ルナの目に光がとまり、負けられないと行動を開始した。ルミナの攻撃をかわす。

アッシュの応援を皮切りに、他のメンバーも次々と応援を始めた。

「がんばれ、ルナ！！　俺も応援してるからな！！」

「ルナさん、負けないでください」

「勝って、ルナッ！！」

「あなたなら勝てるハズよ、私、信じてるから！！」

「期待を裏切るなよ、ディセンダー」

「ここで負けたら、あなたカノンノの姉分じゃなくてよ」

「ディセンダーの力、見せてもらうわよ？」

「ルナ、勝つことを祈ってるからね？」

「ルナなら絶対勝てるよ！！　ボクちゃんと分かってるから！！」

「ルナなら勝てます！！」

「ルナならイけるイける！！」

ルーク・プレセア・カノンノ・ティア・クラトス・リフィル・ハロルド・

コレット・ジーニアス・エステル・ファラの応援が響く。

他の者たちもルナの勝利を望んでいた。

この場にルミナの味方などいない。



チツとルミナは舌打ちした。

「友情パワーってか？ …… そんなもん古いんだよっ！！」

ルミナのマナがだんだん強くなっていく。

だが、ルナは攻撃をすべてよけきった。

体が痛もうとも、もうためらわなかった。

全員の歓声上がる。

「そうか？ 以外に効果があるぞ、これは」

「うるせえうるせえうるせえうるせえっ！！ 俺はカノンノを守り

たいだけだ！！

なのにどうしてこうなるんだよおおおおっ！！」

激怒したルミナが魔神空牙衝を放つ。

ルナはそれをかわし、体内でマナを練り始めた。

「この技に、すべてのマナを注ぐ！！

…… ルミナ、私の勝ちだ！！」

「やれるもんならやってみる、ルナアアアアアアッ！！」

キツ、とルナの紅い目に炎が宿る。

冷たくも熱い炎は、ルミナを焼き焦がさんと彼を睨んでいた。

「私に力を！！ これで決める！！」

ルミナが防御を固めようとする。だが、ルナのヨーヨーが

再びルミナにからみついて自由を奪った。

足がもつれ、彼はその場に倒れ込む。

「ワイルドギース！！」

炎をまとった矢が、扇状に舞って

ルミナを攻撃する。ブツツとヨーヨーの

糸が切れ、ルミナは全身を炎で焼かれた。

「ぎゃあああああああっ！！」

ルナはすべての力を使い尽くし、

その場にへたりこんでしまった。

ルミナにはかなりのダメージを与えたが、

あまりにもその代償は大きかった。

体中が悲鳴をあげていても動くことができない。

弓の糸もたえきれずに切れてしまっていた。

「まだ……俺は、たたかえ……る……」

「っ！！ まだそんな力が！！」

ルミナは服に焼け焦げを作り、体中にやけどを負ってはいたが、体を引きずってルナの方に向かってきていた。

「これだとめだ！！ 冥空斬翔剣！！」

とても逃げるなどできない。

ルナは覚悟を決め、目をかたくつぶった――。

**真剣勝負 腹黒ディセンドーVS弟 中編（後書き）**

ついに次回で「真剣勝負」が完結です。  
ルミナの性格チェンジの理由とは！？  
そして、ルナはどうなるのか！？  
次回もよろしくお願いします。

## 真剣勝負 腹黒ディセンドーVS弟 後編

ルナ・チエイサーは、いつまでも痛みが来ないのを不信に思っ て目をうつすらと開いた。

すると、そこには何かに縛られでもしたかのように動かないルミナがいた。

否、動けないのだろう。

と、眩しいまでの光がその場にあふれた。

そこに現れたのは、髪の長い女性の姿をした世界樹だった。

「世界樹！？ 何故おまえが！？ …… つつ！」

ルナは体のことも忘れて立ち上がろうとし、倒れ掛かってカノンノに抱きとめられた。

ふらつく体を、必死で彼女は支えていた。

「何のつもりだ、世界樹！！ 俺を自由にしろ！！」

「あなたはルナにも、カノンノにも、ルミナにも、

他の仲間たちにも悪影響を与えています。

世界樹は厳しい顔で彼を睨みつけていた。

ルミナは唇をかみしめながら睨む返すだけだ。

「あなたを、封印します……」

「ふざけんな！！ 俺は強いんだ！！

ディセンドーにだって勝ったんだ！！

もう少しで決着がついたんだぞ！！」

「世界樹！！ 封印とは何のことだ！？

ルミナはどうなってしまうんだ！？」

カノンノに支えられながらルナが叫んだ。

他のメンバーも心配そうだった。

特に、彼の恋人であるカノンノが。

「話は後です」

世界樹が片手をかざした。ひととき強い光が

そこからあふれだし、ルミナが悲鳴のような声を上げる。

「ああああああっ！！……ちくしょう、

もう少し……だった……のに……」

フツ、とルミナが糸を切られた操り人形のように

その場に倒れた。ルナをプレセアに引き渡した

カノンノが慌てて抱き上げるけれど、動く様子はまったくない。

だが、死んではいなく、呼吸は聞こえたので、

カノンノはホツとしていた。

「世界樹、何があったのか、説明してくれなくて？」

リフィルの問いに、世界樹は悲しげな顔を

しながら説明してくれた。

「ルミナは性格が変わっていたんじゃない、テレジアから来たあの子に取りつかれていたのよ。

戦闘時だけルミナを操っていたみたいなの」

「テレジア？ あいつは先代のデイセNDERなのか！？」

今度はクラトスが聞いた。世界樹は静かに頷く。

「そうよ。ただし、帰れなくなった、ね」

「元の世界には戻れないの！？」

カノンノが悲しげな目で言った。

世界樹が首を振ると、その目に大粒の涙がたまる。

「もう、あの世界は変わり始めているのよ。

テレジアのデイセNDERが、グラニデに来てしまった

その時からね。もう別のデイセNDERがいるから、

あの子はあの場所に戻る事ができないの」

「そんな……」

カノンノが悲鳴のような声を上げた。

うつつ、とルミナの口からうめき声がもれる。

「パスカのもとに帰れなくなったあの子は、

ルミナに取りついてあなたを守ろうとしたの。

やり方は、まずかったかもしれないけどね」

カノンノはもう口をきかなかった。

ただ、悲しげに目を伏せるだけだった。

ルナも同様の反応を見せている。

ほとんどの者が、彼に同情していた。

「でも、パスカ・カノンノと、カノンノ・イアハートは、違う。本質や魂は同じでも、性格も考え方も違う。

だから、私には封じるしかなかったのよ」

「このまま、ほうっておくしかないのか？」

ルナは世界樹に助けられないのか、と懇願した。

待ってましたとばかりに、世界樹が救助案を口にする。

「それには、皆の力が必要よ。……そして、

ゲーデ、いるんでしょう？」

あらぬ方向に目を移す世界樹。

そこにはこっそりと潜んでいたゲーデがいた。

めんどくさそうな顔になり、逃走をはかる

彼だが、さすがクナイを投げつけて壁に

縫いつけたのでそれはかなわなかった。

「あなたには彼の入れ物となってもらうわ。

大丈夫、今度はきちんと融合させるから、

ルミナのようにはならないわ」

「断る！！ 俺は俺だ！！」

誰かと融合するなんてごめんだぜ！！」

「デイセNDERになれるわよ？」

あなたが懂れていた、デイセNDERに」

「……仕方ねえな」

ゲーデは逡巡した後、ためいきをつきながら了承した。

ルナとルミナを十分に回復させてから世界樹が言う。

「あなたたちは、少しでもいいから彼に生命力を

分けてあげてくれないかしら？」

体に完全に融合させるには生命力が足りないの」

『了解!!』

全員も異論はなかった。

クレス・チエスター・ミント・アーチエ・

ルナ・カノン・ルミナ・世界樹・パニール・スタン・ウッドロウ・  
ルーティ・リオン・フィリア・リリス・コングマン・リッド・フアラ・

キール・チャット・カイル・リアラ・ナナリー・ハロルド・ロイド・  
コレット・ジーニャス・リフィル・クラトス・しいな・ゼロス・  
リーガル・ミトス・アリシア・セネル・クロエ・ヴェイグ・

クレア・マオ・ユージーン・アニー・ルーク・ガイ・ティア・  
アニス・ジェイド・カイウス・ルビア・ルカ・イリア・スパイダ・  
ユーリ・ラピード・エステル・レイヴン・カロール・リタ・ジュー  
ディ  
ス・

フレン・パティ・ナン。

全員の力がゲーデの体内に集まった。

まばゆいまでの光がバンエルティア号を包んでいく。

それが消えると、そこにいたのは、新たなディセNDERだった。

安らかな寝息を立てる彼は一時放置して、全員は  
それまで戦っていたルナとルミナを見ていた。

ルミナは彼の中で一緒に見ていたらしい。

「ルミナ、どうする？ あいつは私に勝つところ  
だったけど、このまま勝負を続けるかね？」

「……やる。僕だって、ルナちゃんに負けたくない」  
こうして勝負は再開された。

「ルミナ、がんばれ」

カノンが笑顔で叫んでいる。

今度は、ルナ派とルミナ派は半々に分かれていた。  
前々回ブレセアにボコボコにされた連中が、

こりずにまた賭けをしていたけれど、  
今度は彼女も邪魔をしなかった。

「まずは僕から攻撃させてもらっようっ!!」

先に動いたのは、ルミナ。

繰り出される虎牙破斬を、ルナは苦もなく  
かわして攻撃に転じた

「月華!! 鷲羽!!」

「いたっ!!」

降り注ぐ矢をすべてよけきれることができず、  
ルミナの肩に傷が刻まれた。

が、すぐに顔を上げるとルナの方に  
突っ込んでいった。ルナは予想外の行動  
にぎよっとなり、動けない。

たちすくむ彼女に、散沙雨が直撃した。

無数の突きが彼女をよろけさせた。

「くっ……、なかなかやるな」

「きゃああああっ、ルミナ、かっこいいっ!!」

カノンノが頬を紅く染め、黄色い悲鳴を上げた。  
ルミナも紅くなり、笑顔で手を振っている。

「ルナさん、かっこ悪いです」

「うっう……」

ブレセアにじろりと見つめられ、

ルナは困ったような顔で攻撃を開始した。

よそ見をしていたルミナはガードが遅れる。

「これはどうかな? 疾風!!」

「うあああああっ!!」

攻撃をもろにくらってルミナは膝をついた。

カノンノが今にも泣きそうな顔でごめんと謝る。

ルミナは彼女に首をふって悪くないと告げ、  
さらにルナを見て強がって見せた。



「やるね、ルナちゃんも……」

ルナはにやり、と嫌な笑い方をしていた。  
人を馬鹿にするときの彼女の顔。

ルミナが一番嫌いな笑みだった。

「いくらルナちゃんでも、馬鹿にするのは  
許さないんだからっ!!」

だったら、私を打ち負かして見せろ、ルミナ。

カノンノは強い人にしか渡せない」

「やってあげるよっ!!」

ルミナが特攻してきた。

しかし、ルナはその攻撃を読んでいて、  
わざと攻撃をくらった。

「えっ!?!」

ルミナはぎよつとなった。

ルナがよけるのを見越して、

次の攻撃を仕掛けようとしていたからだ。

（しまった!! これは罠だ!!）

ルミナはルナの意図に気付いて後退しようとした。

ルナのヨーヨーの糸がからみつき、その場に倒れ込む。

ルナの狙いは、ルミナを拘束することだったのだ。

「くっ……!!」

「世界樹に与えられし力、

今解放せん!! …… イノセント・ルナッ!!」

さっきの攻撃ではないことにルミナはホッとしたが、

現れた満月のフィールドが、ルナに力を

与えているのになにもできなかった。

「月の光よ、我の前に集え!! 月閃龍連打!!」

月と龍の形を作ったいくつもの矢が飛んでくる。

満月の力をかりて使われたこの技は、かなり協力だった。

「ぎゃああああああっ!!」

ルミナは無数の矢に体を射ぬかれた。  
悲鳴を上げ、その場に膝をつく。

ルナもまた、術の対価で同じように膝をついていた。  
月の力を最大限までに引き出せる技、  
？イノセント・ルナ？。

だが、この技を使った後、ルナの体には  
しびれるような痛みが走るのだった。

「ルナ、ちゃん……」

「ルミナ、がんばってー！！」

カノンノの声援が響く。

ルミナはキツと顔を上げると、  
ルナを睨みつけた。

「負けないから」

ルナは返事をしなかった。

もう口を利く余裕もないのだ。

ルミナが剣を構え、

ルナも体の痛みにたえながら弓を握った。

手がかかり震えているのが分かる。

「やあああつー！！」

「あつー！！」

剣を構えて突っ込んでくるルミナ。

だが、ルナはうっかり手を滑らせて武器を取り落とした。

ルミナの魔神剣が、ルナに直撃して

甲板の端の方まで滑らせた。

月のフィールドも消え、ルナにはなすすべがない。

「降参」

はあはあと息を切らせながらルナは、

白旗を振るかのように片手を振りまわした。

ルミナがさつきとは違う意味で真っ赤になり、

今にも掴みかからんばかりにルナを怒鳴りつける。

「ルナちゃん、今、手を抜いたでしょっ!!」

「抜いていない」

ルナはしびれる手をさすりながら、

ルミナを睨みつけていた。

その悔しげな顔は、わざと負けたものの顔ではない。

「ルナちゃん……」

「ルミナあああっ!!」

ルミナの名前を呼びながら、カノンノがかけてきた。

よろめく体を支えるようにぎゅうつと抱きつく。

「ごめんね、カノンノちゃん。」

僕、弱いし、頼りないし……」

「弱くても、頼りなくても、いいよ。」

ルミナはルミナだもん!!

私は、ありのままのルミナが好きなんだもん!!」

「カノンノちゃん……」

「それに、ぎりぎりだったかもしれないけど、

ちゃんと勝てたじゃない」

抱き合う二人を、複雑そうな顔でルナが見ていた。

「さあ、皆、中に入るぞ。バカップルに

あてられる」

全員の笑い声上がる。プレセアとすずだけが、

ルナにねぎらいの言葉をかけた。

「お疲れ様です、ルナさん」

「大変でしたね」

ルナは中に入ると、だんだんと足で床を叩いていた。

平静な顔をしていたが、実際はかなり悔しかったらしい。

「あああああっ!! 悔しい!! 弟に負けるなんて、

私の一生の不覚だ!!」

「ルナ、もう一人の弟を頼んだわよ」

帰る間際、世界樹がさっきのディセンダーの

世話を委託していった。

ルナはむくれながらも頷き、メンバーと共に中に入っていく。

口づけをかわす恋人たちを見ていたのは、

母の顔となつた世界樹だけだった。

**真剣勝負 腹黒ディセンダーVS弟 後編（後書き）**

ついにルミナのキャラチェンジの  
秘密が開かれます。

次回は新たなディセンダーの  
少年が活躍する、予定です。  
次回もよろしくお願いします。

## ひねくれディセンドーの初仕事

ギルド『アドリビトム』の

メンバーたちは、食後のお茶会で集合していた。

ルナお手製のふわふわとろけるスイーツを  
食べつつ、ルミナの入れたお茶を飲みながら

議論の真っ最中である。

話の議題は、ルナの隣で拗ねた顔をしている  
黒い短髪に緑の瞳をした少年だった。

元はゲーデ、そして先代ディセンドーだったモノ。

彼は、ゲーデと先代の魂が融合してできた  
新たなディセンドーだった。

実は、拗ねてなどいなかったりする。

ルナのお菓子があまりにおいしいせいで、  
必死に笑顔にならないようにしているから、  
そう見えるのである。

まだここにきてそんなに経っていない  
ので、無防備な顔をさらしたくないのだ。

「おいしいか？」

「うわああああああっ!!」

ルナが音も立てずに近づいてやると、

彼は涙目で悲鳴を上げた。

そのまま逃走をはかろうとしたが、

さすが手裏剣を投げて壁に縫い付けたのでできなかった。  
だんだんずずは彼の保護者みたいになってきている。

余談だが、彼はオバケやホラーの類が大嫌いである。

「あいつの性格とは違うみたいだな」

「融合したから、少し変わったんじゃない？」

ケーキを頼ぼりながら、チェイサー姉弟は、

彼をじいつと眺めやっていた。

髪は闇のような黒で短髪、目は淡い  
宝石のような色をしている。

肌は黒色系統で、ルミナよりかは  
健康的に見える。

顔はどちらかというと中性的で、  
化粧してスカートでもはいたらまんま女の子だった。

「君たち、この子の名前について、  
何かいい案はないかね？」

ルナは二個目のケーキ、ミルフィーユにフォークを  
突き立てながら言った。好物であるらしく、  
目がいつもより輝いている。

「わんたるーがいいです！！」

天然神子、コレットが悪気なくとんでもない  
ことを言い出した。しんつ、とその場が静まり  
帰る中、同じく天然なティアが賛同する。

「わ、私もわんたるーに一票！！」

「き、君たち、本気かね？」

ルナはぴたりと手を止めていた。  
ちゃっかりケーキをかつさらおうとした  
リッドの手を叩き、二人を見つめる。

シヨックのあまり凍りつく名もなき  
デイセンサーを、ずっとカノンノが  
必死でなくさめていた。

「「本気よ（だよ）」」

あくまで本気で悪気なく言う二人。  
だが、悪気がない分達が悪かった。

「私は肉球がいいです」

「ぼ、ぼぼぼぼぼ僕もそれで……！！」

こちらは打って変わって、九割方

悪気が含まれた黒笑顔で言うプレセア。

本気というより、からかっていることが  
カノンノ、ルナ、ルミナには分かっていた。

ジーニアスは気がついていないらしく、  
真っ赤になりながら賛同している。

「スターロードグレートはどう？」

「わ、私はいと思うけど……。」

カロールにしてはいい方なんじゃない？」

「お前ら真面目に考える気あんの

かああああああああつー！！」

ついに彼が泣きながらキレた。

まあ、あんな案ばかりでたのでは無理もない。

当然ながら、自分のセンスが変だとは

思っていないカロールはくびをかしげていた。

と、ナンのブーメランに似た武器が彼の  
髪をひと房落としていったため、

さらに彼の目が潤んでいた。

「カロールは真面目に考えてるのよ！！」

……センス悪いけど。

それを馬鹿にするのは許さないんだから！！」

それを聞いたカロールがかなり落ち込んでいたが、  
ナンは一切気が付いていなかった。

てゆーかフォローになっっていない。

ちやっかりセンスが悪いって言っちゃってるし。

「コレットだって本気だぞ！！ 馬鹿にするな！！」

「プレセアだって本気なんだからねっ！！」

「ティアだって本気だぞ！！」

その後、それぞれの思い人をかばった

ロイド、ジーニアス、ルークにも

攻撃を受けたのだったー。



り、理不尽……だ……！！（by ひねくれ  
ディセNDER）。

結局ナナリーの、「あたしはルーがいいな」という言葉と、カノンノの「ル続きだからルーでいいんじゃない？」という言葉を尊重し、彼はルーと呼ばれることになったのだった。

名前の決まった彼が体を動かしたいというので、ルナはチャットに頼んで依頼を見せてやった。

「よし、これにするか」

「ちよつと待たんかあああつ！！」

ルーは来たばかりだと言うのに、いきなり名声十五のウルフ討伐を選ぼうとしていた。

クラトスからツツコミという名の

手刀を叩きこまれ、彼は涙目になって後退する。

「何すんだ、この若づくり！！」

「貴様あああつ！！」

斧と剣の交わる音がその場に響き渡った。

ちなみに、ルーの職業は戦士である。

がー。

「……紅蓮」

「「あちちちちちちつ！！」」

ルナが炎をまとった矢を

放ったので戦いは終結した。

さらに、後ろでは、プレセア、

カノンノ、ルミナが黒いオーラを出して

それぞれの武器をしっかりと構えていた。

「ルナちゃんの手をあんまり

わずわらせないでね？」

「とつと行つてきなさいよ」

「クラトスさん、死んでください」

しかし、プレセアだけが関係のないことを言っていた。落ち込んだクラトスを、ロイドとコレットがなぐさめている。

余談だが、コレットとクラトスは前よりも仲良くなっていた。

今ではクラトスも、あまり二人の仲に口出しをあまりしない。

結局、ルーは少しレベルを落としてクラブス退治の依頼を受けていた。

そして、近くにいたすずに声をかける。

「おい、そのちび」

「すずです」

「何でもいいから、一緒に来いよ、ちび」

「すずですっ!!」

すずがかなり大きな声を張り上げた。

大人しい彼女にしては珍しい。

というか、顔を真っ赤にして怒っているのがさらに珍しかった。めったに表情を変えないのに。

「わ、分かったよ、すず。来てくれるか？」

「はい……」

その気迫に負け、彼が名前を呼ぶと、

彼女はいつものように大人しくなつて了承した。

きよろきよろとあたりを見回していた彼が、

ルミナと仲良く話していたカノンノに目を止める。

「あとは、えーと、そのピンク……」

「カノンノ!! 名前くらい覚えてよ!!」

「アクアスパイクッ!!」

カノンノの水属性の攻撃がルーに直撃した。

さらに目を潤ませて彼は壁際まで逃げる。

そんな彼の耳に、黒笑顔を伴った声が聞こえてきた。

「カノンノのこと次変な名前で呼んだら、容赦しないよ？」

「は、はい、分かりました……」

犯人はもちろんルミナである。

ルーはもはや半泣きだった。

そして、さらに黒笑顔を浮かべた

カノンノがセブンスサマーを構えていた。

野生のカンでこれ以上間違えたら殺される、

と判断した彼は、カノンノの名前だけは

絶対に忘れないと心に決めたのだった。

その様子を見ていたルナは、こいつ

彼女できたら絶対尻に敷かれるな、と思ったという。

その後は何事もなく、ルーは最後の

一人をアーチェに決めると出発した――。

そして、彼らはすぐにアメールの洞窟にやってきた。

「よし、すぐに終わらそうね!!」

カノンノは大張りきりである。

ルーの態度が悪いので、渋っていた彼女に、

ルナが「帰ったらツイーツ食べ放題」とささやいたからだ。

アーチェは笑顔で箒を走らせていたし、

すずも顔には出さないものの気分が高揚していた。

「ルー、足引っ張ったら、承知しないからね？」

「……はい」

カノンノに睨まれると、了承の返事しか

できなくなったルーだった。

まるで蛇に睨まれた蛙である。

それを見ていたアーチェが、からかい混じり

に笑いながら話し始めた。

「ルーって思ったより情けないよね。」

ルナと戦ってた時は、あんなに

かつこよかったのにさ!!」

「う、ううううるせえな、ポニーテールピンク!!」

顔を真っ赤にして怒ったルーは、まだ全員の名前

を覚えていないため、見た目であだ名のようなものを

つけていた。それを聞いたアーチェが、笑顔で術を唱える。

「……アイスニードル」

「いいってええええっ!!」

「次変なあだ名つけたら、分かってるよね？」

笑顔のままで手にマナを集中させるアーチェ。

その背にどす黒い何かが見えたので、ルーは

半泣きになってこくこくと頷くばかりだった。

誰ひとりにも勝てないルーである。

俺なんて、俺なんて、と落ち込む彼を、

さすが優しくなぐさめていた。

その頃、アメールの洞窟を散策する

四人を、見守る影があった。

「ルー、私の弟ながら情けないやつだな、  
まったく……」

「いや、あの二人にかなう奴なんて、

ここにはいないと思うぜ、ルナちゃん」

「どうでもいいけど、何で俺まで

ついてこなきゃならなかったんだ？

早く帰らせて……」

「あの二人、怖すぎるでしょ!!」

アーチェちゃんだけはまともだと思ってたのに!!」

ルナ、ゼロス、スパード、レイヴンである。

ルナは血のつながらない弟に呆れた目線を送り、ゼロスは二人の恐ろしさを再確認し、

レイヴンにいたってはあまりの黒さに怯えていた。

スパードは無理やり連れてこられたために、会話には参加せずのため息をついている。

ルナは三人の言葉をスルーして歩みを進めた。ちなみに、今のルナは、いつものツインテール

ではなく、髪を下ろしているため少し大人っぽく見える。

紅い三日月型の髪飾りや、青い満月型のペンダントはきらきら光って目立つので、とりあえず外してあるのだ。

服も暗闇にまぎれられる黒を基調としたものだ。

三人はここで同時にこう思ったという。

「……（ルナって以外に心配性だよな）」と。

だが、そんな考えを読んだのか、彼女はかわいらしくも壮絶な笑みを三人に向けていた。

「君たち、そんなに死にたいかね？」

カノンノヤルミナを凌駕するほどの夜叉

のような怒りのオーラだった。

三人はただ恐怖におののいて懇願するばかりだ。

「るるるるるルナちゃんおちついてえ!!」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!」

「か、勘弁してくれよ!!」

「よし、スパードだけは見逃してやろう」

「よっしゃあああああつ!!」

「ルナちゃん、ひどっ!!」

横暴だ、と騒ぐ二人を、棘付きヨーヨーがえぐり、かなり大きな悲鳴をあげさせた。

スパードはどさくさにまぎれて逃げたという。

「ぎゃああああああつ!!」

血も凍るような悲鳴を耳にし、ルーは  
ひっ、と声をあげて固まっていた。

体からだらだらと脂汗が流れる。

顔はすうつ、と冷水を浴びせられでも  
したかのように青ざめていた。

「ルー、どうかしたの？」

「な、ナンデモナイゼ」

アーチエが不審に思っ、て声をかけたが、  
あきらかになんでもなくなかった。

めちやくちや目が泳いでるし、

セリフが棒読みだし、体は小刻みに震えていた。

「ひよっとして、ルーさん怖いんですか？」

ズバリ、とさすが核心をついた。

興味深そうに、アーチエとカノンノが目をきらきらさせる。

「ええ、ルーってそうなの？」

「お姉ちゃんにも教えて」

「誰がお姉ちゃんだ！！俺の兄弟

はルナとルミナだけだ！！」

怒りで頬が紅潮し、少しだけルーは元気になった。

しかし、ドゴスツとカノンノが大剣を

洞窟の壁に叩きつけたため、勢いをそがれて眉が下がった。

「ごめ、ん、そこにハエがいたものだから」。

未来のお姉さまの言うこと、ちゃんと聞け」

後半の声はかなり小さかったけれど、少女とは

思えないドスの聞いた声に、ルーはすべてを

包み隠さず言うしかなかったという。

一方、ゼロスとレイヴンはルナからレモングミ  
を受け取ってとりあえず回復していた。

周囲に血が残っているが、そこはスルーしよう。

「カノンノちゃん、怖い……」

「最凶だな……」

怯えたように震える二人とは対照的に、

ルナはクククツと黒笑いを浮かべていた。

「それでこそ、私の未来の妹なのだよ、カノンノ」

類は友を呼ぶ。この言葉の意味を思い知った二人組だった。

と、ルナはカノンノたちがクラブスに接近したのを

見て取って、きびすを返そうとした。

「何も起こらないようだな。帰るか」

その様子を見た二人は、急にニヤニヤ笑いを始めた。

ルナが眉をしかめる。

それでも彼らは話を続けた。

「ルナちゃん、お楽しみはこれからでしょーよー!!」

「はあ!？」

「ルナちゃんって、本当に恋愛経験値ゼロよね」

ルナは笑顔のままでキレた。

弓を構えて話さなければ殺す、と脅したところ、

二人は震える声で話した。

二人の言い分はこうである。

何か攻撃をして彼らの体制を崩し、

その際にルーがどういう行動に出るのか、

または誰と結ばれるのかをしらべるのだという。

まあ、いない可能性もあるが。

ルナはおもしろそうだと思い、彼らに賛同した。

「よし、やれ」

レイヴンのブラストハートが洞窟内を揺るがせたー。

ルナたちの会話の五分ほど前。

「いっくよおっ!!」

「覚悟!」

「私は……逃げないわ」

「行くぞ!!」

四人はお目当てのクラブスを発見していた。

「双牙掌!! 崩襲脚!! 孤月閃!!」

「ファイアーボール!! サイクロン!!」

「飯綱落とし!! 曼珠沙華!! 雷電!!」

「ファーストエイド!!」

三人は猛攻撃を開始していた。

TPの心配もあればこそがん術や技を使いまくる。

カノンノだけは回復役に徹していて、

誰かが攻撃されるたびに回復させていた。

それを何度か続け、すぐに依頼は終わった。

「これぞイガグリ流」

「ばつちりじゃん!」

「勝ったんだ……」

「余裕だな」

しかし、最後の戦いが終わった後、

急に地面が揺れ出した。

「すずちゃん!! ルー!!」

手を伸ばして!!」

アーチェはすぐにカノンノを箒に引き上げ、

ルーとすずも助けようとしたけれど、できなかった。

巨石が降ってきて二人を隠してしまったのだ。

二人は慌てて魔術や剣術をぶつけてみたものの、

巨石は一向に動く気配はなかった。

「すずちゃん!! ルー!!」

カノンノが悲鳴のような声を上げた。

しかし、まだ洞窟は揺れている。

大きな岩のかけらが降り注いできたので、

アーチェたちは脱出するしかなかった。



その頃、ルナたちはー。

「レ〜イ〜ヴ〜ン〜!!」

「ちよつ、何やってるのよ、おっさん!!」

理不尽にもルナとゼロスの両方から責められていた。

「今のおっさんのせい!? やれつていったの、

ルナちゃんとゼロス青年でしょっ!？」

「誰があそこまで騒ぎを大きくしると言っただ!!」

私は助けに行く!!」

「駄目だつてルナちゃんっ!!」

助けに行くとは言つても、ここも崩れ始めている。

脱出しなければ、ルナたちにも死が待ち受けていた。

羽交い絞めにするゼロスから、ルナは抜けだそうと

必死で身をよじる。

というか、ゼロスがルナにズルズルと引きずられている

状況だった。悲鳴が上がるが、ルナには届いていない。

「すずちゃんとルーが死んだら……私のせいだ……」

ルナは安易に二人の案に乗ったことを後悔していた。

今にも泣きそうになる彼女を、二人が慌ててなくさめようとする。

「る、ルナちゃん、そういうなら俺たちのせいでもあるって!!」

「そ、そうよ、やったのおっさんだし!!」

彼らもまさに泣きそうになった、その時だった。

斧で何かを切るような音が響いたかと思うと、

巨石が向こう側から両断されたのだった。

「やっと、出れたぜ!!」

「ノノノ!!」

しばらくして、出てきたのはしっかりとすずを

抱き上げたルーだった。

すずの顔は真っ赤に染まっている。

逃げる際に三人と合流し、全ての理由を察したルーが、

（ルナ以外に）秘奥義を放ち、洞窟は完全に崩壊し、レイヴンとゼロスのみが説教をくらったのは言うまでもなかった。

ルナは涙目でルーたちに謝り倒し、ギルドメンバーはそれを不思議そうにながめていたというー！。

## ひねくれディセンダーの初仕事（後書き）

今回は新たに登場したディセンダーであるルーが活躍のお話です。  
とりあえず、ルーの紹介文をどうぞ。

ルー・ユグドラシル

ゲーデと先代のディセンダーが融合

してできたモノ。ひねくれていて、とても素直じゃない。  
腹黒たちに泣かされる日々を送るだろう少年。

ルナたち以上に恋愛にはうとい。

嫌いなのは、オバケ。好きなのは辛いもので、  
甘いものはあまり好きじゃない。

髪は闇のような黒、目は淡い緑色。

第三回のキャラ紹介は、

もう少しキャラが出て来たらやりたいと思います。  
次回もよろしく願います。

## 腹黒多めのマイソロ2短編集

### 『ルナの料理の秘密』

ここは、ギルド『アドリビトム』の本部である、バンエルティア号厨房前。

何故か「フライアウェイ」を歌いながら

夜中だというのに上機嫌で料理をしている

ルナを、××料理人コンビこと、アーチェ・クライン  
&リフィル・セイジがそれを見つめていた。

「さあ、両手ひろーげあの空を超えて、虹のアーチ  
くぐってめざすーばしょーへー」

カノンノと同室の部屋を抜け出したのに気付き、  
尾行してここまで来たのだった。

「フライアウェイ」 君がそばにいるから」

おいしそうな匂いがただよってきた。

メニューは、ミルフィューとレモンパイとフルーツポンチだ。

「お、おいしそう……」

「そうね」

今にもよだれをたらさんばかりの顔になり、  
物欲しそうに見つめるアーチェ。

リフィルもごくり、と唾を飲み込んでいた。

目的を忘れそうになり、慌てて二人は居住まいを正した。

二人の目的は、料理上手なパニールやクレアやナナリー  
やリリスをもつてしても中々再現できないルナの

料理の秘密を探りに来たのである。

と、ルナの方に動きがあった。

最後の仕上げにと、泡だてたクリームを飾っている。

「おいしくなりますように。食べた皆が幸せに

なりますように」

おまじないのように唱える様子は、見た目の年相応に見えてかわいらしかった。

手を合わせ、祈るようなポーズを取っている。

料理は愛情といったところだろうか。

もつとも、愛情を込めているはずの

リフィルたちの料理は上手いかわないのだが。

「その二人。入ってきてはどうかね？」

いきなり呼びかけられ、二人はぎよつとなつてた。

今更ながらに、作られていたのが自分たちの好物な訳を知る。

ルナは気づいていたのだろう、二人の尾行に。

早速部屋に入り込んだリフィルたちは

それぞれの好物をぱくつき始めた。

いつものことながら、悔しいほどにおいしい味だ。

「ねえ、ルナの料理って、何でこんなにおいしいの？」

ややむくれたような顔をしながらアーチェが聞いた。

ルナは真顔できっぱりと言う。

「愛情がたつぷりこもってるから」

「ぶふっ!!」

あやうくアーチェはたった今食べていた

フルーツポンチを吹き出すところだった。

ルナは悪戯っ子のような顔になり、

くすくす笑いながら話し始める。

「嘘なのだよ。本当はー」

「「本当は!?!」」

途端に二人は身を乗り出してルナを見つめた。

ルナはニヤリと笑ってごまかした。

「乙女のひ・み・つ」

「ちよつとお、なんでよおおおっ!!」

「そう簡単に教えたら、意味がないのだよ」  
結局ルナの料理の秘密は分らずじまい  
だったが、二人は自力で料理のレベルアップを  
はかり、食べても死なない程度にはなったというー。

### 『食事の時間の長さ』

リタは研究所にこもることが多い。

それは科学者である、リフィル、ハロルド、  
ジエイドなども同じだが、特にリタはひどく、  
寝食を忘れるぐらい研究に没頭しているのである。

それを防ぐために、ルナはいつも誰かと  
二人でリタに食事の差し入れに行っている。

今日は暇そうだったエステルを連れて、

ルナは研究室にやってきた。

「リタ、お食事ですよ」

「ここに置いておくからな」

プラスチック

魔導器がテーブル杯

に載っているので、ルナは予備のテーブルの  
上に料理を置いた。

今日のメニューは、とろけるほどに

似たお肉をパンではさんだものである。

ルナはいつも食べやすいものに

するようにいろいろ研究しているのだ。

「後で食べるわ」

リタはそっけなく言うと、ちらりと

料理を見ただけで研究に戻った。

彼女は二人がいなくなるのを待って

いるのである。といっても、ルナたちが  
来るのが嫌なのではない。

むしろ、エステルもルナも内心では大切な友人だと思っている。

ただ、ゆっくりと時間をかけて食べている様子を見られたくないだけだ。

おいしいと言っているようなものである。

「エステル、邪魔にならないうちに帰るか」

「はい、リタ、今日はこれで失礼しますね」

二人が帰ろうとしたので、リタは心中でガッツポーズを決めた。ようやく食べれる……が……。

「あら、エステルとリタじゃないの」

ハロルドが部屋に帰ってきてしまった。

リタは思わずすっ転びそうになり、慌てて予備のテーブルに手を置く。

ハロルドはその様子をしっかりと見ていて、ニヤニヤと笑っていた。

余計なこと言わないでとリタが睨むが、彼女は異に返さずしゃべってしまう。

「リタってばね、ルナの料理の時だけ」

「わーわーわーわー!!」

真っ赤になって大声を上げ、遮ろうとするリタ。

だが、それ以上に大きな声でハロルドが言ってしまった。

「ゆっくりゆっくり時間をかけて食べるのよ。」

それを見られたくないから、追い出すような態度を取るの「トマトのように耳まで赤くなる彼女に、ルナとエステルは小さく笑ったというー」。

『隠れ甘党?』

ギルドメンバー全員がルナ特製のスイーツで

お茶会を満喫している時のことだった。

プリン、各種パイ、数種類のケーキが次々と消えていく。ほとんどが、甘党連中の腹に収まっていたりする。

ルナはおやつが消えるたびに、一度厨房に戻って新たにたくさんのお菓子のスイーツを持って戻ってくる。

唐突に、ルミナが皿にこれでもかつ、という量のスイーツを皿に盛りつけながら唐突にそんなことを言い出した。

「ルーってさ」

「何だよ？」

チーズタルトをセレクトしたルーが、不審そうに緑の目でルミナを見返す。

ルミナは続きを口にした。

「ルーってさ、甘いもの嫌いじゃなかったっけ？  
何でルナちゃんの作ったおやつは食べてるの？」

「あーっ、それは私も思ってた！！」

ルミナに負けず劣らずの量をたべている  
カノンもルーを睨むように見つめ始めた。

二個目のケーキ、ピーチパイを食べようとしていた  
ルーは目を泳がせている。

「リオンさんみたいに、隠れ甘党なんですか？」

同じく隠れ甘党のさすが、大量のケーキを皿に盛りながら聞いてきた。

「僕は隠れ甘党じゃない！！」

プリンをかなりの数盛った皿に持ちながらリオンが怒鳴るが、まったく根拠がなかった。

誰も彼を見ないでスルーしている。

「それはね」



と、ルナは音も立てずに近づくと、普段より幾分低めの声で話した。

いつものことながらルーは涙目になって叫ぶ。

「私が、ルーとレイヴンの分だけ甘さ

控えめにしているからだよ」

「ぎゃああああああっ!!」

その後でルーはすぐにルナを睨みつけた。

「やめろって言うてんだろそれえええええっ!!」

「嫌だね。そっちが慣れる」

にべもないルナの言葉に、ルーはううつと呻いてテーブルに頭をぶつけた。

しかし、さすが彼の好物、激辛マーボーカレーを差し出すと瞬時に大人しくなったという。

だんだんすずはルーの保護者みたいになっていた。

という訳で、ルーは隠れ甘党ではない。

『隠れ甘党?』のおまけ

「そういえば、レイヴンもおやつは食べていたわね。あまり興味がないから、気がつかなかったけれど」

アイスクーキを食べながらジューデイスが言った。  
なにげにきついことを言う娘である。

「ジューディ、レイヴンが落ち込んでる……」

彼が床にのの字を書きだしたので、ルナはため息をついて彼女に進言した。

「あら、ごめんなさい」

そう言いつつも、ちっとも悪いと思っていないような顔をしていた。

「ちよっとジューデイスウウウウッ!!」

おっさんをいじめていいのはあたしだけよ!!」  
いきなり告白してみたことを言うリタの言葉は、  
レイヴンには届いていなかったというー。

『餌付けされてます』

それはほかかと日のあたるいい天気な朝だった。  
久しぶりにラピードを連れて散歩に行こうと思い立った  
ユーリは、キセルをくわえた愛犬に声をかけた。

「おい、ラピード、散歩行くぞ」

しかし、当のラピードは寝そべったまま動かない。  
明らかにユーリと目が合った後そらされた。

ブチツとユーリはキレた。

「散歩行くぞこのやるおおっ!!」

無理やり引つ張っていきこうとし、ラピードが不満そうな  
唸り声をあげたので、何事かとフレンがやってきた。

「どうしたんだい、ユーリ!？」

「ラピードが言うことをきかねえんだ!!」

「いや、だからって無理やり言うことをきかせるのは  
どうかと……」

と、その時である。

ルナが甲板にやってきてラピードに声をかけた。

「ラピードー。クエスト行くぞ」

すると、今まで寝そべっていたラピードが  
慌ててがばつと起き上った。

擦り寄らんばかりにルナに近づく。

「何でルナの言うことは聞いてんだああああっ!!」

「落ち着くんだ、ユーリ!!」

ルナは珍しく意地悪くないかわいらしい笑みを  
浮かべながらラピードを見つめていた。

動物は好きらしい。

「つと、クエストの前に食事だな。食べてから行こうか」  
「ガウー!!」

ルナが手作りしたおいしい犬ごはんを頬ぼるラピード。  
フレンとユーリの声が見事にハモった。

「「餌付けされてる!?!」」

と、くるとルナが二人を見つめた。

彼女の手には、すでに二人の好物である、  
ハンバーグとクリームたっぷりのケーキが  
載った皿があった。

「お前たちも行くよな?」

「ぜひ行きます!!」

「あたりまえだろ!!」

上機嫌な二人の様子を、二人の娘が陰で見ていた。

「餌付けされてるのは……」

パティがためいきまじりに言った。

「あの子たちも同じよねえ」

同じくためいきをつきながらジュデイスも言う。

「なげかわしいのう、ユーリ」

「フレンもね……」

長々とつかれた乙女のため息に、

彼らは気づくことはないのだった――。

『ルナの書庫』

ルナの書庫には、さまざまなジャンルの  
書物が眠る。なので、多くの者が  
借りに来るのだった。

たとえば――。

「ルナ、『花の名前の少女（アスベル・ラント作）

全部で六巻もある）全部持ってないです？」

「持っているぞ、エステル。もう読んだから、借りて行ってもいいぞ」

「ルナ、『ピーチパイのおいしい作り方（ポプラ作）』

を借りて行ってもいいか？ クレアが借りて来て欲しいと言っているんだが」

「持って行け、ヴェイグ」

「音機関の本を貸してくれ！！ ルナ！！」

「ちゃんと返せよ、女嫌い？ また貸しなんてした時は……分かってるよな？」

「また貸しなんてしないって！！」

「ルナさんが、『聖なる焰の光と歌姫

（ジェイド・カーティス作）』を

持っているとパニールさんに聞いたのですが」

「持ってた方がいいから、ついでにコレットたちから某忍者漫画借りて来てくれ」

「もちろんです！！」

といった具合に。

漫画はないので、ルナは読みたいときは他のメンバーに借りたりしていた。

何故かルナは本棚に漫画を並べたくないというこだわりがあるのだ。

音機関の本さえあると聞き、スケベ三人が立ち上がった。スパイダ、レイヴン、ゼロスである。

「ルナちゃん（ルナ）、エロ本持ってないか！？」「」につこりと笑うルナ。もちろん弓を構えて。

「持ってる……訳、ないだろ！！ 少しは自重しろ！！

月閃龍連打！！」

「ぎゃああああああああっ！！」「」という訳で、ルナの書庫にはエロ本と

漫画だけがないのだったー。

『カップル成立！？』

いつものようにちよっかいをかけるゼロスを、  
ただいま読書中のルナはわずらわしそうな視線を向けた。

その本のタイトルは、『魔術と呪術の相違点に  
ついて』だったりする。

本を音を立てて閉じると、ルナは冷たい紅い目  
をゼロスに向けた。きつい口調で言葉を叩きつける。

「ゼロス、うざい」

「ルナちゃんひどーい！！ 俺様ショック」

「殺すぞ」

「……すみません、そのヨーヨー降ろしてください」

ルナはゼロスのアプローチに日々苛立ちをつのらせていた。

それは、ゼロスに片思いしているしいなも同じだろう。

歯ぎしりしつつ彼を睨みつけているのを、よくルナは目撃してい  
た。

「ゼロス、私と勝負しろ！！」

そんな時、ついにルナはゼロスに勝負を申し込んだ。

ディセクターにあるまじき負のオーラが漂い始める。

余談だが、ルーやアニーやティアやカイウスやリッドやルカなど、  
怖がりメンバーがその負に怯えていたという。

「私が負けたら、いつものままでいい。」

ただし、私が勝ったらお前しーなに告白しろ！！」

「なっ、る、ルナノノ！！？」

しいなの顔が真っ赤に染まった。

ゼロスはちらりとその様子を見た後、  
楽しそうに口元を歪ませていた。

「面白そうじゃねーの、その勝負、受けたぜ？」

「そうこなくてはな」

につこりと黒笑顔を浮かべるルナ。

その笑顔には、今までのストレスを一気に晴らす気が満々であることが見て取れた。

その笑顔に怯えたゼロスが一步下がる。

「る、ルナちゃん、お手柔らかに……」

「もちろん、手加減などしないのだよ？」

「ちよつ、まつ……！！」

ここからはルナの独壇場だった。

顔を重点的に殴る蹴るの暴行を一方的に浴びせた。狩人であることが嘘の

ような見事な攻撃である。

完全に袋叩きというか、ボッコボコだった。

ゼロスを気のすむまでルナが叩きのめした後、リフィルに回復してもらったゼロスの告白がここにスタートした。

珍しく照れたようにしいなに愛をささやく。

「し、しいな……好き、だぜ……」

「ゼロス！！」

抱き合うしいなとゼロス。

まったくの余談だが、胸が腕に当たってゼロスの顔はにやけていたという。

「あたしのことがすきってことは、

もう浮気もナンパもしないんだよね？」

「えっ？」

ここでゼロスが明らかに目を泳がせた。

しいなが眉を吊り上げてゼロスを睨む。

「し・な・い・よ・ね！？」

「……多分」

ゼロスは完全にしいなから目をそらして

しまっている。ブチツとしいながキレた。

「この……アホ神子おおおおおっ！！」

「ぎゃああああああああああっ！！」

結局想いが通じて、しいなの心配は  
なくなっていた。

しかし、この日を境になるべく  
ルナにだけは手を出さなくなった  
ゼロスだったというー。

『スパイダのレポート大作戦』

スパイダは、自分がスケベ衆としての  
出番しかないことに悲観していた。

それがなければ、ほぼ出番がないのである。

そして、彼は考えた。新企画になりそうな  
ことを、考えた。

そこで、思いついたのが、ギルドメンバーに  
取材して、いろいろなことを新聞にまとめようと  
いう企画だった。

そこで、スパイダは早速同じように出番のない  
コングマンやヴェイグやウッドロウを  
誘って企画を始動させたのだったー。

第一レポート アニーの場合

「アニー今いいか？」

「もちろん大丈夫ですよ？」

スパイダがノックをして部屋に入ると、  
アニーは高速の早さでマオからもらった  
白い花をバッグにしまい込んだ。

何事もなかったかのようににっこりと笑う。

「好きなもののことを聞かせてくれよ」

「俺はクレーー」おまえじゃねえよ！」「

ちゃっかり取材に応えようとしたヴェイグに、

コングマンとスパードがダブルツツコミ。

落ち込んだヴェイグを、「何、気にすることはない」とウッドロウがなぐさめていた。

「好きな人はマオです？ 嫌いな人は、ユージンさんですね」  
負のオーラが彼女から噴き出した。

彼女は日ごろからストレスをためまくっていたらしい。

「マオマオマオマオっていつもいつもいつもいつも  
マオと一緒にいて私の邪魔をして……」

いつそ消したいくらいですね、あの親バカ」

「……」(コレットとクラトスの親子間戦争が

やっと終結したのに、今度はアニーとユージン！?)」「」「」

## 第二レポート カノンノの場合

カノンノは部屋で小説を原稿用紙に  
書きつづっていたが、快く彼らを部屋に  
招き入れてくれた。

小説は絶対に見せずに鍵のかかった  
小箱にしまいこんでしまったが。

「好きなもの？ えーとね、好きなのは、  
ルミナとルナとパールと小説と甘いもの？

嫌いなのは……アッシュ」

「な、何でアッシュが嫌いなんだ、カノンノ！？」

尋常ではない黒いオーラにびりつつも、スパードは  
果敢に質問した。カノンノはにこっと笑ったが、目は笑っていなか  
った。



「ルナの気持ちに気付きもしないであの男、愚かなもえかすアツシユの

くせにはげのくせに将来絶対はげのくせにあいつゆるせない」

「ちよっと、カノンノちゃん怖い！！ ストップストップ！！」

「うるっさああああい、最後までしゃべらせるおおおっ！！」

「うわあああああつ、機材がああああああつ！！」

結論、企画が実現されるのは、難しいと思う。

## 腹黒多めのマイソロ2短編集（後書き）

今回は短編集です。

内輪ネタとかキヤラ崩壊

とかありますが、よかったら  
読んでやってください。

## 天然ディセンドーの最悪なアルバイト

腹黒・天然・ひねくれのあだ名を  
持つディセンドー達三人は、

今日は世界樹に呼ばれて出かけていた。

世界樹の前に集結している。

「やっと来たわね」

「何の用だ、世界樹」

ルナは明らかにめんどろだと顔に書かれていた。  
くすりと世界樹の精神体が笑う。

「あら、ごあいさつね。せっかくアメールの  
洞窟を修復してあげたのに」

「その報告だけなんですか？」

ルミナはあくびを噛み殺しながら尋ねた。

ルーはめんどろそうな顔をしながらも黙っていた。

世界樹はにこやかに笑いながら首を振る。

「もちろん違うわ、あなたたちに贈り物があるのよ」  
ふわり、と虹色の光が三人を包む。

すると、ルナの両腕にはきらきら光る星と月の  
飾りがついた腕輪が、ルミナの手には藁でできた人形  
と釘が、ルーの手には銀色の鈴が出現した。

「きれいだな……」

「えええええつ、僕の武器呪具！？ あ、でも意外と  
使えそう。いざとなったら物理攻撃だけでも（釘で）」  
「何に使うんだよ、こんなもん！？」

三者三様の反応を返すディセンドー達に、彼らの  
母でもある存在の世界樹はくすくすと笑っていた。

「ルナのやつは絶対に外しちゃ駄目、封印よ。」

ルミナのは相手を指差して釘をさしこめば

ダメージを与えられるし、ルーのは

鈴の音で相手を眠らせたり幻術に巻き込んだりできるわ」  
世界樹はそれだけ言っと、姿を消した――。

ルナは帰宅するなり、カノンノと同室の部屋の奥に設置された（チャットの了承済み）『秘密の部屋』に閉じこもって読書にはげんでいた。

タイトルは、『恐怖の拷問』。おどろおどろしい表紙の一冊である。あきらかに気持ち悪そうな絵柄を無表情で彼女は読み進めていた。

ルーが見たら気絶するだろう。

ルナはスプラッタやホラーが嫌いではないのだ。

まあ、実際に使う気はないが。

と、ルナは毎月チャットに渡している運営資金のことを思い出し、一旦部屋に戻ると『レミリアの冒険（著エステリーゼ・シデス・ヒュラツセイン）』を読んでいたカノンノに声をかけた。

「カノンノ、すまないが、これをチャットに渡しておいてくれないか？」

茶色の封筒を渡すルナ。カノンノは本にしおりを挟むと笑顔で立ち上がった。

「うん！！ わかった！！」

ルナはいそいそと部屋に戻って行った。  
きつと、また読書に没頭するのだろう。

彼女は今日は珍しく休日をもらっているのだった。  
カノンノはルナから受け取った封筒を大事そうに抱えながら、チャットの所に向かおうとした。

ところが。

「あ、カノンノさん！！ ケーキ買って来たんです、よかったら食べませんか？」

につこりと笑ってミトスが言った。

隣には、アニーとマオもいる。

「早くしないとなくなっちゃうヨ？」

「ええっ、大変!!」

「嘘言わないの、マオ。一人二個ずつ買っただけでしょ」

「えへへ、バレたか」

ケーキ!! 一人二個!!

カノンノはすっかり頭から封筒のことを追い出してしまい、食堂へ急いだ。アップルパイとチーズケーキをセレクトしてさらにアップルティーを飲んでから、スキップして部屋に戻ろうとしたカノンノ。

部屋のノブに手をかけたところで、ルナに頼まれごとをしていたのを思い出して慌てて食堂に戻った。

今まで座っていた椅子やテーブルを見る。

……ない。茶色なら目立つはずだが、封筒はどこにも見つからなかった。

「ど、どうしよう……」

そうこうしている間に、チャットは満足そうにケーキを平らげて部屋に戻ってしまった。

彼女に気付かれなかったのは恩の字だろう。

だんだん人が少なくなる中、その場にいるのは、ゼロス、アニー、マオ、チェスター、アーチェ、ユーリ、エステル、ルーク、ティア、カイル、リアラ、ジーニアス、プレセア、ロイド、コレット、カノンノだけだった。

ミトスはリフィルと一緒にクエストに出かけたようだ。

そこに、ルミナがてくてくとやってきた。

「マオ、アニーちゃん、ケーキあるって本当？」

甘党の彼はいち早く情報を聞きつけてやってきたようだ。早速シュークリームとエクレアを食べ始めるルミナ。

かなりスピードが早かった。甘いものをそれだけ

食べたのに最後はパニール特製のココアまで飲んでいる。

「ふう、お腹いっぱい」

「ルナさんたちはどうしたんですか？　　すずちゃんもいないようですけど」

「ルナちゃん後は後にするって、あ、できたらミルフィーユは残しておいてくれってさ。ルーはすずちゃんとクエストだよ」

アニーの問いに応えて行くルミナ。

と、いきなり涙目のカノンノが彼に抱きついた。

「ルミナああああああっ！！」

「か、かかかかかかの、カノンノちゃん！？」

好きな女の子と密着している状況に赤くなるルミナ。  
恋愛小説大好きなアニーの目がきらきらと輝いていた。

「どうしよう、ルミナ……」

「えっ！？」

「ルナの運営資金、なくしちゃった……」

驚きの声がギルド中に響き渡ったー！。

数分後。

バンエルティア号が一時停止した街で。

「なんで……なんで僕が女装なんて

しなくちゃいけないのさああああっ！！」

顔を真っ赤に染めた金髪の少年の悲鳴のような

声が響き渡っていた。

もちろんルミナだ。

彼の今の恰好は、フリルたっぷりの紺色のかわいらしい  
メイド服だった。元々女の子に見えるかわいいタイプとはいえ、  
この恰好は彼にとってかなり屈辱的である。

「ごめんね、ルミナ……。私のせいで」

涙目のカノンノに言われると、ルミナはそれ以上強くは  
文句を言うことができなかった。代わりに、こんな店

（いわゆるメイド喫茶）を紹介したゼロスを睨みつける。  
禍々しいまでのオーラが体からあふれ出していた。

「ゼロス？ どうしてこのお店にしたのかな？」

「いや、ここは給料が高いんだって！！」

俺様の下心、とかじゃ、ないからね？」

と言いつつもルミナの方を見ていないゼロス。

涙目になったルミナは絶叫した。

「死んじゃええええええっ！！」

「ぐぎゃあ！！」

ルミナは指をゼロスに突きつけ、藁人形に釘を深く差し込んだ。ゼロスは泡を吹いて倒れる。

ルミナを唯一制止できる頼みの綱のカノンノは、コレットが着ているのと似たデザインの薄緑色のメイド服を来て鏡を見ながら確認していた。

「ルミナさん、よく似合っています」

「嬉しくない！！ 似合っても嬉しくない！！」

プレセアが真顔で言うつと、さらにルミナはしくしくと泣きだしてしまった。彼女に手出ししないのは、やっぱり後が怖いからだろう。

「あの、ゼロスさんが死んじゃいます！！」

「ルミナ、落ち着いてヨ！！」

アニーとマオが必死で彼から藁人形を取り上げようとするが、ルミナは完全にキレており渡そうとはしなかった。

「ねえ、ルミナ、かわいい？」

と、そこにゼロスにとつての救いの天使が現れた。  
かわいらしいメイド服姿のカノンノに言われ、真っ赤になったルミナはこくこくとただ頷く。

藁人形を思わず落としたので、慌ててマオが拾って釘を引き抜き、アニーがヒールレーゲンをかけてことなきを得た。

ルミナ達と同じ掛け合いはいたるところで起きていた。

「ロイド、この服似合うかな？」

「コレットなら何を着ても似合うさー!!」

「る、ルーク、どう？ この服……」

「すげえ……似合ってる」

「カイル、どう、私のメイド姿？」

「最高だよ、リアル！」

「ジーニアス、似合ってますか？」

「す、すすすすごくにあにあ似合ってるよ!!」

「ゆ、ユリーどうです？」

「似合ってるんじゃないか？」

「ユリーちゃんと答えてください!!」

こうして、アルバイトが始まった。

ロイド、チェスター、アニー、ユリーが厨房。

他の人達はウェイトレス（というかメイド）

ポジションだった。男もいるが、強制的に

女装させられていた。

ちなみに、アーチェは「あたしも厨房がいい」と

言ったのだが、チェスターが「お前のメイド服姿が見たい」と

言っでごまかしたのでウェイトレスになった。

女装をよぎなくされたのは、ルーク、カイル、マオ、ジーニアス  
で、

いずれもルミナと同じで半泣きだったという。

仕方なくも、ルミナはシステムに従って接客を始めた。

「お、おかえりなさいませ、ご主人さま」

なれていないため、たどたどしさは中々抜けられないようだ。

しかし、他のメンバーはもつとたどたどししかった。

「おかえりくださいませ、ご主人さま？」

きらきらした目のティアに頼まれて、黒猫耳つきメイド服



を着せられた彼はちよつと接客の仕方を間違えていた。

客がちよつと茫然としている。

「ルーク違う！！ お客さんを返してどうするの！！」

「えっ、違うのか！？」

「『おかえりなさいませ』って言うシステムなんだよ！！」

ルークをフォローしながら、ルミナはまた別の客に笑顔を浮かべて接客していた。女性陣もまた笑顔で

接客している。やはり男性ほどこういう恰好に抵抗がないようだ。

だが、この中で一番笑顔なのはカイルだった。シンプルな紺色のメイド服姿で接客をしている。

「いつてらっしゃいませ、ご主人さま！！」

実は、リアラがあることを言っただけだった。

「カイル、頑張つてカノンノのために！！」

英雄は困難を恐れない！！」

「もちろんさ、リアラ！！ 英雄は困難を

恐れたりなんてしないんだ！！」

体よく使われていることに、カイルは気が付いていない。

リアラは腹黒くありません。賢いだけです。

「い、いろいろいらっしやいませ、ご、ご主人さま」

ご主人さま……」

間違つてはいないけれど、口ごもりまくりなのが

ジーニアスだった。

彼は厨房に行きたかったのだが、プレセアが

「着てくれますよね？」と肉球つきメイド服を渡したので断ることができなかったのだった。

うるうる目&上目づかいにはジーニアスは勝てなかった。

余談だが、仕事が始まるまでプレセアは至福の顔で

ジーニアスの肉球を触っていてジーニアスもどことなく幸せそうだったという。

「イツテラツシャイマセ、ゴシユジンサマ」

マオはシヨツクのあまり片言になっていた。  
動きもことなく機械的である。

「マオ、つらいのはわかるけど落ち着いて!!」

僕だつて女装嫌なんだよ!!」

仕事につつこみに忙しいルミナだった。

と、さぼっている連中を発見する。

「コレット、やっぱりかわいいよな」

「リアラもかわいいよ!!」

「ティアだつてカツコイんだぜ!」

「アーチェだつてなかなかのものだぜ」

接客している彼女をながめている、

ロイド、カイル、ルーク、チェスターだ。

「君たち、仕事してくれる?」

「……今やりますすぐやります!!」

だから怒らないでください!!」

黒笑顔で睨みつけると、すぐに彼らは

仕事に戻って行った。

イライラがつのる中、なんと次にやってきた客は  
ここを紹介してから帰って行ったゼロスだった。

ルミナの営業スマイルが、瞬時に黒笑顔に変わる。

「ご主人様、ちよつとこちらにいらして

下さいませんか」

「ちよつ、ルミナくん俺様一応客!!」

助けてプレセアちゃん!!」

ゼロスの襟首をつかみながらズルズルと

引きずっていくルミナ。

恐怖の表情を浮かべたゼロスは、

たまたま近くにいたプレセアに助けを求めた。

しかし、彼女はにっこりと笑うと

親指を下に向けた。

「ゴートウーヘル」

「のおおおおおおおっ!!」

ルミナは誰もいないスタッフルームへと

ゼロスを引きずって行くなり、いきなり

彼を新技を使って黒い球体の中に閉じ込めた。

ダークネスフィールド。闇属性の技だ。

「ルナちゃんに、ちょっとだけ見せてもらった

『恐怖の拷問』の拷問試してみたかったんだよね」

「る、ルミナくん、ゆるゆる許して!!」

「だーめ? 絶対に許さないよ。

いくら叫んでも無駄だからね、この中に

いる間は声は聞こえないんだから」

「るるるるるるルミナくん!? その拷問器具何!?

ていうかどこから出したの!? そしてそのすごい

笑顔に何!? あぎやあああああああっ!!」

ゼロスの声ははてることなく響いたが、誰にも

その声は届かなかったというー。

ちなみに、彼は皆の仕事が終わった後、

ルナに発見されて復活したらしい。

ゼロスはルミナにはもう逆らうまいと

思ったとか。

「もー、ルミナ仕事してよ!!」

「ごめんね、カノンノちゃん今やるからね」

帰ってきたルミナのエプロンはどす黒い血に染まっていた。

カノンノが無邪気にどうして汚れたのかと聞いてきたが、

ルミナは笑顔で「ケチャップがついちゃった」と嘘をつき

カノンノはそれを信じたようだ。

ゼロスの行方を知る者は、ルミナとプレセアしかいなかった。

ルミナはエプロンを替え、さらに仕事は続く。

しかし、このアルバイトは男性陣に多大なショックを与えたのだ。  
った。

「カイル！？ あんたまさかそんな趣味が……」

「みそこなつたよ、カイル！」

「ハロルド！ ナナリー！ 誤解だよ！！」

「ちよっ行かないでえええええっ！！」

「ジーニアス！？ あなたに女装趣味があつたなんて！！」

「育て方を間違えたのね……」

「姉さん待つて泣きながら走つていかないで！」

「僕は悪くない！！僕は悪くないだあああああつ！！」

「マオ……まさか、アニーの趣味か……」

「私の趣味じゃありません！！」

「ユージーンにみられたみられたみられた……」

「マオ、落ち着いて！！」

「ルーク！？ おまえそうだったのか……」

「そんな哀れむような顔で俺を見るなあああああつ！！」

「ルミナ！？ なぜ女装なんか……」

「ルナ……ちゃん……？」

たまたまやってきたハロルドとナナリーにカイルは誤解され、  
リフィルは泣きながら走り去つてしまい、ユージーンに目撃  
されたマオは打ちひしがれてのの字をかきつづっていた。

そのさいにアニーが着せたのかと勘違いされて  
アニーが怒っている。

ガイにいたつては完全にルークが女装趣味があると  
勘違いしてしまつていてルークが絶叫していた。

最後に来たのが、紅い目を驚きで見開いたルナである。  
後ろにはルーとすずの姿もあった。

「みなさん、かわいいですね」

「しっ！！すずよせっ！！」

「……………うわああああん!!」「……………」

一切の悪気なしにすが言った言葉をルーが慌てて止めようとしたが時遅く、ルミナ、ルーク、カイル、ジーニアス、マオは泣きだしてしまった。  
「る、ルナ!? どうしてここに!?!」

息せき切ってカノンノが駆け寄ってきた。  
ルナは首をかしげている。

「どうしてってここはカフェだろう?」

私がいても何の問題はないだろうと思うけど」

「ルナさんが、何か甘いものでもおごってくださいと……」

「俺はコーヒーでも飲もうって誘われたぜ」

「ところでカノンノ。駄目じゃないか、頼まれたことをちゃんとしないと」

じろりと睨まれ、カノンノはギョツとなった。

女装メンバーが凍りついている。

「な、なんで、知ってるの!?!」

「ジェイドがチャットに届けてくれたんだよ。」

カノンノが放置していた、ってな」

「……………僕(俺)たちの苦労って一体……………」

彼等はもう真っ白な灰になって燃え尽きていた。

ルナに金がなくなっただと思われないために

バイトをしていた訳で、ルナが知っている上、

金はなくないなかったとすれば……。

苦労は完全なる水の泡である。

次の日、女装メンバーは部屋に引きこもったという。

「ルミナあ、ごめんってば、ケーキ作ったから出てこない?」

「カイル、マーボカレーよ。大丈夫、ナナリーたちはわかってくれたわ」

「ルーク、ガイはボコッておいたから安心して！　ほら、からあげよ」

「ジーニアス、すみませんでした。グラタン作りました、出てきてください」

「……絶対にいやだ……」「……」

彼女たちが何か言おうと、彼等は一日中部屋から出てこなかった――。

## 天然ディセンドーの最悪なアルバイト（後書き）

ルミナがカノンノのためにアルバイトをするお話です。主人公は最初と最後の方にしか今回はでてきません。

次回は今度は姉が災厄に見舞われる「腹黒ディセンドーの最悪な一日」をよろしく願います。

腹黒ディセクターの最悪な一日　く満月にはご用心く（前書き）

オリキャラとテイルズキャラの  
恋愛があります。



## 腹黒ディセンダーの最悪な一日　　満月にはご用心

ルナ・チエイサーは、走っていた。

彼女は何者かに追われていたのだ。

いや、走っていた、という表現には

どこか語弊があるかもしれない。

彼女は、とある人物に抱きかかえられていたのだ。

その人物は、血のように赤い髪をしていた。

二人が走っている、その理由は、一時間前に

さかのぼる――。

その日はいつものように始まった。

当番のカノンノ、プレセア、ずっと笑いあいながら

洗濯物を干し、ルナが朝食の支度を整えて

食後のケーキを焼いていた時にそれは始まった。

ルナが、いきなり苦しみ出したのだ。

カノンノは心配のあまり緑の瞳に涙をためていた。

「ルナ、どうしたの！？　しっかりして！！　ルナ――！」

「死なないでください、ルナさん――！」

いつもは無表情なプレセアも、今にも泣きそうな顔で彼女に取りすがっていた。

ルナは口もきけない状態らしく、白い手を喉元に

あてて苦しげにあえいでいた。

その頃にはすでに、甲板にはかなりの人数がやってきている。ジェイドやハロルドさえも、ルナの様子に青ざめていた。

「アニーなんとかしてヨ！！　ルナを助けて――！」

「馬鹿言わないでよマオ！！　私だって助けたいけど……、どうして苦しんでいるか分からないのに助けられないわ」

「このアホ神子――！！　どうにかしろ――！！」

「理不尽だろ、このでかメロン……ぐほあっ!!」

「ルナ!! 俺をいくらでもからかっていいから泣くな!!」

甲板は大変な騒ぎになっていた。

泣きじゃくり、アニーに食ってかかるマオ。

取り乱しすぎてゼロスを揺さぶり、言い返されて

そのまま殴るかかるしいな。

ルーもまた緑の瞳からぼろぼろ涙を流していた。

ルナは首を振り、なんでもないと言わんばかりの動作をするけれど誰も信じなかった。青ざめた顔で

それをやっても全く説得力がない。

ただ一人、ルミナだけはけろりとした顔なのだが、それにも誰もが気が付いていないようだ。

と、ルナの体からまばゆい光が溢れ始めた。

一人を除き、息をのむ全員。

やがて光が晴れた時、ルナはすでにその場にいなかった。消えたのではない。

彼女が先ほどまでいた場所に、金色の小さな仔狼が横たわり、紅い目を不安そうに潤ませていた――。

場所を移し、ここは医務室。

大事をとって、ルナと思われる金色の仔狼を、カノンノが抱き上げてベッドに寝かせたところだった。

当の仔狼は、およそ動物とは思えない態度で

腕を無理やり組み、困ったような顔である。

それはとてもルナに似ていたから、

本人だろうと女性陣は理解した。

?心配をかけてすまない?

『犬がしゃべった!?!』

いきなりルナが口を開いて言葉を話したため、この場にいる女性陣は驚いたようだった。

ルナがカツとなつて叫ぶ。

「？狼だ！！ 断じて犬ではない！！ お・お・か・み！！？  
「わんたろ」

「？犬じゃないって言つてんだろぅがあああつ！！？」

青い瞳をきらきらさせるコレットに、ルナは牙をむき出して威嚇を始めた。だが、かわいらしいだけでまったく怖くはなかった。  
「ルナ、かわい、抱っこさせて」

カノンノに言われたルナはじりじりとベッドの上で後退した。  
「ブライドとかがいるいるあるらしい。」

「？断る！！ 断じて嫌だ！！ 私は狼だぞ！！」

狼は気安く抱っこされるものではない！！？

きっぱりと断るルナ。しかし、カノンノ達は  
きらきらした目でさらにルナとの距離を詰めていた。

ルナは恐怖のあまり後退するが、やがてベッドの端  
まで追いつめられてしまっていた。

「肉球……」

「さ、触らせてルナ！！」

特に、プレセアとティアは目がイツちゃつて怖かった。  
身の危険を感じたルナはベッドを飛び出して逃亡をはかる。

しかし、さすがそれ以上の速さで動いたので簡単に

ルナは捕まってカノンノに引き渡された。

「わあ。すっごいふつかふか」

「？や、やめっ、カノンノ！！ そ、そんなとこ、

あ、あははは、やだ、くすぐりたい！！？」

お腹のあたりを撫でまわされ、ルナの体がびくんと跳ねた。  
じたばた暴れて離すように言うものの、カノンノは離す気配がなかった。

さらに撫でているため、ルナはもう涙目だ。

「肉球、ふにふにふに……」

そうしている間に、ちゃっかりとプレセアが肉球を触っていた。

彼女の顔は恍惚として満足そうだが、正反対にルナはさらに目を潤ませるばかりだった。

「ひゃああああっ！！ やめろ、そこ触るなあああっ？」

いいなあ、とティアが指をくわえていた。

ルナは困り果てていた。このギルドの女性陣は、ほとんどが動物好きなのである。ナンはカロールと出かけたし、ジュデイスとリフィルとリタは巻き込まれないためにその場からいなくなっていた。

唯一動物が苦手なのがチャットだけれど、助けるのは無理だろう。彼女は青ざめて半泣きだった。

「うわああああん！！ ラピードだけでも精一杯なのにまだふさふさがいたなんてえええええっ！！」

「ふさふさ言うなっ！！ 私の本性は人間の方だ！！」

ただ変身する体質なだけで！！？

「私も抱っこしたいわ……。……てゅーか解剖したい」

「おい今不穏なの聞こえたぞ！？？」

ハロルドは後半だけ小声で言ったが、聴覚が発達しているルナにははつきりと聞こえてしまった。

このままじゃ殺されると思ったルナはカノンノの腕から飛び出すと脱兎のごとく逃げ出した。

後ろから女性陣（三名除く）が追いかけてくるが振りかえらずに逃げ続けた――。

次にルナがやってきたのは、男性陣がいる場所だった。

ホールの方に集まって作業をしていたようだ。

「助けてくれ！！？」

「犬がしゃべった！？」

「犬じゃなあああああい！！？」

とりあえずルナは身ぶり手ぶりを交えて

男性陣に事情を説明した。かくまってくれる

ように必死に頼み込む。

「誰から逃げてるんだ？」

？女性陣のほぼ全員からだ！！ 助けてくれあいつらから！！？  
今にも泣きそうな潤んだ目に見つめられ、思わずかわいい、と思う男性陣。やはり彼らも動物と子供には勝てないようだ。

こうして男性陣はルナを守るため、即席のバリケードになることになったのだった。

一番真っ先に走ってきたのはカノンノだ。  
きらきらと緑の瞳が期待で輝いている。

彼女の前に立っているのはルミナだった。

「ルミナッ、通してくれるよね！？」

「カノンノちゃん、いくら君でも駄目だよ。

ルナちゃん嫌がってるもん」

「むっ」

カノンノは頬を膨らませてルミナを睨みつけた。  
怖くないどころかむしろかわいいので、ルミナは  
動じることなく彼女を見つめ返す。

「通してくれたら、キスしてあげるのに」

「えっ、本当！？」

だが、次のカノンノの言葉でルミナはあっさりと  
実の姉を裏切った。顔を真っ赤にしてバリケードからずれる。  
満面の笑みを浮かべたカノンノは

彼の頬に約束のキスをした。

？この裏切り者！！？

ルナの悲痛の叫びがもれる。

次の関門はルーだった。進み出たのはすずだ。

「お願いです、ルーさん、通してください」

「何で俺が通してやらなきゃなんねえんだよ」

ルーは明らかにめんどろそう顔をしている。  
それでもどかないのは、血のつながらない姉に

対する優しさなのだろう。

すずは困ったように眉をひそめた。

ルーはまったくどく気はないようだった。

「また激辛カレーを作ります!!」

「げ、激辛カレー!? …… うつつ、そ、

その手には乗らねえぞ!!」

一瞬すずの言葉にどこうとしたルーだったが、  
ルーから無言のプレッシャーや殺気を感じたため、  
必死で誘惑を頭から叩きだした。

「なんで……」

「ん……?」

「何で通してくれないんですか!!」

「ばかあああああああ!!」

「うつわあああ!! …… すずが乱心したあああ!!?」  
すずはそのまま泣きそうになりながらルーを殴り飛ばし、  
ゼロス、スパイダ、レイヴンをも倒し次々と関門を突破  
していった。ルーは気が気ではない。

そうこうしている間に、コレットが次の関門  
であるロイドの前に進み出て涙目で懇願していた。  
よっぽど触りたかったのだろう。

まあ、ルーは犬じゃなくて狼なのだが。

「肉球が触りたいんです!!」

ちやっかりとプレセアもコレットの戦法をマネて、  
わざわざ目薬までさして涙目を作ってジーニアスを  
魅了していた。二人は勝てずにどいてしまう。

「よし、コレット、通れ!!」

「がんばってね、プレセア!!」

?こらあああああ!!?

ロイドとジーニアスが裏切ったのを皮切りに、  
続々と裏切る者たちが出てきた。

「ヴェイグ、お願い、通してくれる？」

「クレアアアアアッ！！」

「ルカ、通さなきゃあんたの秘密バラすわよ」

「ええっ！！ やめてよイリア！！」

「ルカはこの間ねー。怖い話したらー」

「うわああああっ！！ どく！ どくからやめてー！！」

「お願い、ルークどいて。どいてくれたらデートしてあげるわ」

「よっしゃああああっ！！ どくぜ！！」

ヴェイグはクレアに笑顔をむけられて裏切り、ルカはイリアに脅されて裏切り、ルークはティアにデートの誘いを受けて裏切っていた。コングマン、リーガルもそれぞれフィリアとアリシアにねだられて裏切っている。

ガイはパティが前に出たとたん悲鳴を上げて逃げ去った。

次の関門はリッドで、前に出たのはファラだった。

「絶対に通してもらうからね！！ 覚悟！！ はああああっ！！」

「ぎゃああああああっ！！」

「何で僕まで！？」

「僕は明らかに関係がないぞ！！」

「うわああああああん！！」

ファラはそのままリッドを、キール、リオン、マオを巻き込んで蹴り飛ばしていた。アニーが半泣きになってマオに回復の術をかけて癒している。

ルナはここに残っていることは危険だと判断した。

ちょうど彼女のすぐ前にいたセネルに声をかける。

「セネル、時間稼ぎを頼む。移動するから？」

「ああ！！ 分かった！！」

「？空気読め！！ この鈍感男おおおおっ！！？」

ルナは女性陣にバレないように逃げたかったのだが、セネルが大声で返事をしたためバレてしまった。

女性陣は残りのメンバーを追い払い、ルナを

ものすごい勢いで追いかけてきた。

ルナは最後の力を振り絞り逃げるばかりだと、その小さな体が誰かにぶつかった。

「うわっ、な、何だ!？」

ルナがぶつかったのはアツシュだった。

血のように赤い髪はもう間違えようがない。

？私はルナだ!! 助けてくれアツシュ!!？

(か、かわいい……？)

さすがのアツシュもこの姿のルナに魅了されてしまっていた。うるると潤んだ瞳で見つめられ、放りだすことができないようだ。

「何でこんなことになっているんだ？」

？私は満月になると狼の姿になる体質なんだ!!

私をあいづらから救ってくれアツシュうう？

アツシュは背後から殺気のような負のような

ものを感じた。振り向きたくないが、どうしても気になる。

仕方なく振り向くと、大勢の女性陣が武器を構えて立っていた。

(女って怖ええええええっ!!)

ガイではないが、思わずそう思ってしまうアツシュだった。

ルナは小刻みに震えてさらにアツシュに強く抱きつく。

「あいつらから逃げてるのか？」

仔狼はこくこくと頷いた。二人が話している間に、女性陣は二人(一人と一匹)との距離を詰めていた。

「アツシュ、その子渡してくれる？」

黒笑顔満載のカノンノが手を差し出して問う。

背後からかなりの負が溢れていた。

「い、嫌がつてんだろうが行くぞルナ!!」

アツシュはルナを小脇に抱えたまま

船内を駆けだした。



ルナは恐怖のせいか一時間前よりも毛並みが衰えていた。

こんな状況だが、ルナは一抹の嬉しさを感じていた。

想いに気付かれていないだろうか。

この姿でなくなったらもうこんなことはできない  
かもしれない。だから、今はこのままこうしていたかった。

「ルナとアツシユは甲板にいますよ」

「この陰険メガネええええつ！！」

絶対いつか殺す。ルナは怒りの炎を

「ルナ、大人しくてね？」

しかし、アッシュはそんな彼女を強く抱き寄せた。

アッシュ……！！？

どくん、と胸が再び苦しくなったのはその直後である。ルナは体が元に戻り始めていると気づいて青ざめた。

だが、どうすることもできないまま体は人間のものへと戻っていく。女性陣の顔が瞬時に紅くなった。

なんと、ルナは一糸まとわぬ姿で、アツシュにその豊かな胸を押しつけるように抱かれていたのだ。

アツシュは鼻から大量の血を出しながら気絶しかけていた。

「い……いやああああああつ！！」

ルナは胸を手で押さえて悲鳴を上げ、部屋に逃げ帰った後しばらく部屋に引きこもっていたという。

腹黒ディセnderの最悪な一日　　〽満月には〽用心〽（後書き）

今回からルナとアッシュの恋愛  
模様がちよつと変わってきます。  
次回もよろしく願います。

天然ディセンダーと腹黒おとぎ娘の大作戦（前書き）

オリキャラとテイルズキャラとの  
恋愛があります。

## 天然ディセクターと腹黒おとぎ娘の大作戦

「ルナあ、ごめんつてば、許してよお!!」

バンエルティア号のリタとナンの同室の部屋に、カノンノの悲痛な叫び声が響いていた。

ルナは無視して『焼き鳥天使と破天荒教官

(著者アスベル・ラント)』を読んでいる。

母親みたいな性格の焼き鳥丼が好きな女性と、人をからかったり嘘を教える某教官との恋愛ものである。

朝書店が開くとともに急いで買いにいった新作だ。

昨日の騒ぎはルナの心かなりの傷を負わせた。

完全に彼女はご立腹であり、一部の女性陣と裏切った男性陣とは口を利いていなかった。

カノンノはことごとく無視され続け、

淡い緑の瞳に涙をためている。

だが、そんな彼女の様子を見ても

ルナは冷たい表情を崩しはしなかった。

反対に、部屋の主であるリタとナンは気遣わしげな表情を見せたが。

「部屋を出る。うるさくて集中できない」

「ルナあああああああああつ!!」

あくまでナン達だけに声をかけ、

ルナはすがりつこうとするカノンノを突き飛ばすように歩き出した。

カノンノはショックで泣きだしてしまう。いまだかつて、こんなことはなかった。

ルナが、自分を無視するなんて。

彼女が本当に怒っている証拠だった。

「カノンノさん……」

「し、心配するんじゃないわよ!!  
すぐに機嫌なんか直るわよ!!」

リタとナンになぐさめられても、カノンノは  
子供のようにつまでも泣きじゃくっていた。

さんざん泣いた後、甲板にやつてくる。

……ルナはいなかった。いるのは、弟のルミナと  
ルーだけのようだった。

ルーはともかく、ルミナはなんだか元気がない。

「カノンノちゃん、おはよう。……ルナちゃんに、  
話しかけるなって言われちゃった」

ルミナの紅い目が思い切り潤んでいた。

さっきまで泣いていたらしく、目の下がわずかに紅い。

いくら弟とはいえ、ルナは裏切りを許さなかったようだ。

ルーは不機嫌でも落ち込んでいかなかったが、どこか  
不思議そうな顔で首をかしげていた。

「昨日からさすが口を利いてくれないんだよな。どうしてだろう」

その理由は、彼以外には全員が知っていた。

昨日の一件がいまだに尾を引いているのだ。

「すずちゃん、本当にかわいそう……」

「ほんつとに鈍いよね。あのね、すずちゃんはあるが」

「カノンノさん!!」

すずは同情するルミナと、思わずすずの想いを

ルーに伝えようとするカノンノ。

しかし、金切り声をあげたすずがその場に飛び込んできた。

その茶色の目はぎらぎらと怒りで輝いている。

痛いほどの力でカノンノは腕を掴まれた。

カノンノは悲鳴を上げたが、すずは容赦しない。

「……ちよつとこちらに来ていただけますか?」

聞いてはいるものの、その言葉には有無を言わさぬ迫力があつた。  
カノンノは淡い緑の目を大きく見開き、ルーとルミナも茫然として

いる。

「さすがこんなに強い感情を表に現したことは初めてなのだ。」

「すずは強い力でカノンノを誰もいないところまで引っ張っていくときつい口調で怒鳴りつけた。」

「カノンノさんが、ルーさんにそれを言ってしまったら意味がありません!!」

「何よ。さつさと言わないすずちゃんが悪いんでしょっ!!」

「余計なことをしないでください!!」

「すずは、すずは、ちゃんと自分の口で想いを告げます!!」

「目から滴り落ちるは、朝日にきらめく透明な雫。」

「すずは泣いていた。いつもの大人びた彼女とは大違いである。」

「カノンノはおろおろとその場に立ちつくした。」

「ご、ごめんね、すずちゃん、ごめんね……」

「いいんです、でも、すずは自分でルーさんに想いを伝えます」

「そこで、カノンノはあることを思いついた。ルナも自分で想いを伝えたいだろうが、

そのシチュエーションとか、彼にもう少し近づくこととかは手伝えるだろう。」

「それが成功したら、ルナはまた自分と口を利いてくれるかもしれない。」

「すずちゃん、ありがとう!!」

「首をかしげるすずに手を振り、カノンノは走り出した。」

「その頃、ルミナとルーは。」

「……すずって好きな奴いるんだな」

「（ほんつとにこの子見上げたバカだよ!! ああ反応でも気付かないんだ!!）」

「どこかほづけたように言うルーに、ルミナは心の中でつつこんだ。チエイサー姉弟（一人はユグドラシルだけ）の特徴は、かなり鈍いことである。」

「ルナも自分は鋭いと思っているかもしれないが、本当は鈍いのだ。」

特に、恋愛関係には。

「あのさ、あれでもすずちゃんのこと分かんない？」

「分かんねえよ」

「鈍すぎでしょっ！？ もういいよ、魔神剣！！」

「いきなり何すんだ理不尽だろ！！」

「うるっさああああい！！ 覚悟！！」

「ぎゃあああああっ！！」

あまりに鈍いルーに腹を立てたルミナは、彼をストレスのはけ口にして

少し機嫌を直したのだった。そこにカノンノが帰ってくる。

「ルミナ、ルナと仲直りするいい方法思いついたよ！！」

「え？ 本当！？」

ルミナの笑顔が太陽のように輝く。カノンノは一旦いなくなると、大勢の女性陣と裏切った男性陣を連れてきた。

彼らにも協力を依頼したのだろう。

「ルナさんと仲直りができるのならば、なんでもやります」

プレセアはまるで戦地におもむく戦士のような顔だった。

ルナに無視されたのがかなり応えたようだ。

他の皆もプレセアほどではないが、かなり真剣な顔だった。

「カノンノちゃん、それで、仲直りの方法って何なの？」

「よくぞ聞いてくれたね！ アッシュとルナをくつつける作戦が  
始動する時が来たんだよ！！」

「アッシュとルナをくつつける作戦？ おもしろそうじゃん！！」

一番最初にそう言ったのは、アーチェだった。イリアも了承気味である。

ルビア、アニー、エステルも目を輝かせていたけれど、それを留めたのは、

彼らに片思いする人、もしくは恋人だった。

「そんなことしたら、もっと嫌われないかな？ ほら、言うじゃない。」



人の恋路を邪魔するものは、馬に蹴られて死んじゃえって」

「昨日調子に乗ったからこんなことになったんだろ？　ちよつとは考える、バカ」

「イリア、ルナは自分で告白したいと思うよ」

「ルビア、ルミナの言うとおりだと思うぜ、俺は」

「お人よしすぎるのはお前の良い所だが、何にでも頭をつっこみたがるの」

「は悪い癖だぜ、エステル」

「ルナはそんなこと望んでないと思うヨ」

上から、ルミナ、チェスター、ルカ、カイウス、ユーリ、マオである。

彼等は彼女たちの猛反撃を受けた。

「あによ、チェスター！！　あたしたちとルナが仲直りできなくてもいいての！？」

「そ、そんなことは言ってねえだろ！！」

「それ以外の方法があるならちゃんと言いなさいよ。考えてないの？」

チェスターは顔を真っ赤にして怒るアーチェに言い負かされた。おもしろそうとか言っていたが、計画には真剣で取り組もうとしているらしかった。

「あたしに逆らおうなんて生意気なのよ、ルカのくせにっ！！」

「痛っ！！　やめてよ、イリア」。……うわあああん！！」

ルカはボカボカと殴られて泣き始めてしまった。もし付き合っても、この二人の

関係はあまり変わらないだろう。

「何よ何よ、カイウスのバカッ！！　二番煎じなんてカツコ悪いんだから！！」

「何だとっ！！」

カイウスたちはいつものようにぎゃんぎゃんと口げんかを始めてしまった。

二人とも気が強いので、中々ケンカは終わらないのだ。

「ルミナ甘いよ、クリームたっぷりケーキより甘い!! 放っておいたら、

あの二人がくつつく訳無いもん!! それに、邪魔じゃなくて協力!!」

ルミナは頬を膨らませていたけれど、カノンノの気迫に負けて頷いていた。

他の計画は思いつかなかったたので、それに乗るしかないのだ。

「ユーリ、他に何か案があるんです? 私真剣です!!」  
ルナと仲直りがしたいんです!!」

ユーリは考えて考えて考えたが、案が思いつかなくて協力することになった。

最後に、エステルが「ルナのおやつがまた食べられますよ」と言ったのも大きいだろう。

ルナは朝から一切の家事をしていないのだ。当然、食事やおやつも作っていない。

「マオ!! 協力して!! あなたの力が必要なの……」

アニーだけは、マオに目を潤ませたおねだりに走った。手まで握っている。

マオは顔を赤らめると、舞い上がった様子で頷いていた。

「もちろんやるヨ!!」

((さつきと言ってること違う!!))

マオの様子を見たカノンノたちは、そっちの方式を取ればよかった、と嘆いたという。

こうして作戦は可決され、正式に実行に移されることになった。

ルナは悩んでいた。あの裸を見られた一件以来、アッシュとまともに顔を

合わせていないのだ。どうしても意識してしまって、口を利くこともできない。

好きな人と会うことができないほどつらいことはないものだ。

「ルナさん！」

ためいきを吐いた時、ルナは背後から声をかけられ、振り向いた。そこにいたのは、部屋を貸してくれている少女、ナンだった。

ルナがルミナやカノンノと顔を合わせたくなかったため、

二人部屋に招き入れてくれたのである。

「ナン、どうした？」

「いえ、これもらったんですけど、一緒に行きませんか？」

ナンは遊園地のチケットを差し出した。もらったといったが、実際はリーガルが購入したフリーパス券である。

ルナは気晴らししたい気分だったのでそれを受け取った。

「ナン、でもいいのか？ カロルを誘って行った方が」

「か、カロルなんてどうでもいいの！！ ルナさんと行きたいの！！」

有無を言わずナンはルナに行くことを約束させた。首をかしげながらも、

ルナは彼女の手を取ろうとする。と。

「あんたそんなカツコで遊園地行くつもりなの！？」

どこからカリタが現れた。手に何か布のようなものを持っている。これは何かあるな、とルナの目が細まった。

「これ着なさいよ、これ！！」

リタが差し出したのは、紅いボタンつきの上着と黒いスカートである。

フリルとリボンがほどよくついたそれは、シックでとてもかわいらしい。

ルナにはよく似合っているように思えた。

「なあ、リタ、何かたくらんで」

「ないわよっ！！ それと、髪にはこのリボンを結んで行きなさい！！」

「早く着替えないと駄目ですよ！！」

「話を聞いてくれないか！？　うわっ！！　脱がすな！！　やめろ  
おおっ！！」

ルナは無理やりその服に着替えさせられ、髪の一部を黒いリボンで結ばれ

たままの状態で遊園地に連れて行かれた。

しかも、ナンとリタは後はこれから来る人と楽しんでね、とルナをおいて行ってしまったのだ。ルナはじろじろと行き買う人に見られて落ち着かない。あまりおしゃれをして出かけたことがないのだ。

それに、熱い視線が見守っていることにも気づいていた。  
ギルドメンバーの何人かが、こちらを隠れて見ている。

（気付かれていないとも思っているのかあいつらは……）

ルナはこの計画の意味を意図を理解した。ルナをおしゃれしてここに放置したということは、これから来る人とはアッシュ。

彼等はルナと彼を近づけるためにいろいろ計画を練っていたのだ。ルナはいつものように髪飾りを触ろうとしかけて、それはないのだと思いついてやめた。顔が赤らんでゆくのが自分でもわかる。

ルナは余計なことを、と腹を立てる半面、私を思っで協力してくれている、

と暖かい気持ちにもなった。

「ルナ！？」

そこに、待ち人が現れた。彼の顔もひどく赤かった。  
やつぱり、あの一件以来意識してしまっているようだ。

「な、なんでお前がここにいるんだ？　俺はリオンに誘われたんだが……」

「私もナンとリタに誘われたんだが……」

ルナは極力彼を見ないようにして言った。だまされていたことを  
気付いて

いないという演技をして、困ったような顔を作る。

彼らの気持ちを無下にしたくなかったのだ。

「彼等はまだ来ないようだな」

二人の手にあるのは、一日フリーパス券が一枚ずつ。  
そして、待ち人はいない。

「じゃあ、一緒に行くか？」

「ふえっ！？ な、ななな何を！？」

何でもないことのように言われ、ルナは目を潤ませた。  
顔はまるで熟れた果物のようである。

ルナはとても驚いていたが、言った本人も自分で驚いているようだった。

アツシュはルナを誘ったことを、自分でもびっくりしていた。  
なんでそんなことを言ったのか全く分からない。

ただ、何故かルナと別れたくない気がしたのだ。

彼女を見る周りの目も気になる。ルナは、前に一緒に買い物に行った時も、

二人の男にナンパされて連れて行かれようとしていた。

それに、彼女の恰好はすごくかわいらしい。

いつもツインテールにしている髪型は、今日はリボンをつけて下ろされていた。

幾分大人びて見える。それにしても、泣きそうな真っ赤な顔をしたら彼女は、

いつもとは違って新鮮だった。

とにかくも、アツシュはルナと行動を共にすることにした。

人が多いので、手をつないで歩く。

あうあうと言いながらも手を離さない彼女が、  
ひどくかわいらしかった。

「まずどこに行く？」

「どこでもいい……」

ルナは初めて遊園地に来た子供のように周りを見回していた。  
きらきらと好奇心で紅い目が輝く。ルナは遊園地なんて初めて来た

のだ。

「じゃあ、あれに乗るか？」

アッシュが指差したのは、ジェットコースターだった。

瞬時にルナの顔が青ざめる。握られた手が震えたのを感じ、アッシュは驚いたようにルナを見た。

「怖いのか？」

「こ、怖くなんて無い！！ 乗るよ乗ればいいんだろ！！」

ルナは顔を真っ赤にして怒りを示した。二人でジェットコースターに乗り込む。

だが、ルナの顔は死に直面する人のように青ざめていた。これから死に行きます、

みたいな感じの青ざめ方だった。

「おい、本当に大丈夫か？ 怖いんだろ？」

「コワクナンテナイ……」

「あからさまじゃねえか！！ カタコトになってんだろ！！」

ガタンっ、とジェットコースターが動き始めた。

ルナは力いっぱいアッシュの手を握り締める。

「きゃあああああああああつ！！」

「ぎゃあああああああああつ！！」

ルナが悲鳴を上げると同時に、アッシュもまた悲鳴を上げていた。

……怖い訳ではない。ルナが本当に力いっぱい、渾身の力でアッシュの手を握っているからである。指がちぎれると錯覚しそうなくらいの力だった。

そして、乗り終わった後は……。

「こ、こわ、こかったよお、ふええ……」

アッシュに抱きつき、泣きじゃくるルナだった。

頭をなでながらアッシュがなぐさめている。

その様子を、うらやましそうにギルドメンバーが見ていた。

「いいなあ、ルナ……（わたしもルミナとデートしたいな……）」  
「そうだね、いい感じだね（僕も今度カノンノちゃん誘おうかな……）」

「（ルビアにあれぐらいのかわいらしさがあれば……）」

「（カイウスにあれぐらいの優しさがあれば……）」

「今度、一緒に行くか？ アーチエ」

「ええ！？ いいのチエスター！！ もちろんあんたのおごりよね？」

「ああ！！ 何でもおごつてやるぜ」

「（ううつ。僕にあれぐらいの勇気があればいいのに）」

「（あたしにもつと素直さがあれば……）」

「マオー。次あれの乗る？」

「うん！！」

「ジーニアス次どれ乗りますか？」

「ぶ、プレセアの好きな奴でいいよ」

「……何しに來たんだあんたら……」

カノンノとルミナはいつか自分たちもデートをすることを計画していた。

ルビア&カイウス、ルカ&イリアはないものねだりで悩んでいる。  
なんと、チエスターたちは次のデートの約束を取り付けていた。  
そして、マオ&アニー、ジーニアス&プレセアはちゃっかりデートをしている。

ユーリは迷子になったエステルをラピードと共に搜索中だった。  
本の匂いがする、とか言つてふらふらといなくなつてしまったのだ。

「遊園地怖い……もう帰る……」

泣きじゃくるルナを、アッシュは泣きやまそうと必死だった。

まるで子供のように（実質0歳だから子供だけど）、ルナは泣いている。じろじろと視線がアッシュに突き刺さっていた。

アッシュが泣かせたと勘違いしているのである。

ひどい彼氏ね、とかひそひそと言っているのが聞こえてきた。

「泣くな、ルナ。もう怖くないからな……」

「ひゃああっ!!」

耳元で優しく囁いてやると、ルナは赤くなって文字通り飛び上がった。

涙目でアッシュを睨みつけている。その耳は真っ赤だった。

「み、耳はやめろ!! 耳は!!」

「……弱点意外と多いな、お前」

「誰だって弱点はあるものだろうが!!」

笑われたルナは頬をふくらませていた。アッシュの前では、冷静な顔をすることができない。そのことが、とても腹立たしかった。

しかし、次に入ったお化け屋敷でアッシュが青ざめていたので、少しルナは気を良くしたのだった。少し苛立つことはあるものの、彼の隣はすごく心地がいい。

ルナはある決心を胸に秘め、アッシュと別れたのだった。

「あれ、ルナたち帰るみたいだよ?」

「ホントだ、あれ? ルナちゃんどこだろ?」

「ここだよ」

二人はぎよつとなつて振り向いた。他のメンバーも同様である。なんと、見張っていたはずのルナが背後をとっていたのである。

怖い顔でこちらを睨んでいた。

「う、うわああああルナちゃん!! どうして!?!」

「君たちの行動はバレバレなのだよ。まったく余計なことを……」

女性陣はそのことばに涙目になった。ちなみに、プレセア、アニ

ィ、エステルも合流を果たしている。

「だが、ありがとう……。今日は楽しかったぞ。」

……子供っぽく無視なんてして悪かったな……」

につこりと笑った顔は、本当に心からの笑みである。



全員もまた笑顔になった。

と、ルナは赤くなり、小声で女性陣だけに協力を持ちかけた。

「後、もう少しだけ、協力できるか？ 皆……」

「どうして？」

「私は、アッシュに告白する……」

その言葉に、女性陣は赤くなって歓声を上げた。  
。

## 天然ディセンダーと腹黒おとぎ娘の大作戦（後書き）

ルナがアッシュと二度目のデートを果たします。  
前回の女性陣達の行動に腹を立て、無視するルナ。  
そんな彼女の機嫌を直すため、ルミナとカノンノが  
二人をくつつけるための作戦を開始します。

## 腹黒ディセンダーの二世一代の告白（前書き）

オリキャラとテイルズ

キャラの恋愛要素が含まれています

## 腹黒ディセンダーの一世一代の告白

アッシュに告白する。

そう宣言したルナだが、なかなかできずにいた。

なにせ、目を合わせることも今では

難しくなっているのだから。

どうしても意識してしまい、悪口を

叩きつけることさえできなかった。

ましてや、「好き」だなんてとても。

「どうするの、ルナ？」

カノンノが心配そうに訊いてきた。ルナは明らかにうろたえ、涙目で考え込む。いつもの冷静さが嘘のようだった。

「うっうっうっ。分からない……」

「分からないって、ルナが告白するって言ったんじゃない！」

「分からないものは分からないんだ……」

まるで駄々っ子である。あまりのギャップにカノンノはあきれ顔だった。

両隣のルーとルミナに助けを求めるように視線をやる。

ルーもルナと同じように取り乱し、紅くなった。

さすがそれを遠くで見ているが、気付かないようだ。

「お、俺に訊いても無駄だぞ……俺は彼女も何もいねえんだからな……」

「ルー慌てすぎ……。カノンノちゃん、僕に提案があるよ」

「本当！？ ルミナ……」

ラブラブになってまだ日がそんなに経っていないとはいえ、もうキスまでした仲の二人は、ルナたちよりは恋愛経験値が高かった。

ルミナはニコニコした顔で言い、他の姉弟たちにうらみがましく見られている。

「最初にアッシュに直面して、失敗したら困るからさ。ルークで練習すればいいんじゃない？ ルークとアッシュって似てるんでしょ？」

「ルミナ名案だよ！！ どうかのひねくれものとは大違い！！」

「いちいち俺を引き合いに出すな！！」

「ルーとは言ってないじゃない。あれー、ひねくれ者って自覚、あるんだ？」

「うっうっうっ！！」

カノンノが意地悪く言うのと、ルーは涙目になって甲板を走り抜けて行ってしまった。

ルナに対するイライラがすべて彼にぶつけられたのだ。

かわいそうな少年である。

（だったらもう少し扱いをよくしろおおおっ byルー）

と言う訳で、ルークがティアと共に呼び出された。

そろそろと女の子たちが続いている。

恋愛小説が好きなアニーやルビアやエステル、コレットにプレセア、

リアラやミントまでいた。

「がんばろーね、ルナ」

「ぜひルナさんが告白するのに立ち合いたいです！！」

「ルナ告白がんばってくださいね」

「アッシュさんが了承しない時はこれ（斧）で殺します」

「ルナさんの恋を応援します」

「私も応援してるからね、ルナ」

「がんばって告白しようね！！」

「わ、私も、できるかぎり協力するわ」

上からコレット、アニー、エステル、プレセア、ミント、

リアラ、ルビア、ティアである。

ルナはこんなにならないんじゃないか、とまったくもなことを考えたが、

口には出さなかった。

世渡り上手なディセNDERである。

こうして、ルークを使って練習しよう作戦が始動された。

まずルークが赤毛のかつらをかぶり、アッシュみたいなオールバックに髪を整えた。

そうして見ると、本当に彼がその場にいるかのような錯覚を覚えるくらいだ。

だが、ルナは眉をしかめていた。

「……違うな」

「えっ？」

「アッシュはそんな人懐こそうな目はしてないぞ。ほら、もっと眉つりあげて。」

もつと睨むような目をして。……違うな。ぜんっぜん駄目だ」

最初は笑顔だったルークの顔が、注文をつけられるたびに悲しげになり、

ついには落ち込んで床にのの字を書き始めてしまった。

「……どーせどーせ俺なんて……」

「落ち込ませてどうするのよっ!!」

ティアがルークをなぐさめながらルナを怖い顔で睨んでいた。

ルナは申し訳なさそうな顔で謝罪する。

「すまない、アッシュと同じ顔を見てたらつい、な……」

「ついじゃないわよっ!!」

この後、なんとかルークとティアを落ち着かせ、

作戦の実行をすることができた。

ルナはルークの前に立ち、彼の目をしっかりと見つめている。その顔が、しだいに熱を帯びて紅くなり始めていた。

別人だとはいえ、同じ顔を見てドキドキしてしまったらしい。

「わ、わた、私は、お、お前のことが……」

口ごもりながらも、真っ赤な顔のルナが告白を始める。

女性陣は身を乗り出し、目をきらきらと輝かせ始めた。

「お前の事が……す、す、す……すごく嫌いだ!!」

女性陣とルークが思い切りこけた。

ぼしゅうつうつ、とルナは燃え尽きて立ちつくしている。

あまりにもべたな返しである。

「ルナああああ。何やってるのよ!!」

カノンノが珍しくルナを叱りつける。だって、だつてとルナは泣きそうだった。

「無理だ!! やっぱ無理!! 告白なんてできない!!」

「今更何言ってるんですか!!」

アニーがキツとルナを睨みつけた。エステル、ルビアも怖い顔だ。  
「いつまでもアッシュさんに想いが伝わらなくてもいいんですか!

!!」

「ルナ、勇気を出さなきゃずっと今のままです!!」

「ルナ、ちゃんと告白しなくちゃ!!」

ルビアとエステルにだけは言われたくないルナだった。

口には出さないが、その顔は不満そうである。

もう一回やってと言われ、ルナは再びアッシュの恰好をしたル

クを見た。

かっかっかつ、と顔が燃えそうなくらい紅くなる。

「私はお前を……あ、あい、愛して……」

ルナはもう目から涙さえこぼしていた。こんなにつらそうな顔で告白

する人は、他にいるのだろうか？ 素直になれないのも難儀である。

「うつうつ!! あ、愛して……いないっ!!」

『ルナあああああ!!』

ルナは泣きながら告白の練習を続けたが、結局素直に好きといえないまま夕方になってしまった。

最初はやる気だった女性陣たちも、叫び疲れてすっかり元気がなくなっている。

作戦を変え、女性陣たちはルナにはそのまま思ったことを言わせ、

後から翻訳するという方式を取ることにした。

「もう、ルナってば、この前はあんなにいい感じに話していたじゃない」

「あれは顔を見てないからできたんだ！！ 顔を見たら告白なんてできない！！」

「駄目です！！ 顔も見ないで告白なんて、情緒がありません！！」  
「この状況も情緒がないと思うがな……」

女性陣と言いいいながら、ルナはアツシュの元へやってきた。ずらずらと女性陣をひきつれながら、である。

ルミナやルーとクエストに行ってきたらしいアツシュは、ぎよつとなった

ような顔をしていた。お礼参りだと思っただけ。

俺何かしたか？ と思っているのがはつきりと分かった。

「アツシュ！！」

「は、はい……」

カノンノがひどく怖い顔をしているので、ついアツシュは丁寧な言葉で

返してしまった。気迫のようなものが全体からあふれている。

「いい？ ルナの言葉は聞かなくていいから、私たちの言葉だけを聞いてね？ ルナは素直じゃないんだから！！」

どんつ、と突き飛ばされるように、ルナがアツシュの前に進み出た。

熱があるんじゃないかと勘違いされそうなくらい顔が赤かった。

練習の時とは比べ物にならないくらい紅い。

「か、勘違いしないでほしいのだが！！」

（いきなりケンカ腰！？）

女性陣はぎよつとなったが、なんとかカノンノが口を開いた。

「ルナは聞いてほしいことがあるって言ってるんだよ」

（なんか苦しいです……）



これでほんとにいいのか、とアニーたちはがつくり来ていた。告白というより、ケンカを売りに来たみたいだった。

「後から来たけど、私の方が実力は上なんだぞ!!」

男で私より腕力があるからって、言い気になるなっ!!」

「ギルドに来てからあなたをずっと見てました……」

困惑するアッシュに、今度はプレセアが言葉を訳した。

珍しくその顔はしかめられていた。

「剣術と魔術が両方仕えるからって、私はまったくうらやましくないぞ」

「あなたの優れた能力に憧れています!!」

熱をこめてエステルが言う。ルナが小さくこくこくと頷いていた。本当はそう言いたかったらしい。

どう思えばそうなるのだろうと全員は思った。

「わざわざお前に合わせてレベルを上げてるっていうのに、

お前はルーたちとばかりクエストに行ってる……!!」

「今度クエスト一緒にいきましよう!!」

アニーがやけになって声を張り上げる。

アッシュは訳が分からないといった顔だった。

「まだ分からないのか!? ならばつきり言ってやろう!!」

(好きだって早く言って……!!!)

「わ、私は、お前のことが……」

(がんばれ……!!!)

「お前のことが……気に入らないっ!!」

「大好き……!!!」

カノンとルビアがユニゾンで大絶叫した。

ルナは息を切らせている。

「わ、分かったか?」

だが、アッシュの顔はしかめられていた。

まあ、あの告白では無理もない。

からかっていると思われたのだ。

「話はそれだけか？　ならもう行くぞ……」

ルナを見つめる瞳には、怒りの色があつた。

ルナは思わず口をつぐむ。

そうしている内に、彼は身をひるがえして

去つていこうとしていた。

（アツシュが……行ってしまう……。

いやだ！！　いやだ……！！）

ルナは勇気をふりしぼつて後ろからアツシュに抱きついた。

振り向いたその顔は、驚いていた。

「行かないでくれ、アツシュ……。私は……お前が好きだっ！！  
愛してるんだ……！！」

「え……？」

ようやくルナの想いに気付いたアツシュの顔が、その髪の色と同じくらい紅くなっていた。

二人は無言で紅くなったまま見つめ合う。

時間が止まったかのように、誰も動かなかった。  
とー。

「うわっ！！　すまんアツシュ！！」

いきなり走ってきたガイがアツシュにぶつかった。

彼の体がかしいで、ルナの方に倒れかかる。

ぶつかったガイと、女性陣が赤くなつて立ちつくしていた。

なんと、ルナとアツシュの唇が、寸分の狂いもなくぴたりとくっついていたのである。……キスしていたのだ。

「いつ……いやああああああっ！！」

しばらくのキスの後、我に返ったルナがアツシュを殴り飛ばし、走り去るまで、全員は動かなかった。

アツシュは茫然となっていた。いきなりの告白と、キス。

もう訳が分からなかった。ルナが自分のことを好きだなんて、アツシュは考えたこともなかったのだ。

彼女はいつでも悪口を言ったり、

ケンカしたりすることはあっても、あんなに

熱っぽく見つめてくることは今だかつてなかった。

それに、キスを誰かとするのも初めてだった。

唇に指で触れたアツシユは、女性陣のことを思い出して

青ざめた。覚悟を決め、その場に座り込む。

だが、断罪されたのは彼ではなかった。

「二人の邪魔をするなんて、どういっつもり!？」

「死んでください、ガイさん」

「せつかくここまでいい感じだったのに――!」

「最低です!! 空気を呼んでください!!」

「ルナの勇気を無駄にしないでください!!」

怒りのオーラをまとった女性陣がガイに迫る。

悲鳴と爆音が響く中を、アツシユは慌てて逃げ出すのだった。

その頃、ルナは。

「ルナさん手元見てください!! 手元!!」

「きゃああつ!! こげてるわ、ルナ!!」

「ルナ、これ完全に料理じゃない匂いしてるよ!？」

すっかり舞い上がっていた。手元も見ずにだんだんと

包丁を振りおろし、食材を切っている。

手を切らないのが不思議なくらいだった。

厨房にかなり危険な匂いがあふれている。

リリス、パニール、ナナリーは、あまりに怖いので止めることが

できなかった。その場に駆け寄ったら切り刻まれそうな

ほど高速できりつづけているのである。

そして、できあがった料理がテーブルに並べられた。

すべてがこげこげで、真っ黒かった。ごぼごぼと妖しげな

液体が煮えている。匂いもひどい。

アーチェヤリフィルの料理を完全に凌駕していた。

ルナ曰く、これはカレーらしい。

全員の手が明らかに止まっていた。

「腹に入ればなんでも一緒だぜ……があああつ!!」

アーチェたちの料理でも平気で食するリッドが、煙を吐き出して土気色になっていた。

コングマンも魂が抜けかけている。

余談だが、フィリアがガッツポーズをしていたのは、腹黒メンバーしか見ていなかった。

「い、逝ける逝ける……」

「リッド逝っちゃだめえええええつ!!」

「誰がレイズデッドおおおおおつ!!」

結局この料理は誰も食べることなく葬られ、

次の日、ルナの料理から逃れるためにクレアたちは

早起きしたが、それより前にルナは起きていた。

ぎよつとなるが、いいにおいがあふれているのでホツとする。  
「昨日はすまなかったな。私の料理が酷い出来になってしまったみたいで」

ルナが正気に返っているのを見て、料理が極上の味に戻っているのを

見て、全員が涙したという……。ルナの料理への信頼は戻ったらしい。

食事の後で、ルナは部屋に閉じこもった。唇を指でなぞり、彼とキスをした時のことを思い出す。恥ずかしいと思う反面、嬉しさがあつた。彼はショックを受けただろうか？

好きでもない女の子とキスをして……。

ルナは膝を抱えてベッドに座り込んでいた。同室のカノンノは、ルナを一人にしてくれていた。

ルナは頭がパンクしそうだった。考えても考えても、どうしたらいいのか分からない。

と、扉が叩かれた。返事をする前に、向こうから開く。

そこにいたのは、アッシュだった。

「アッシュ……」

「少しいいか？」

「ああ、構わないが……」

部屋に入るなり、アッシュはいきなりルナを抱きしめた。

ルナの顔色がトマトのような色になる。

「ななな何する、アッシュ……」

「分からないんだ……」

「な、何が……」

「お前を見ると頭がぐちゃぐちゃになってまともなことを考えられない……。好きとはそういうことなのか？」

熱を帯びた声がルナの耳を震わせる。

力が抜け、ルナは抵抗せずにアッシュにされるがままにしていた。

彼の手がルナの髪をなでる。ただそれだけのことなのに、

ルナは真っ赤になって動けなかった。

「俺と付き合ってくれないか？」

まだお前への気持ちもよくわからない。

俺は短気で怒りっぽくてお前は俺といたら疲れるかも

しれない……。そんな俺でもいいなら、付き合ってくれないか？」

ルナはうれしさのあまり目から涙をこぼすと、返事の代わりに  
しっかりとしっかりと彼に抱きついた。

## 腹黒ディセンダーの一世一代の告白（後書き）

ついにルナがアッシュに告白しました。

最初はめちゃくちゃな告白なので

分からなかった彼ですが、ようやく

ルナの想いに気付いて、自分の気付かなかった  
ルナへの想いにも気づきはじめます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9728n/>

---

腹黒ディセンダーのドタバタな日々

2011年12月5日09時49分発行